偽クノイチ異界譚

蒼枝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
偽クノイチ異界譚

【Ｎコード】
Ｎ７８９２Ｚ

【作者名】
蒼枝

【あらすじ】
神楽紫乃（２１）は忍者村の忍者ショーのアクターとして働き、余暇には戦国オンラインという戦国時代をモデルにしたネットゲームを楽しむ生粋の時代劇オタク。
そんな彼女が世界同士の接触事故に巻き込まれ、とばされたのは異世界「ファリーアス」
どうやら二つの世界間でマナをやりとりするための安全弁、と言う役割を負わされてしまったらしい。
世界の管理者からおわびとして「戦国オンライン」の自キャラと

同等の能力をいただいた紫乃は特に魔王がうんちゃらということも無いのでまったり異世界ライフを満喫することに。

序章（前書き）

蒼枝と申します。
長編を書くのは初めてです。
つたない文ですがご観想いただければ幸いです。
かるい百合展開、暴力シーン、残虐な展開があるかもしれません。
苦手な方はご注意を。

序章

「…武藤陣内殿とお見受けする」
真っ昼間、町はずれの街道で典型的な忍者装束に身を包んだ細身の女が、浪人風で総髪の男に問いかけた。
「忍びか…。さては越後屋に雇われたか。いかにも拙者が武藤陣内じゃ」
「潔いことだ。用件も分かっているようだな…その命、頂戴する」
女は身をすっと屈めると、逆手に短刀を構え浪人に向かって疾走した。
「簡単にくれてやる訳にはいかんな！」
抜き打ちに放った浪人の刀が女の短刀を迎撃する。
鋼同士の激突に、街道に甲高い金属音が響くかと思われたが、

かしっ…

響いたのは何とも迫力のない軽い音だった…

『えー、これで午後の部の殺陣実演は終了となりま～す』
忍者屋敷の中にある女性用控え室（スタッフルーム）で休憩していた私の耳に、そんな放送が流れてきた。
「これにて本日のお仕事終了、と」
終業時間を確認して、私は頭巾と鉢金を外してロッカーのフックに引っかけた。

現実的に考えれば、昼間っから真っ黒い忍者服を着るなどあり得ないし、武士相手に真っ正面から名乗りを上げて戦いを挑むなど忍びの風上にも置けない（？）所行である。
だがこれが観光地のイベントとなれば話は別だ。

新潟県の上越市と糸魚川市の間くらいにこの小さな村…というか観光地はあった。
過疎に過疎が進んだあげく廃村一歩手前になったこの村は、若者と観光客を呼び込む手段として村を忍者村として再開発したのだ。
まあ、忍者を観光に、というのも由来が無いではない。
ここら辺はかの上杉謙信侯のお膝元。軒猿（のきざる）という謙信侯お抱えの諜報集団がいたと言われているあたりなのだ。
で、高校卒業後、新潟市で仕事を探していた私こと、神楽紫乃（かぐらしの）（21）は、2年前故郷が忍者村へと再開発されたとの知らせを受け、内定しかけていた仕事先を蹴って故郷へと帰ってきたのだ。
まあ、うら若き乙女がなんで忍者村！？と思うかもしれないが、何の娯楽もなかったこの村では、じいちゃんと見た再放送の水戸黄門や必殺仕事人などの時代劇が唯一と言っていい私の娯楽だったのだ。
三つ子の魂百まで、の言葉通り、その後も順調に時代劇オタクへの道を進んだ私にとっては渡りに船な職場だったという訳。
「神楽さん、先上がるね～」
「あ、お疲れ様～」
先ほど私と殺陣を演じた甲斐さんというバイトの人がドア越しに声をかけて行く。
わざわざ女子が着替えている（かもしれない）ところまで来て声をかけていくとか、ちょっとどうかなと思うけど、まあ、この村は若い娘が極端に少ないからある程度仕方ない。
私程度の容姿でもけっこうもてるのだ…多少大目に見ている。
「それよりもっ…と」
私はロッカーの中からスマートフォンを取り出すとアプリを起動する。

『戦国の野望オンライン』

戦国時代をモデルにした架空の日本が舞台のネットゲームである。
最近出たこのスマートフォン版は今まで私がプレイしていたパソコン版のアカウントとキャラクターを引き継いで使えるのですでに私のレベルはかなり高い。
忍者ＬＶ８５、陰陽師ＬＶ７６、鍛冶師ＬＶ６０、薬師ＬＶ７７１アカウントで作れるキャラクターは４体、そのすべてがマスターレベルといわれる５０を過ぎている。
装備も自キャラに鍛冶師がいるので不自由はしてない。
たぶん一対一なら「信長」や「家康」クラスのボスとだって勝てるはず。
取り巻きがうっとうしいから現実には無理っぽいけど。
「さてと、今日はどの子にしようかな～♪」
どのキャラを選んでもすべて名前は統一して神楽紫乃（かぐらしの）と本名を使っているのは、古風な名前なので、意外と世界観に合っているのではと思っているから。
「クノイチちゃん君に決めた！」
スマートフォンの画面に映ったクノイチの姿をタッチしようとして…
そのまま私の指は画面に吸い込まれた。

森の中

「む…うぅん」
草いきれの臭いや土の感触に私は意識を取り戻した。
「…なに？」
視界一面に広がるのは木。そして草。広い空。
「え？」
いまいち状況が理解できない。
私はさっきまで忍者屋敷の中で戦国オンラインを…
なのになんで屋外に。しかも森の中に倒れているのだ？
場所自体は田舎だからちょっと山には入ればこんな所はいくらでもあるけど…
「忍者服のままで外出はしないわよね～いくら私でも」
そう、服装はさっきの殺陣イベントの時のまま。鉢金と頭巾を外した忍者服のままだ。
「さらわれた、とか？でも拘束もしないで外に放り出すというのも変だよねぇ…あ！スマートフォン！」
私は重大なことに気が付いた。さっきまで持っていたスマートフォンが、無い。
「うぎゃあ、個人情報の塊だよ？しかも戦オンのアカウント盗られたら目も当てられない」
さっさと村に戻ってスマフォの停止手続きしないと…『ぴろりろりん』
「え」
聞き覚えのある音。メールの着信音だ。
「え、だってスマフォ自体が無いのに「メール」が何で」
と言いかけた時、私の目前に浮かんだのは…メール画面。
まごうこと無き私が持っているスマートフォンの半透明な「画面だけ」が空中に浮かんでいた。

「な…」
私が絶句しているとその画面の中の新着メールが勝手に開く。
『拝啓　神楽様。突然のことでさぞ驚かれているでしょうが、ここはあなたのいた地球、日本ではありません。ファリーアスと呼ばれる、あなたから見れば「異界」です。』
「メールが透明で勝手に！しかも何その中2設定！」
『そんなこと言われても現実なので中2設定とか言っても仕方ないのです』
「メールがリアルタイムで返信！？むしろチャット！？」
私もいろいろ混乱しているんです。
『まずはファリーアス世界の管理者たるわたくしからお詫びを。今回の事故は全くの偶然なのですが遠因はこちらの世界にあるので…』
「…続けて？」
とりあえずこの空中ウィンドウみたいな技術はこんな森の中でできるコトじゃないはずだ。何か異常な事態であるということは分かる。であれば、まずは情報を得なければ。
『私たちの世界ファリーアスは元々あなた方の世界とごく近い位相に存在していたのですが、あなた方が科学技術を発展させたように、私たちの世界では魔導技術が発展したのです。』
「ふんふん」
『…ですが人間達や魔物が使う「魔法」や「魔導」が少しずつ世界の「マナ」を消費して…崩壊の危機に陥っていたのです』
「マナ？」
『魔力や魔法の元となる、世界にあまねく存在するエネルギーです。世界が世界として現実に存在する為の力、といっても良いかもしれません』
「それが無くなるってコトはどうなるの？」
『存在が無くなります。ファリーアスという世界は「元々無かった」ことになるのです』

「…まさか、それをなんとかしてくれってこと？テンプレ召還め…」
『いえ、それはすでに解決しました』
「はん！？」
解決したんなら帰して下さい。てか、今までの説明は何？
『正確に言えば神楽さんがこちらの世界にいることで絶賛解決中です』
なおさら訳分からん。
『ごく近い位相に二つの世界はあると言いましたが、あまりに近すぎて…こちらのファリーアス世界は磁石に吸い寄せられるようにマナが溢れるそちらの地球に引き寄せられていったのです』
「マナなんてファンタジーな力、ウチの地球にはなかったと思うけど」
『そちらは世界構造自体が魔法が発現しない作りになっていますから、マナがあっても使い道が無く、時間とともにどんどん増えていったのです。こちらの世界とは別の意味で世界に悪影響を与えかねないほどに』
「それで足りないそちらと、だだ余りの地球と…世界同士をくっつけてマナをどうにかしようって？」
『世界同士の引力にまかせて、ただ接触するのを放っておいたら救世どころか世界崩壊です…なので私とそちらの世界の管理者はなんとかお互いの世界のごく一部が接触した時点で固定し、少しずつマナがこちらに流れるようにしたのです、が』
「が？」
いやな予感しかしない。
『…その接触地点にピンポイントに神楽さんがいて…神楽さんは地球からファリーアスへのマナの通り道としてこちらの世界に固定されてしまったのです』
「なんじゃそりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
『す、すみませんすみません…』

「こ、固定されたって…帰れないの？」
『現時点ではマナの流れ込んでくる勢いが強すぎて…１０００年ほどたてばなんとかお帰しできると思いますが』
「塵も残ってないよっ！１０００年！？」
『あ、流れ込んでくるマナの影響でほぼ不老なので、１０００年どころか１００００年でも問題ないです』
「……」
『あっ、それにほら、接触した時使っていたデータデバイス…「すまふぉ」の「戦オン」のデータもなるべく反映しておきましたから！こちらの世界でも生活するに困らないと思うんです！』
「はい？戦オンを反映？」
『うん、名前も一緒だし容姿も近かったし、本人との関連づけが楽だったからサービスしときました』
「いや、しときましたって…まあ、生活に困らないなら良いか…それこそなんて中２設定」
『ずいぶんあっさり納得されますね』
「うーん、向こうにはもう家族もいないしね。帰れないなら帰れないで前向きにこれからのことを」「きゃあああああああっ！！」
説明の途中で突如森に響き渡る女性の悲鳴。
うん、中２設定の上にテンプレですね…
「これ、助けに行った方が良いよね…？」
『私はあくまで管理者ですので、どうこうしろとは言えません。が、能力値的には楽勝レベルかと』
「うう…わかったわよ、行きますよ。寝覚め悪い思いするのもヤだし…」
『ちなみに「技能」もそのまま使えますから…がんばって下さいね…私はこれ以上干渉できないのでこれからはあまりご連絡できなくなると思いますが』
「えっ！？ちょ…」
それを最後にプツン…とメール画面は閉じてしまった。無責任な

やつだ。
「もう…技能(スキル)が使えるって行ってたな…「技能変更」とでも言えば…おっと」
目の前にスマフォの画面が再び現れる。ただし今度は「戦オン」の技能編集画面だ。
「とりあえず雑魚狩りセットかな…」
私が事前に設定しておいた技能セットから「雑魚狩りセット」をタッチ。すると…
「おお、体が軽い。移動補助「疾風」の効果かな」

疾風、健脚、回避術極意、会心の一撃、三連撃、不意打ち、火遁の術、反撃術極意、隠れ身、二刀流

がセットされた事が頭の中に情報として入ってくる。
さて、とりあえずいろいろ悩むのは後にしてイベントクリアと行きますか。

初戦闘

「何、何なのアレは」
「こんな街に近い森の中で…ただの蛇ならともかくスケイルヴァイパーってCランク魔獣じゃないのっ！」
「お、お前ら助けろよ！高い金払ってんだから！」
「やれるだけはやってみますがね…最悪荷を捨てて逃げる準備をして下さいよ？」
「ばっ、馬鹿を言うな、七色朝顔４０株だぞ！？いくらすると…」
私が悲鳴の聞こえたあたりに着いた頃は…修羅場も佳境だった。
二頭立ての馬車の陰に隠れているのは小太りの男…その彼を守るように三人の男女が武器を構えて立っている。
それと対峙するのは二メートル以上はありそうな蛇？まるで鎧をつけたような外殻を持つ蛇が5～6匹。
「あの～…お手伝いしましょうか？」
「うぉ！？あんたどこから…ま、まあいい、報酬は出すから奴らを追い払ってくれ！」
私がとりあえず一番近い所にいた小太りの男に声をかけると男は一も二もなくうなずいた。
ふむ、報酬ね。覚えておきましょう。
とりあえず『隠れ身』をまとって大蛇の後ろに移動してから『不意打ち』を発動。
あ、武器装備してなかった。まあいいか。こいつら弱そうだし。
大蛇の一匹に私の手刀がたたき込まれると同時にその首は「すぱーんっ」と小気味よい音を発して胴体から転げ落ちた。
不意打ちだけじゃなく『会心の一撃』も発動したらしい。
「なっ…」
「どこから？てゆうか誰！？」
「素手でって…なに？スケイルヴァイパーの首って素手で刈れる

もんなの！？」
隠れ身はすでに攻撃開始と同時に解除されている。でもたぶんこの程度の敵なら問題ないみたい。
さっきから残りの四匹（一体は男の人がその巨体で押しとどめている）が私を敵と認識したのか一斉に攻撃を仕掛けているんだけど掠(かす)りもしないのだ。『回避術極意』の成果だろう。
「あ、こっちは私がお相手しますので、そっちのおっきい男の人を手伝ってあげて下さい」
「無茶よ！一人で四匹って…全然余裕そうね…わかったわ、誰だか知らないけどありがとう！キュアリー、ゴーバックの旦那を援護するよ！回復魔法の準備をして！」
「わ、わかったクイン！」
ふーん、ゴーバックにクインにキュアリーね。大剣を持った筋肉の塊みたいな大男の戦士がゴーバック、体にぴったりの革鎧にショートソードっぽいのを持った銀髪のグラマラスお姉様がクイン、若草色のマントに身を包んだ栗色の髪の少女がキュアリー…かな。
などとつらつら考えながらも私の体は大蛇の攻撃を自動で回避し『反撃術極意』によって無意識にカウンターを叩き込みクリティカルヒットを量産していく。
「うりゃあ！！！止めだ！『岩斬剣』！！！」
「『ゲイルスラッシュ』！！」
「かの者達に祝福を！『キュアライトウーンズ』！」
私が最後の一匹の首をはねたのと同時くらいに向こうの三人も大蛇を始末したようだった。
「ぜー、ぜー、ざ、ざまぁみやがれ」
「はっ、はっ…Cクラスの中でもっ…こいつらは「堅い」「避ける」「麻痺毒付き」の三拍子そろった厄介なやつだからね」
「おう、お前らの援護があって助かったぜ…って、そっちの敵はどうしたんだ？まさか…」
「うん、さっき助けに来てくれた彼女が四匹とも一人であっさり

…」
「うわー、凄いね、ほとんど一撃だよ」
「信じらんねぇ凄腕だな…すまねぇ、姐さん、助かったよ」
彼らの心からの賞賛と感謝がくすぐったくも居心地悪い…私の力は偶然手に入れたチート能力のおかげなのであって、彼らみたいに命をかけて磨いた物ではないのだ。
「おお、貴様ら良くやったぞ！さあ、護衛ども、ぐずぐずしないで街へ向かうぞ。今日中に納品しなければならん」
どうやら小太りの男は商人で、戦っていた三人は雇われた護衛、ということなのかな。
「ああ、ちいと待って下さいよ…こいつらの額の熱感知宝珠は討伐証明部位だ。これだけでも持って行かないとな…キュアリー、その間に御者の嬢ちゃんの傷を見てやれ」
「うん」
ん？彼らの他にも同行者がいたのか、とキュアリーについて行ってみると…馬車の反対側に小柄な少女が倒れていた。
おお、ネコミミ尻尾付きだ。凶悪に可愛い…が、右腕がほとんど付け根から取れかけている。痛そう。
「ふん、放っておけ！片腕をちぎられたんだ、傷を癒しても片腕じゃ御者はできん」
「…あんたの所有奴隷だろ」
「だからだ！あんな獣人の小娘、夜伽にも使えなければ娼館に売り払うこともできん…格安だからと護衛兼雑用に買い取ってみればあっという間に隻腕だ。大損だわ！」
「…この…」
「ゴーバック、やめときな…コスイネンの旦那、せめて街までは連れてって良いかい？こんな所に置き去りにしちゃあ、いくらなんでも悪評が立つよ」
「む…仕方ないな」
クインが商人…コスイネン（笑）の利を諭して説得する。ぐっじ

ょぶだ！
でも、なんとかできないかな…街についてもそのまま放置じゃ結局のたれ死にしそう。
奴隷の中でも彼女はかなり値が安いらしいし、片腕ではできる仕事も多くは無かろう。
んーもしかして、なんとかできるか？
私は『戦オン』所持品欄を呼び出し、所持品を確認する。これらが実際に使えるんであれば…私は意を決してコスイネン（笑）に声をかけた。
「あの」
「ん、おお！先ほどの！見ておりましたぞ！いやぁ、お強い！助かりました…どうです、あの役立たず共のかわりに私の商会の専属護衛として雇われませんかな？」
「あはは、ごめんなさい、ちょっとやることがあるので…それよりも」
「うん？なんじゃ？」
「報酬を下さると、先ほどおっしゃいましたね？」
「うん？うーん、言った、かな？」
とたんに苦々しげな顔になるコスイネン。
「言・い・ま・し・た・よ・ね？」
「あー、言った！言ったが今は荷を売りに行く最中で余計な金はないぞ！」
往生際が悪いなこのデブ。
「ご安心を。お金ではなく、彼女、譲っていただけません？」
「彼女…て、あの獣人女か？そんなので良いのか」
「ええ、ただ今後の所有権のことで揉めたくはありませんので、きっちりと正式な手続きによる譲渡をお願いしたいのですが。良いですか？」
「あ…ああ、そんな事ならお安いことじゃが…ネイル！こっちへ来い！」

キュアリーさんに治療して貰ってすでに出血は止まっているネコミミ少女、ネイルちゃん。
その真っ白な肩までの髪が血に染まっている。見ていて痛々しい。
「いいか、お前のような役立たずをこちらの方が貰って下さるそうだ。誠心誠意尽くすがいい」
こくり、と頷くネイルちゃん。
「では譲渡契約を…その獣人の首輪に触って下され」
「？こう？」
「結構。おお、そういえばあなた様のお名前をお聞きしていませんでしたな」
「シノ・カグラよ」
一瞬偽名を使おうとも思ったが、正式に手続きを踏んで貰い受けるのであれば偽名はまずいと思い直し本名を名乗る。
「うむ、それでは譲渡手続きを始める」
コスイネンもネイルちゃんの首輪に手を触れる。
「契約神プロミスに申し上げる。セコビッチ商会コスイネン所有の奴隷ネイルをシノ・カグラ殿に無償にて譲渡する。シノ・カグラ殿及び奴隷ネイルはこれを了承するか？」
その言葉と同時にネイルちゃんの首輪を中心にうっすらと光が広がる。何これ。
「了承します」
私がその光にぼけっとしているとネイルちゃんの声が聞こえた。
なるほど、これが「正式な譲渡」なのね。
と言うことは、私も答えなきゃいけないのだろう。二人に対して問いかけてたし。
「りょ、了承するわ」
「よろしい、これで譲渡手続きは完了した。ネイルは煮るなり焼くなり好きにしていいですぞ」
「そんなんしないわよ。愛でるに決まっているじゃない」
静かに収まっていく光を見ながら私はきっぱりと答える。

「こんなっ…ふわっふわな尻尾なのよ！？耳なんかもふもふよ！？これを愛でないでどうするの！？」
「いや…まあ、人それぞれですからな…」
隻腕の獣人少女を愛でると言いきる私に引き気味のコスイネン。
「シノ殿っていうのか…ありがとうな。その、いろいろと。俺はゴーバック。１８レベルの『戦士』だ」
くすんだ短めの金髪、大剣を背負った大男の戦士…ゴーバックが手を差し出し握手を求めながら自己紹介をする。
いろいろ、には私がネイルを引き取ったことも入っているんだろう。厳つい顔に似合わずいい人だ。
ん？１８レベルって言ったな。この世界ってレベル制なの？魔法といいレベルといい、そのまんまＲＰＧの世界だな。
「わたしはクイン。『レンジャー』でレベルは１５。感謝するわシノさん」
体にぴったりの革鎧に銀髪のグラマラスお姉様クインもショートソードを納めてあいさつ。
あーよく見ると凄い美人さんだ。この人。女の私でもお色気でくらくらくる。
「お金はないけど、とりあえずこれは感謝の証し…ね？ちゅっ」
クインさんは私を両腕の中に納めてハグすると、私の耳に軽くキスをした。
うぎゃあぁぁぁ！田舎モンの私には刺激が強すぎるですよ！百合百合な道に走ったらどうしてくれますか！
「うふふ。照れちゃってかーわいい」
「あ、あの、ありがとうございました。私はキュアリー。レベル１３の『治療術師』です」
若草色のマントに身を包んだ栗色の髪の少女、キュアリーが私のそばに駆け寄ってきて上目遣いで尊敬のまなざしを向けてくる。
クインさんが大輪の赤い薔薇ならキュアリーは清楚な白菊。方向性は違うけどめちゃくちゃ可愛い。

ネイルも耳さえ無ければ人間の美少女と言っていい容姿だし、この世界のおなごは美形がデフォルトなのか？
すると私の容姿は、この世界ではそこらの雑草レベルか？ちょっと落ち込む。
「あ…ネイルです。『雑益奴隷』レベル１です。どうかよろしくお願いします…ご主人様」
片腕を亡くしたのがショックなのか、感情のこもらない声で挨拶するネイル。
ごめんね、もう少しまっててね。
「神楽紫乃…こちらの読み方だとシノ・カグラかな。『クノイチ』よ。レベルは内緒」
戦オンのレベルとこちらの世界のレベル制とが対応しているか解らないのでぼかして挨拶に答える。
「うんうん、あんまり高レベルだと知られると依頼が殺到したり、いろいろ面倒なことも多いからな。そこら辺は気にしないさー。しかし、クノイチ…ね。聞いたことのないクラスだなぁ。クイン、解るか？」
「んー、私も初めて聞いた。だが戦闘の様子からして、スピードと技量に重きを置いた『軽戦士』のさらに上位クラス…もしかしたら隠しクラスかもね」
…なんかまた解らない言葉が出てきたな。クラスに上位クラス？職業って事？ＲＰＧの転職システムみたいなものかしらん。
「う、うんそんな感じかな」
適当に話を合わせておく…後でネイルにいろいろ聞こう。
「ま、まあそれより…ネイルの治療をしちゃいましょうか」
ちょっと強引だけど話をずらそう。
「…ごめんなさい、私の技量ではこれ以上の治療は…」
泣きそうになっているキュアリー。
「あ、ちがうのっ！私、たまたま良い薬を持っていてね、効くかどうかは解らないけど試すだけ試してみようかなーって…」

何で皆さんそんな驚いた顔をしてらっしゃいますか。特にコスイネン。
「ど、奴隷にそんな高価な…部位欠損を直せるような魔法薬を使うと！？」
「いや、まあ…効くかどうかは解りませんって。試しにですよ」
いかんな、奴隷に薬って普通は使わないのか？
私は所持品一覧から薬師のキャラで作ってストックしてあった丸薬をいくつか取り出す。
清涼丹…各種状態異常の完全解除。
万金丹…体力の完全回復。
再生丹…部位欠損（一カ所）の回復。
どれもお店で買うとかなり高価だが、クノイチの採集技能で材料を集め、薬師が生成…と手間以外元手はかかってない。
あの自称世界の管理者は戦オンのデータをなるべく反映したと言っていた。なら、たぶん…
「はい、これ飲んで」
懐から出したふりをしてそれぞれ一錠ずつネイルの左手に受け取らせる。
「あ、あのっ！こんな高そうなお薬っ！いただけません！」
「…ネイルは私の奴隷でしょ？」
「は、はい」
「なら黙って飲む。私は自分の物には手入れを欠かさないタチなの」
「は…はい」
覚悟を決めたのかやっとネイルは三つの薬を飲み込んでくれた。
するとみるみる劇的に効果が現れた。
「あ、あ、あ、あ、あ、あ、あああぁぁぁぁぁぁっ！！」
ネイルの全身が光り輝き、体全体に散っていた青あざがまず消えていく。
「あ、熱いですっ！ご主人様ぁぁぁぁぁっ！」

だ、大丈夫かな。過剰反応過ぎるような気もする。抱きしめてあげれば少しは安心するかな。
「大丈夫、ネイル、落ち着いて」
両手の中に抱きしめて背中をぽんぽんと軽く叩いてやる。
「あっああ…」
光が収まりネイルも落ち着いた所で確認すると…
ネイルの右腕はつるっつるの綺麗なお肌で再生していた。
「…おいおい、すげぇな…！こんな劇的な効果を持つ薬なんて、それこそエリクサーレベルじゃねぇか」
「…そうね、売れば一財産よ。それこそ雑益奴隷どころか一流の性奴隷だって買えるくらいのね」
「うう、自信なくします…」
護衛三人組の言葉にびっくり。こっちの世界ではそんな高価なのか。いよいよとなったら売りさばけば金銭面では何とかなりそうだけど…あんまり目立ちたくないし最後の手段にしとこう。
「ネイル、大丈夫？どこかおかしい所はない？」
「は、い、ご主人様…どこも…」
呆然と自分の新しい腕を見つめるネイル。
「ご主人様…変です。マナの動きが以前よりはっきり解ります…それに…私、魔力なんてほとんど無かったはずなのに、今は溢れるくらい感じるんです！」
ありゃ、薬の副作用？と思ったその時…『ぴろりろりん』とメールの着信音。
『あなたは世界のマナの出口なんだから、うかつに「好意を持って」ハグしちゃったりすると相手にマナ…魔力を分け与えちゃうわよ。気をつけてね』
もう連絡しないって言ってたくせに…って、ネイルの異常は薬じゃなくて私のせいかっ！
「ご主人様…」
目が潤んで色っぽいんですけど。ネイルさん。

「わたし、一生ご主人様に尽くします！たとえ奴隷契約が切れても、生涯この身はご主人様の物です…」
そういうとネイルは私の足下に跪(ひざまづ)き、私の足の甲に口付けた。
「そ、そんなことしなくていいの…でも、そうね、私はこの大陸には不案内だから、いろいろ力になってくれると嬉しいわ」
そっとネイルの手を取って立たせてやる。
「はいっ！ご主人様、私にできることなら何なりと！」
正直ネイルの宣誓にちょっと萌えたのは秘密だ。

港町サザンとギルド（前書き）

説明多め。

港町サザンとギルド

森から南下して約1時間、ようやく街…港町サザンが見えてきた。

道中、コスイネンがやたらしつこく私の薬について探ってきたが、「以前貴族の命を救ったことがあってそのお礼に譲り受けた。今のが最後でもう持ってない」という設定でとぼけ倒した。

護衛三人組やネイルともいろいろ話をしたが、ぼろを出さずに情報だけ聞き出すのは難しく…途中『話術・上級』『色仕掛け・上級』という技能があったのを思い出しセットしてみると、今までの苦労は何だったのかと思うくらい情報を引き出すことができた。本来はゲーム中で敵国のＮＰＣをごまかす技能なんだけどね。

それによるとゴーバック達、護衛三人組は『冒険者ギルド』と呼ばれる組織に属しているそうだ。

魔物退治や護衛、探索ｅｔｃを主に請け負う一種の派遣業者みたいな所らしい。今回はコスイネンからの依頼で護衛に付いていたという訳だ。

あと、ギルドでは条件を満たした者達に職業の基礎知識や技能を魔法で焼き付けることもしておりそれを『クラス』というらしい。『クノイチ』はレアな隠しクラス…と思われていた訳だ。

ちなみにネイルの『雑益奴隷』というクラスも存在する。金で買った奴隷を自分の盾としてギルドの仕事に使う者達もいるためだ。

「そっすか、じゃあシノ殿は他の大陸からいらしたんですか」

「ええ、向こうの魔法研究機関の転送魔法の実験が暴発したらしくてね。たまたまお偉いさんの護衛で現場に居合わせたのが不幸だったわ…事故に巻き込まれて気が付いたらさっきの森の中よ」

「それは…大変でしたね」
沈痛な表情で同情してくれるクインさん。
「シノさんの薬も格好も見慣れない物だと思ったら他の大陸からだったなんて…びっくりです」
うん、自分で言ってて苦しい言い訳だと思うが、幸い技能のおかげで不審には思われていないようだ…まあ、異世界人だなんて本当のこと言っても、なおのこと信じてくれないだろうし。
「じゃあ、シノ殿もこの街でギルドに登録すればいいですよ！旅をするなら身分証代わりになるし、シノ殿ほどの腕があればAクラス入りだって夢じゃねぇ」
「うーん、そうしようかな？とりあえず先立つものが欲しいしねぇ」
そう、よく考えたら私はこの世界で使えるお金を持っていないのだ。戦オンの通貨は『貫』だし。
そうこう話しているうちに私たちはコスイネンの目的地、港町サザンへとたどり着いた。
「よーし、ご苦労だったなお前達。依頼完遂証明にサインしてやるから出せ」
「おお、これだ」
「よしよし…うむ、これで良いだろう…ほれ」
ゴーバックが差し出した書類にコスイネンがなにやら書き付けると再びゴーバックに渡す。
その書類を確認したゴーバックの表情がゆがむ。

「コスイネンの旦那、達成評価がCってのはどうゆうこった？荷は無事だったろう」
「ふん、イレギュラーな魔物が出たとはいえ獣人女の片腕を持って行かれたろうが…あの時点ではまだわしの所有奴隷だったからな、評価にマイナスが付くのは当然だ」
「…ち、しかたねぇ」
「まあ、依頼未達成と評価されなかっただけありがたく思え、ということだ。ははは」
コスイネンはそのまま邪悪（主観）な笑みを浮かべつつ、商店街の方へ去っていった。そのまま納品に行くのだろう。
「いちいちむかつくやつね…ネイルちゃんがあんなやつの持ち物だったなんて、考えるだけで腹が立つわ」
私がコスイネンの去った方向を睨みつけながらそう吐き捨てると私の上着の裾をネイルがつんつんと引っ張ってきた。
「ご主人様…でも今はご主人様の物です」
そう言うとネイルは本当の猫のようにスリスリと自分の首筋を私の背中にすりつける。
「ああっ！もうっ！可愛すぎるわネイルっ！」
私はネイルに振り返ると、がばっと両手で抱きしめた。
「でもね、ネイル、できればご主人様でなくて名前で呼んでくれる？」

「え…っと…シノ、様？」
「そう、そう、もう一回」
「シノ様…」
「うん、可愛い可愛い」
「あーっと…シノ殿？」

危うくネイルとの二人の世界に没入しかけていた私はゴーバックの声で我に返った。

「しっ、失礼…つい」
「どうします？とりあえずギルドに登録しに行くなら、ついでなんで案内しますぜ？」
「あ、うん、お願いできるかな」

ネイルの柔らかな肢体から自分を引きはがすのには多大な精神力を要したが、表面上は何ともない振りをしてゴーバック達の後について行くことにした。

「おお、結構ちゃんとした所なのね…役場みたい」
「まあ、この辺は王都に次いで大きな街だからな…ヤクバってのがなんなのかはしらねぇが」

私の独り言に律儀に答えるゴーバック。

「まあ、とりあえず入ろうぜ」

ゴーバック達に続いてネイルと一緒にギルドに入ると、中は役所のような窓口がいくつかあるスペースと、食堂が併設されたような作りになっていた。

「新規登録するならこっちの窓口だな。たしか…」
「はい、ここで結構ですよ」
受付のお姉さんがゴーバックの言葉を聞いていたのか答えてくれる。
「ああ、俺じゃねぇんだ。こっちの姐さんの登録を頼む」
「はい、それではこの用紙に名前とお年、性別、希望クラスを書いて下さい…出身地欄は任意です」
「分かりました」
受け取った記入用紙に書き込んでいく。文字は日本と一緒なのね。…そう言えば言葉も普通に通じていたし、さすが一番近い異世界というべきか。
「それでな、こっちの姐さんは別の大陸からのお客でな。クノイチってクラスらしいんだが…大丈夫かい？」
「クノイチ、ですか。ちょっとお待ち下さい……こちらにクノイチというクラスは無いので全くの新規クラスになります。魔法によるスキル焼き付けが出来ませんが、それでよろしければ新規クラスとして登録できますよ」
「ん、それでかまわない」
技能（スキル）なんて腐るほどあるしなぁ。
「ありがとうございます。新規クラスのスキル情報をご提供いただける場合は登録料が無料になりますがどうしますか？」
「んー、それって所持スキル全部さらすって事？」
「いえいえ、クラスに独自のスキルなら一つで結構ですよ。汎用

スキルなら5つ位お願いします」
「ならいいか…スキル情報提供します」
「ありがとうございます。こちらの感応石に手を置いていただいて提供いただけるスキルを思い浮かべて下さい」

と、差し出されたのはマウスパッドみたいな真っ白な石。
それに右手を載せクノイチ特有の技能を思い浮かべる。

「はい、読み取り終了です。ご提供いただいたスキルは

『影縛り』消費魔力０
相手の影に手裏剣などを打ち込むことによって
暗示をかけ、動きを封じる効果がある。
関連能力値　ＭＩＤ、ＤＥＸ
抵抗能力値　ＭＩＤ
基本成功率８０％

で間違いないでしょう…か…って…えええぇぇぇ！？消費魔力０で麻痺効果、成功率８０％ぉ！？いいいいい、良いんですか！？こんな奥義クラスのスキル登録しちゃって！？」
「かまいませんよ」
「すげぇな、なんだその鬼スキル」

ゴーバックもしきりに感心しているが、そもそも、こっちで忍者になれる人っていないだろうし、私自身は影縛りに対する耐性があるし、影縛りの上位スキルも持っているし。
元になった戦オンでは死にスキルだったんだよね。

「あ、ありがとうございます。それでは後は書いていただいた書類の内容をギルドカードに転写して……はい、これに先ほどのよう

に手を置いて下さい」

渡された先ほどのよりも小振りな…言ってみればスマートフォンサイズの板に手を置く。

「ちょっと一分ほどお時間かかります……はい、終了です」

一分間の内にスマフォサイズの板は漆黒に変わっていた。

「クラスによってカードの色は変化します…が、ここまで真っ黒というのも珍しいですね…カードを持ってみて『ステータス表示』と念じてみて下さい」

「はい」

ステータス表示…むん。

氏名シノ・カグラ　性別女　年齢２１歳

総合レベル８５　ギルドランクＦ

クラスレベル『クノイチ』８５

ステータス

ＨＰ２５００

ＭＰ測定不能

ＳＴＲ　１７

ＶＩＴ　１５

ＤＥＸ　１８

ＳＰＤ　１８
ＩＮＴ　１３
ＭＩＤ　１８

称号
　世界の天秤
　クノイチマスター

固有スキル
　キャラクターチェンジ
　マナ解放
　マナ譲渡

属性補正
　闇＋５０％
　炎＋２０％
　光－１０％

祝福
　名も無き世界の管理者

…なんか、うかつに人に見せられない内容ばっかりな気が。
ＭＰ測定不能って！？称号世界の天秤ってなに！？キャラクターチェンジってのは、たぶん別キャラ使うための能力だと思うけど…。

「あ、あの」
「はい？」
「これ、証明書代わりに使いたい時って、全部見せなくちゃダメなんですか？」

「ああ、いえ、名前、クラス、ギルドランク、性別、年齢以外は消すことが出来ます。消したままでも証明書としての効力はありますよ。それに…ギルド職員でもそれ以外のステータス部分は余程のことがない限り見ることが出来ないので、プライバシー面も守られます」

うん、それなら何とかなるかな。

「異常なく表示できたなら各項目の説明をしたいと思いますが」

「あ、お願いします」

「こほん、それでは…

氏名、性別、クラスレベル、年齢、はそのままの意味です。

総合レベルは各クラスで得た経験値をすべて合算されたものから算出されます。

ギルドランクはギルド内でのシノ様の評価です。

ギルドランクは上から順にＥＸ、Ｓ、Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅ、Ｆとあります。

登録したばかりのシノ様はＦとなりますね。

ちなみにＣでベテラン、Ｂで一流、Ａで超一流、Ｓは英雄クラス、ＥＸは伝説クラスと言われています。

ＨＰは生命力

ＭＰは魔力

ＳＴＲは腕力

ＶＩＴは体力、頑健さ

ＤＥＸは器用さ

ＳＰＤはスピード

ＩＮＴは知力

ＭＩＤは精神力

をそれぞれ表します。

ＨＰＭＰ以外のステータスは成人で平均８～１２で、人間だと最高値は各１８です。
しかし、レベルが高いほど実際の効果は補正がかかります。
称号は神々が認めた二つ名のようなものです。
固有スキルはクラス特有のスキルや個人の特性によるスキルで、スキルスロットに入れなくても効果を発揮します。
属性補正は属性を持つ攻撃の威力や受けるダメージに関係します。
もちろん＋の方が良いですが＋２０以上を持つ方は滅多にいません
祝福は加護を受けている神やそれに準ずる存在のことです。
と大まかに言ってこんな所です」

「お、お疲れ様…」

凄い、一気に息継ぎ無しで言い切ったよ。

「依頼の受け方などは隣の窓口でご用命下さい」
「うん、ありがとう」
「よし、無事に登録できたみてぇだな。次はこっちの窓口だ」

私の登録を待っていたのかゴーバックが私を隣の依頼窓口に連れて行く。

「とりあえず今日はもう遅いし依頼を探すのは明日にしようかと思うんだけど」
「ああ、違うよ、シノ殿が倒したスケイルヴァイパーってのは常時討伐依頼が出ていてな、討伐証明部位を持っていきゃ、その場でギルドポイントと報酬に交換してくれるんだ」
「なんと」

「で、これがシノ殿が倒してくれた分、５つの熱感知宝珠…スケイルヴァイパーの討伐証明部位だ。これをカードと一緒に窓口に出してみな」
「わざわざ私の分まで拾ってきてくれたのか」
「まあ、命のお礼としちゃ、安いけどな…こっちも今回はほとんど儲けが出なかったんで勘弁してくれ」
「そんなことはないよ、ありがとう」

体格の割に気の回る男だ。ありがたい。
早速依頼窓口に五つの宝珠を提出する。

「ではこれを頼む」
「はい、熱感知宝珠…スケイルヴァイパーですね？五つも！…少々お待ち下さい」

依頼窓口のお姉さんが奥に引っ込んでなにやらごそごそやってたかと思うと二つの袋を持って戻ってきた。

「こちらの小さな方には金貨2枚、こちらの大きな方には銀貨が５０枚入っております。スケイルヴァイパー一体５０００クラム、合計２５０００クラムお受け取り下さい」
「ありがとうございます…ところでこれってこっちの大陸ではどのくらいの価値なの？」

前半は窓口のお姉さんに向けて。後半は横にいたゴーバックへの問いだ。

「そうだな。１０クラムもあればそこそこ美味い食堂で飯が食えるな。１００クラム…銀貨一枚あれば一泊2食付きで中程度の宿に泊まれるぞ」

「…大金だな」
「まあな。でも冒険者は武器や防具、治療費で出て行く金も多いからな…油断しているとすぐ無くなるぜ」
「心しよう」

まあ、しかし、これでとりあえずはネイルと生活していく目処が立ったな。
今日はいろいろなことがあって疲れた（主に精神的に）さっさと宿を取ってネイルを抱き枕にして寝よう…

港町サザンとギルド（後書き）

シノさんが凄い勢いでダメ人間になっていってます（笑）

ネイルとお泊まり（前書き）

前話くらいから意識的に行間を空けるようにしてます。読み難いとの声が多数あれば元に戻すかもです。

ネイルとお泊まり

「お待ちください！」

踵（きびす）を返して帰ろうとした私に受付のお姉さんが声をかける。

「まだギルドカードをお返ししてませんわ」

…すっかり忘れていた。もうネイルとの甘い一夜にしか気が向いてなかった。

「今回のスケイルヴァイパー討伐でポイントが一気にDランクに到達しましたわね。おめでとうございます」

「え？二階級一気に？そんなに一気に上がるもんなの？」

「ええ、本来なら一匹であろうとCランクのパーティ…たとえばそちらのゴーバック様とかのご一行が討伐に向かうべきレベルの魔獣です。それをお一人で、しかも5匹も倒されたとあっては…Fランクに留めておく方が無理ですわ」

「まあ、実際シノ殿がFランクなんて言ったら俺たちの立つ瀬がないし、新人どもの依頼を横取りするようなもんだしな…素直に受けておいたらいいんじゃねぇか？」

なるほど…そういう理由もあるのか。

「分かりました、ありがたくお受けします」

「受けられる依頼は自分のランク＋1～－2までだぜ。シノ殿のDランクならCからFまでってこった」

「補足説明ありがとうございます」

ゴーバック、説明役を奪われた受付のお姉さんが睨んでるぞ。

「まあ、細々としたことはまた明日依頼を探す時にでも聞くよ…とりあえずゆっくりお風呂にでもつかって休みたい」

「ん？浴場付きの宿屋か？そりゃあ…ちょっとお高いところしかないぞ。ここら辺なら…」

ギルド直営の宿に泊まるゴーバック一行と別れて、私はゴーバックから紹介されたその、「ちょっとお高い宿」にネイルをつれて向かった。

「浴場が使えないってどういうこと？」

明らかにネイルの方を見て大浴場の使用を渋ってきた従業員に私は詰問した。

「いや、その…奴隷も一緒となると衛生面から嫌がるお客様もいらっしゃいまして…」

「ほう…私のネイルが汚いとでも…？」

「い、いや、その…」

実際、服はともかく清涼丹を飲ませた時点で、病気どころかフケの一片まで綺麗になっているのだが、そこまでは分からないか。

「あ、あの、シノ様、私でしたらお気になさらず…」

「いやよ。私が、この手で！ネイルの爪から毛並みまでぴっかぴっかに磨き上げたいの！」

「で、でしたら…その、妥協案というか」

「ん？」

「少しお高いですが、スイートルームであれば…共同浴場ではなく、室内に浴槽がありますので」

誰にも邪魔されず二人っきりのバスタイム。

「仕方ないわね。それで手を打つわ」

即答だった。

「ふんふ～ん♪」

鼻歌を歌いながらネイルの髪にブラシを通す。

「髪も栄養状態が悪かった割に艶々ねぇ…ほら出来た。可愛いわよ」

甘いバスタイムも終わり、私は脱衣所に設置された銅鏡の前でネイルの髪をいじっていた。

ちなみにネイルは着やせするタイプでした。背が低めの割にメリハリの効いたボディで…いろいろ暴発しそうになるのを押さえるのにいっぱいいっぱいでした。

ちなみに一泊５００クラム。それだけの元は取りましたよ！

「あ、ありがとうございます。でもっ！シノ様こそお綺麗で…」

「ふふ、ありがと」

別にネイルの言葉は主人に対するお世辞ではない。

この世界に来て初めて鏡を見て分かったのだが、私の容姿は元の私の面影はあるものの、だいぶ美化されていたのだ。

これもゲームキャラクターである『神楽紫乃』がリアルの私に影響した、ということなのだろう。

「そろそろ、お食事も部屋に用意されている頃だからごはんにしよっか」

「はい」

この世界に来て初めてのまともな食事である。いやが上にも期待は盛り上がったのだが。

「なによコレ」

確かに値段だけのことはある。食べきれないほどの豪華な食事がテーブルの上に並べられている…私の分だけが。

ネイルの分はというと、テーブルの下にトレイが置かれ、食べかけのパンとスープと焼き魚が置かれている。

明らかに残飯だ。しかもスプーンもフォークもない…手づかみで食べろとでも言うのか。

そしてその前に、ネイルが直接床に座っている。

「すごい、白いパンです…お魚もあるなんて」

しかし、そんな待遇にネイルは心から感激しているように見える。今までどれほど劣悪な環境だったんだ。

「ネイル、そんな冷たい床に座ることはないわ。一緒にテーブルで食べましょう？」

「そ、そんな…奴隷がご主人様と一緒のテーブルでなんて恐れ多いです」

「ふーん、そう…どうしても？」

「は、はい」
「…なら」

所持品欄を展開、『畳』を選択。これはゲーム内で個人の屋敷を持った際に屋敷の内装をカスタマイズするアイテムの一つだ。

「設置場所選択…設置×6…ついでにちゃぶ台…設置×1…座布団も…設置×2、と」

あっという間に冷たい石の床に6畳の簡易和室スペースが出来た。

「え？これは…どこから！？」
「んー、食事の後にね」

さらに所持品欄から食料アイテムを選択。「戦オン」は日本各地の名物が食料アイテムとして登場するので種類がとても豊富だ。

「月見うどん、へぎそば、笹団子、あんころもち、おけさ柿、蛤の酒蒸し、おやき、ほうとう、ちゃんちゃん焼き、南高梅のおにぎり、鶏の水炊き…」

どんどん取り出してちゃぶ台に並べる。

「…見たこともないご馳走です。シノ様のお国の…？」
「そゆこと。さ、一緒にたべよっか」
「え、でっでも」
「私の国では床に敷いた畳の上に直接座って生活するんだよ？もちろん食事もね」

結果…はじめは恐る恐る食べていたネイルも次第にその速度は速

くなっていき…最後は泣きながらかき込んでいました。
大丈夫、ゆっくり食べていいんだよ。

食後1時間ほどして。私はネイルと今後のことについて話し合うことにしました。

「まず当面の目的は…土地を買う事と、ネイルを奴隷の立場から解放する事です」
「し…シノ様っ！わ、私何か粗相しましたでしょうか！？す、捨てないで、ください…」

涙目で見上げないでくださいネイルさん。思わず襲いそうになります。

「馬鹿ね、捨てるわけないじゃないの…「私の」ネイルが奴隷なんて呼ばれて蔑まれるのに我慢がならないだけよ。それに…「奴隷でなくなってもシノ様のモノですっ」て熱い告白をくれたのは誰でしたっけ？」
「あ、あぅ…」

真っ赤になって黙ってしまうネイル。可愛い。

「土地は…ね、家を建てる為。土地さえあれば建物の方は当てがあるからなんとでもなるわ」

当て、というのは戦オン内で持てるマイホーム「屋敷」システムだ。
身分と多額の金銭が必要であるが、もちろんこれを私は所有していた。
後はこれを設置するだけの広くて利便性の高い土地があれば、あ

っという間にマイホームの完成である。

「そうね…貴族の屋敷を建てられる位の土地って…町中だとどの位するのかしら」

「想像もつかないですけど…１００００００クラムじゃ足りないと思います」

「そう、じゃあ余裕を持って３００００００クラム…金貨３０枚ってところかしらね…目標金額は」

Ｃランク魔獣で一体銀貨５０枚だから、そこまで無理な金額じゃないわね。

「で、問題は奴隷身分からの解放ですが。どうなの？これって主人である私が自由にしていいよって言ったら奴隷じゃなくなるの？」

「公的な身分としての奴隷ならその通りです。昼間にやったみたいにこの『隷属の首輪』にシノ様が触れながら契約神プロミス様に解放を約束すれば…」

「ふんふん。こんな感じ？『契約神プロミスに申し上げる。クノイチ、シノ・カグラ所有の奴隷ネイルは主である私の意志により対価無くその身分を解放する』」

おお、ネイルの首輪が光ってるよ。何となくそれっぽい事言っただけなのに成立するんだ…

「はい、これで私の公的な身分は奴隷から平民になりました…ありがとうございます、シノ様…でも…」

「ん？なあに？」

「奴隷でなくなっても、私、シノ様にお仕えしたいんです。今度は私の意志で…『奴隷』ではなくて『従者』にしていただけませんか？」

「そうね、それでネイルがいいのなら…」
「ありがとうございます、シノ様…」

こちらこそ、だよ。
異世界に一人で飛ばされて心細いところに、すぐにこんなに慕ってくれる子が出来るなんて…幸運といっていいよね？

「あ、そういえば…さっきから「公的な身分」としての奴隷って言ってたけど…どういう意味？」
「ええと、私は冒険者ギルドに『クラス雑益奴隷』として登録されていますので、そちらはそのままなんです」
「え、」
「でも、そちらはそんなに不利益がある訳でも…」
「だめっそっちも何とかする！」
「と仰っても…クラスチェンジするにはクラスレベルが１５以上必要ですし」
「クラスチェンジすると…何になれるの？」
「ええと、たしか『メイド』か『従者』…」
「それだ！」

ネコミミメイドさんきたぁぁぁぁ！！

「明日から資金稼ぎを兼ねてネイルの急速レベルアップ作戦…作戦名『パワーレベリング』を発動しますっ！」
「は、はいっ！」
「ついては…参考の為にネイルのステータス見せてもらってもいい？私も見せるから」
「はい、もちろんです！えーと…どうぞ」

ネイルのギルドカードはその体毛と同じ純白だった。そこに表示

された内容は…

氏名ネイル・サヴァン　性別女　年齢１４歳

総合レベル１　ギルドランクＦ

クラスレベル『雑益奴隷』１

ステータス

ＨＰ　２５

ＭＰ　８００

ＳＴＲ　１４

ＶＩＴ　１５

ＤＥＸ　１２

ＳＰＤ　１５

ＩＮＴ　１０

ＭＩＤ　９

称号

マナの申し子

固有スキル

部分獣化

属性補正

闇＋１０％

光＋１０％

祝福

神楽紫乃

「へー、すごいじゃない！ＭＰ８００とか、かなり多いんじゃないの？」
「あ、あれ…いえ、前は１０位しか無かったはず…称号マナの申し子？属性も闇＋１０が増えて…祝福欄にシノ様のお名前が！？」
「あ、あはは…何でだろーねぇ…」

あれか…ハグでマナ大量に与えちゃったせいか。ここまでくると誤魔化すのも無理が…ある程度話さなくちゃかな。

「じゃあ、次は私ね」

すべての情報を開示状態にして、カードをネイルに渡す。

「れ…レベル８５…？レベルの限界値って５０のはずじゃ…ＭＰ測定不能！？それにこのステータス…限界値の１８が三つも…ほかも軒並み平均以上で…ぞ、属性補正＋５０なんて伝説にも無いはずです！！」

私は、異界からきた事、二つの世界のマナの橋渡しとして存在している事を話さなければならなかった。
たとえそれが原因でネイルに恐れられ去って行かれる事になっても。
だがすべてを聞き終えたネイルは屈託のない笑顔でこう言った。

「さすが私のご主人様です」

私は思わずネイルをベッドに引き倒して…思う存分ネコミミと尻尾をモフり倒した…

「あっ、あぁっ！シノ様、そこ…敏感なんですぅ…」

途中からネイルの声がやたら色っぽくなって息も絶え絶えという風だったが、あえて無視した。

ネイルとお泊まり（後書き）

次回はパワーレベリングのお話かな。
ネットゲームなどでレベルの高いプレイヤーが低レベルプレイヤーを連れて強敵の沸く所で一気にレベルアップさせることを言います。
たぶん。

ネイル・サヴァン視点（前書き）

すみません、パワーレベリンク編の前にこれを入れておかないとどうにも都合が悪かったので、急遽入れました。次こそはパワーレベリング…

ネイル・サヴァン視点

森が燃えていた。
私の故郷、サヴァンの森。
私は森の中に小さな集落を作って住んでいた獣人族の一人、ネイル。サヴァンの森のネイルだからネイル・サヴァンだ。

それがある日、気がつけば村も森も燃えていた。
周りからは仲間達の怒号や悲鳴が聞こえている。
果実の採集から戻ってきた私がその光景に呆然としていると、後ろから下卑た男の声が聞こえた。

「まだ餓鬼だが…まぁ、いいか」

途端、私は頭に強い衝撃を感じて、意識を失った。

それが奴隷狩りに来た人間どもの仕業だったと分かったのは、檻に詰められ、馬車で運ばれて行く途中だった。

「獣人の奴隷なんて何に使うんだよ…魔獣との相の子なんざ誰も抱きたがらねぇだろう」
「戦闘奴隷さ。隷属の首輪があれば忠実で屈強な奴隷のいっちょあがりだからな…」
「後は護衛に使ってもいいし、戦の盾として使い捨ててもいい。王都でも需要は多いな」
「ふん…いずれにせよ凶暴な獣人の村一つ皆殺しにしたんだ、報酬は弾んでもらわねぇと割に合わんな」

その後もじっと御者席の男達の話に耳を澄ませていると、この奴

隷狩りが人間の世界でも違法な行為であり、奴隷の出所を隠す為、捕らわれた者達以外は皆殺しにされた事が分かった。

その話を聞いて以後、私は何度も脱走しようとしたが「隷属の首輪」のせいでことごとくが失敗に終わった。

「隷属の首輪」は主の一言で強く首を締め付ける魔法と位置探査の魔法が掛かっている。

異様に広いその魔法の効果範囲のせいで一度も成功しなかったのだ。

脱走する度に私の体には鞭の傷が増えていき、食事は家畜の餌に劣るモノになった。3回目からは焼き印を押された。

「淫売奴隷」「豚獣人」「食肉用」その体を千切られるような痛みと、日々衰えていく体力に私は段々と反抗する意識を刈り取られて行き…

最後には主人の足下で残飯を手を使わずに貪る、そんな奴隷の生活を受け入れてしまっていた。

そんなある日、主人の荷馬車の御者をして森を進んでいた私は…

一瞬にして右腕を食いちぎられていた。

そこにいるはずのない強力な魔獣「スケイルヴァイパー」の集団にぶち当たったのだ。

「きゃあああああああっ！！」

久しく出していなかった痛みによる絶叫が森の中に響いた。

そして、そのおかげで私は生涯の真の主人に、出会った。

「冗談…人間が素手でスケイルヴァイパーを切り裂く…？」

私達の一行の危機に駆けつけたその人は、つややかな黒い髪をポニーテールにして、だぶついた黒い上着とズボンという出で立ちの極めて美しい女性だった。

武器の一つも持っておらず、防具らしい防具もない。しかしスケイルヴァイパー相手に見せたその働きはとても人間とは思えなかった。

私はその美しい、まるで舞のような動きに目を奪われていたが、やがて血を流しすぎたのか、意識を失った。

目を覚ました私に待っていたのは怒濤の急展開だった。

助けてくれたあの人が私を欲しているという。

私はあの人への報酬として譲渡される事になった。

「よろしい、これで譲渡手続きは完了した。ネイルは煮るなり焼くなり好きにしていいですぞ」

「そんなんしないわよ。愛でるに決まっているじゃない。こんなっ…ふわっふわな尻尾なのよ！？耳なんかもふもふよ！？これを愛でないでどうするの！？」

変わった人だ。

獣人は魔獣との合いの子と呼ばれ、人間からは忌み嫌われていると思っていたが…

その獣人であり…しかも隻腕である私を、この人は愛でるという。

獣人の誇りである耳と尻尾を褒められたのは少し嬉しかった。

「神楽紫乃…こちらの読み方だとシノ・カグラかな。『クノイチ』よ。レベルは内緒」

新しい主人はシノ様、というらしい。クノイチというクラスも聞いた事が無いが、あの戦闘の様子からしてかなり高レベルなのだろう。

それに、新しいご主人様は人を驚かせるのが趣味に違いない。部位欠損を再生させるような超高価な魔法薬を奴隷に使わせるなんて！

おかげで私の右腕はあっさり復活した。それどころか焼き印の痕も跡形もない。むしろ以前より調子がよい。

おまけに魔力量がとんでもない事になっている気がする。

薬の効果というよりむしろ…ご主人様に抱きしめられた時に感じたあの不思議な多幸感…あれのせいのような。

私はその不思議な多幸感に酔っていたのだろう。でなければあんな恥ずかしい台詞…

「わたし、一生ご主人様に尽くします！たとえ奴隷契約が切れても、生涯この身はご主人様の物です…」

ぎゃー思い出しただけで死ねるっ！しかもあの時ご主人様の靴にキスなんかしちゃったりして！！

それからの私は、新しい主人の寵を得ようと必死で媚びを売った。

もうすでに私は心の奥まで奴隷であったのだろう。絶対的な強者であるご主人様の庇護を失うまいとその様は見苦しいほどだった。

だが、結果からしてそれは余計な心配であったと言える。

ご主人様の非常識さとお人好しぶりはそれほどまでに突き抜けていた。

奴隷を風呂に入れる為５００クラムもするスイートルームを取るとか、ましてや一緒に入浴し奴隷の髪を洗うとか…あべこべではないか。

そして…食事の時。
奴隷は床で残飯を食うもの、と、食卓への同席をご遠慮申し上げると、とんでもない事をやりだした。

堅くて四角いマット、足の短いテーブル、クッション、そして見た事もないご馳走の数々。
これらをご主人様…シノ様は『空中から取り出して見せた』のだ！
無から有を作り出すなどいくらシノ様が別の大陸から来たといってもあり得るのか？それはもはや神の領域ではないのか…

しかしそんな疑問も一時の事だった。恐る恐る手をつけたそのご馳走のあまりの美味しさに、気が付けば貪るように食べていた。

食後、少ししてシノ様は私を奴隷の身分から解放すると言い出された。
思わず「私を捨てないでください！」なんて馬鹿な女の台詞を吐いてしまった…
ダメです。もう私はかなりシノ様にやられてしまった様です。
シノ様と離れて自由を得るより、シノ様に飼われる奴隷でいたい、と、そう思うまでに。

結局、シノ様は私の奴隷、という立場が気に入らないだけで、私と離れたい訳ではない事が分かり、奴隷の身分から解放していただいた後、改めて従者として側に置いていただける事になりました。

その後、公的な身分としての奴隷は平民になりましたが、ギルドでのクラスとしては雑益奴隷のままだという事が分かったシノ様は「ならクラスチェンジしてメイドになっちゃえばいいのよね…うふふふふネコミミメイドきたぁぁぁぁ！」と何かよく分からないポイントにツボがあった様で私のレベルアップ計画というものを練っ

ているようです。

シノ様にはいろいろ驚かされっぱなしですが、この日最大の驚きはギルドカードの交換をした時でした。

シノ様にカードを示す為、情報を開示状態にすると、以前と明らかに違っていたのです。

氏名ネイル・サヴァン　性別女　年齢１４歳

総合レベル１　ギルドランクＦ

クラスレベル『雑益奴隷』１

ステータス

ＨＰ　２５

ＭＰ　８００

ＳＴＲ　１４

ＶＩＴ　１５

ＤＥＸ　１２

ＳＰＤ　１５

ＩＮＴ　１０

ＭＩＤ　９

称号

マナの申し子

固有スキル

部分獣化

属性補正
闇＋１０％
光＋１０％

祝福
神楽紫乃

…ＭＰ８００って何でしょう。祝福欄にシノ様の名前があるって言う事はその効果なのでしょうか。
そもそもシノ様は『祝福を与える側』の存在という事なのですか！？

「へー、すごいじゃない！ＭＰ８００とか、かなり多いんじゃないの？」
「あ、あれ…いえ、前は１０位しか無かったはず…称号マナの申し子？属性も闇＋１０が増えて…祝福欄にシノ様のお名前が！？」
「あ、あはは…何でだろーねぇ…」

シノ様はごまかし方はあまりうまくないようです。目が泳いでおられます。
しかし次に他言無用と見せていただいたシノ様のカードの方はもっととんでもなかったのです。

氏名シノ・カグラ　性別女　年齢２１歳

総合レベル８５　ギルドランクＤ
クラスレベル『クノイチ』８５

ステータス
ＨＰ２５００
ＭＰ測定不能
ＳＴＲ　１７
ＶＩＴ　１５
ＤＥＸ　１８
ＳＰＤ　１８
ＩＮＴ　１３
ＭＩＤ　１８

称号
世界の天秤
クノイチマスター

固有スキル
キャラクターチェンジ
マナ解放
マナ譲渡

属性補正
闇＋５０％
炎＋２０％
光－１０％

祝福
名も無き世界の管理者

「れ…レベル８５…？レベルの限界値って５０のはずじゃ…ＭＰ測定不能！？それにこのステータス…限界値の１８が三つも…ほかも軒並み平均以上で…ぞ、属性補正＋５０なんて伝説にも無いはずです！！」

おまけに固有スキルを三つも持っていて、『世界の天秤』とか、いかにも凄そうな称号があったり。

…本気で精霊か神様の一柱なんじゃないかと思えてきました。

そしてシノ様はその私の疑念に気が付いたのか、ご自分の秘密を打ち明けてくださいました。

異世界から世界同士の接触事故で来訪した事。

その際、マナの通り道としてこちらの世界に固定されてしまった事。

自分が好意を持って抱きしめてしまった為に、私に祝福という形で影響が出た事。

正直、一般の人間からこんな事を聞かされれば頭を疑うところですが、シノ様の非常識な能力を知っている私としては、むしろ納得という所です。

ちら、とシノ様の様子を見てみると、親に怒られるのを待つ子供みたいな目でこっちを見てきます。

正直、従者にあるまじき事ですが…可愛い、と思ってしまいました。

この微妙な空気を動かそうとつい、

「さすが私のご主人様です」

と偉そうな口を叩いてしまいました。
ですが、なぜかその私の言葉に感極まったシノ様にベットに押し倒されました。

や、別に嫌ではないんですがっ！一応花も恥じらう乙女としてですね、初めての方が女性とか…

「はむっ」
「あうんっ！」

耳？耳ですか？

「さわさわさわ」
「ひうっ」

しっぽも？

「もふもふさわさわ…」
「あっ、あぁっ！シノ様、そこ…敏感なんですぅ…」

同時ぃぃぃーーー！！

と、いうかですね、肝心の場所はまったく触れてくれないのに、耳と尻尾だけでもう訳が分からない位乱れてしまいました。

さすが私のご主人様。こっちの方も達人級なのですね…テクニシャン…
等と思いつつ私の意識は優しい闇に溶けていきました。

パワーレベリング（1）（前書き）

あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします。

…ところで、タイトルに偽りアリです。

正確にはパワーレベリングの準備ですね。戦闘までは行きません。

パワーレベリング（1）

翌日、私はネイルを連れてギルドへと赴いた。
ネイルのレベル上げにちょうどいい討伐系の依頼を探す為である。

「あ、シノさん…昨日はありがとうございました」

ギルドに入った私たちに気がついて声をかけてきたのはゴーバック一行の治療術師、キュアリーだった。

「こんにちは。あなた達も依頼探し？」
「あ、いえ…ゴーバックさん達はまだ休んでます…私は…昨日の戦闘で私だけ明らかに実力不足というか…ゴーバックさん達の力になれなかったというか…それで…」
「レベルアップの為に一人で出来る依頼を探してたのね」
「…はい。あの、シノさん達は？」
「同じく依頼探し。ネイルをレベル１５まで上げちゃおうと思って」
「え？」
「せっかく奴隷から解放したのに、ギルドのクラスではいまだに「奴隷」の名が残ったままだって言うから…だったらクラスチェンジしちゃえって思って」
「解放？あ、そういえば隷属の首輪が外れてますね…良かったですね、ネイルさん」
「どうも」

私の後ろから顔だけ出して答えるネイル。
奴隷時代のトラウマのせいで軽い対人恐怖症の気があるのかも。

「でも…そんなに簡単にレベルって上がるものでは無いですよね」
「まあ…普通ならね」
「……」

なんか急に考え込んじゃったな。キュアリーちゃん。
それはともかく、ちょうどいい依頼があるか掲示板を見てみますか。

「あの。普通じゃない手段がある、のですか？」
「ちょっとスパルタだけどね…あ、これなんかいいかも」

『ランクC　魔獣の素材採集
最近、西の森に魔獣が増えつつあるのでこの機会に素材を確保しておきたい。
対象　ブレードマンティスの鎌（5組以上）
　　ホーンドウルフの角（5本以上）
報酬金貨3枚　質、量によって追加報酬あり』

「…ランクCですよ？」
「そうね」
「ネイルちゃんまだFランクのレベル1ですよね」
「そうよ？」
「む、無茶ですよっ！！Cランクって言ったら昨日のスケイルヴァイパーと同レベル帯ですよ！？シノさんは大丈夫でも…」
「問題ありません」
「…て、ネイルちゃんっ！？」
「シノ様が大丈夫と言えば大丈夫なのです…それに…シノ様が私に死ね、と仰るのならば即座に死んで見せましょう」
「…シノさんの奴隷ではなくなったんですよね？」
「ええ。奴隷契約は解消されました。しかし…」

ぽっと頬を染めるネイル。

「あんなことやこんなことをされては…もはや契約などとは関係なく私の魂は未来永劫シノ様の下僕です」

「なに？！何されたの！？何で頬染めてるのーー！！？」

人聞きの悪い。ちょっとネコミミや尻尾をネイルの意識が飛ぶまで愛でただけだというのに。

「まあ、とにかく。ネイルの安全を確保しつつ経験を積ませる事は可能だということよ。ちょっと準備がいるけどね」

「……あの」

意を決したようにこちらを見上げるキュアリーちゃん。

「今回の依頼…私もご一緒させてはいただけませんか」

どうしようか。二人同時に守るのは難しいかな…ステータス次第か。

「うーん、ステータス、見せてくれる？私の方はちょっと理由があってカードを見せられないんだけど」

「はい、かまいません！」

カードを起動し渡してくるキュアリー。カードの色はパステルピンクだ。

氏名　キュアリー・トーレット　性別女　年齢１５歳

総合レベル１３　ギルドランクＤ
クラスレベル『治療術師』１３

ステータス
ＨＰ　２５５
ＭＰ　２６３
ＳＴＲ　１０
ＶＩＴ　１０
ＤＥＸ　１１
ＳＰＤ　９
ＩＮＴ　１５
ＭＩＤ　１６

称号
無し

固有スキル
治療効果＋５％

属性補正
光＋５％

祝福
医療神フェイタス

「ふむ。技能とか魔法とか何持っているの？」

「あ、それはですね、ここをこうして…」

キュアリーちゃんがギルドカードの画面を横にスライドさせると別の画面が出てきた。

…そんな機能もあったんだ。スマートフォンみたい。

スキルスロット　2

セットスキル　【治療術初級】【治療範囲拡大】

習得技能　治療術初級（キュアライトウーンズ、キュアポイズン）、治療術中級（シールド、レジストスリープ、ライト）、治療範囲拡大

「ネイル、スキルスロットって普通、どのくらい持っているものなの？」

「総合レベルが１の時点で一個、それ以降レベルが１０上がるごとに一個ずつ増えていきます。最大で４０レベル時の五個ですね。５０レベルに達した者達のさらに極一部がスロット六個になると言われていますが…」

…とすると「戦オン」仕様でスロット１０個、スロット付きアクセサリー装備でさらに＋２個、合計１２個のスロットを持つ私はますますチートだな。

もっともこっちのスキルスロットは【治療術初級】（キュアライトウーンズ、キュアポイズン）みたいにいくつかの技能がまとめてセットできる場合があるみたいだから、一概にどちらが優れているとは言えないけども。

「…広域回復が出来るというのは好都合ね、いいわ、一緒に行きましょうか」
「あっ、ありがとうございます！！」
両手を組んできらきらした瞳で私を見上げてくるキュアリー。
ネイルが子猫ならキュアリーは仔犬か…全力でしっぽを振る幻影が見える。
「じゃあ、とりあえず手始めに装備を整えましょうか…近くに製造と販売、両方手掛けている武具屋はある？」
「はい、えーと、ポルテの武具店が一番近いでしょうか」
私は先ほどの依頼を窓口にて受けると、キュアリーの案内でポルテの武具店に向かった。

「いらっしゃい、何が必要だ？」
店主のポルテは小柄ながらもがっしりとした壮年の男だった。
「ネイルはどんな系統の装備ができるの？」
「雑役奴隷のクラスは下級職ですので、布製防具と小型武器が精々ですね」
「布製か…あまりいいのは無いね」
「悪いな、どちらかというと金属加工製品が主力なんでな」
店主のポルテがボソッとつぶやく。
「あ、ごめんなさい…そんな意味で言ったのではないのだけど」

しかし実際ここにはネイルが装備出来る防具はあまりいいのはない。
私は『所持品欄』を開いて手持ちの布製防具を探す。
「ん、こんなもんかな…」
店主から見えないよう体の影に隠してそれを取り出す。

『絹の袖無し忍服』
レベル制限無し
防御力３５
術防御１０
生命力付与１２０

それを出すところを見たキュアリーが目を白黒させている。
「え、今どこから…」
「店主、試着室みたいなものはある？」
「おう、そっちの突き当たりのドアだ」
「ありがとう、使わせてもらうわ」
私は二人を引っ張って試着室へと入った。
武器を振り回す必要性からか、日本の衣料店みたいな半畳サイズの試着室ではなく、八畳サイズの石畳の部屋だった。
「とりあえずネイル、私のお古で悪いけどこれを着てみて？」

先ほど取り出した絹の袖無し忍服をネイルに渡す。

「…これは…絹ですか！こ、こ、こんな豪華な布地で戦うんですか？」

「お古だって言ったでしょ？気にしないの」

「は、はい…ありがたくお借りいたします」

おずおずと着替え出すネイル。ぼろ布の様な服を脱ぐと出てきたのは、一糸まとわぬ玉の様なお肌。

あ、いかん、下着はまだ買ってやってなかった。いや、わざとじゃないですよ？

「ごめんね、下着はまた後で買おうね」

「いえ、そんな…凄いです、この服…肌触りが凄く優しいのに丈夫で動きやすいです」

感激しながら体のあちこちをさわさわとさわって確かめるネイル。

「でしょ～下手な革鎧以上の防御力があるからね…ふっふっふっ、それに、それだけじゃないのだよ。自分のステータス確認してごらん？」

「？はい……！！ＨＰが１２０も上がってます！」

「うん、生命力付与してあるからね。これでちょっとやそっと攻撃がかすっても大丈夫」

「……付与武具！？凄い、魔法の防具ですね！」

やたらとテンションが上がるキュアリー

「魔法武具といえば冒険者の憧れ。一つの目標ですよね…いいなぁ、ネイルちゃん」

「…パーティ組んでいる間だけで良かったら貸しましょうか？」
「え、私にも貸していただけるんですか！？てゆうかそんなに魔法の武具持ってらっしゃるんですか…」
期待に瞳を輝かせるキュアリー
「えーと、回復職ならちょうどいいのが確か…」
所持品欄を開いてそれを取り出す。
『年賀の巫女服』
レベル制限　５レベル以上
防御力４０
術防御１５
詠唱短縮（回復呪文限定）
『戦オン』で正月イベントをクリアした記念に取得できるネタ防具で、忍者だろうが鍛冶屋だろうがこれを着た途端、巫女ルックになってしまうという二次効果がある。
防御力はそれほどでもないこの防具だが、詠唱短縮（回復呪文限定）が有能すぎて、一時期回復技能を使える職がすべて巫女ルックになってしまい非常にややこしかった。
「やっ、やっぱり何にも無いところから道具が…」
「うん、まあ、そーゆーマジックアイテムがあるんだよ。そゆことにしといて…とりあえず、これを着てステータス確認してみて」
「は、はい…」
頭上に？マークを張り付かせながら着替えるキュアリー。
うん、彼女の肌もすべすべしてて眼福ですね。

「朱と白で可愛い服ですね…あ…なにこれ！？」

ギルドカードのステータスを確認したキュアリーが思わず声を上げる。

「こ、固有スキルに　詠唱短縮（回復呪文限定）って付いているんですけど…」

「うん、回復呪文限定で詠唱時間が半分になるね」

「すっ！すごい！凄いですシノさんっ！！そんな効果を持つ魔法武具なんて、少なくとも一般に流通なんかしてませんよ！？」

「うん、だから内緒にしてね。いろいろ面倒な事になるから」

「は、はいっ！」

「じゃあ次は、武器、かな」

着替えを終えた二人を伴ってポルテの所に戻る。

「店主、すまないが次は炉を使わせてくれないか？」

「炉？何するんでぇ」

「いや、この子の為に得物を自分で作ってやりたくてね」

「…同業者には見えねぇがな」

「まあ、昔の話だけどね…すぐ終わるからこれで頼むよ」

ポルテの手に銀貨を一枚握らせる。

「ふん、一時間だけならな」

「ありがとう、感謝するよ」

にっこり笑いかけてやったらポルテは真っ赤になっていた…以外と純情なのか。

さて、これからの肝は…まだ試してない固有スキル、キャラクターチェンジだ。
私は火事場の炉の前に行くとネイルとキュアリーの二人を下がらせる。

「ちょっとこれから変わった事をするから…危険だといけないので離れていてね」
「「はい」」

技能(スキル)画面を開き固有スキル、『キャラクターチェンジ』を実行。
ウィンドウにキャラクター選択画面が現れる。
『鍛冶師ＬＶ６０』を選択、タッチすると…
私の姿は一瞬でポニーテールからショートカットになり、忍者の格好から前掛けをかけた職人っぽい格好になった。
…うん、どうやら記憶や感情、パーソナリティは各キャラ共通で保存される様だ…良かった。
ステータスを確認すると

氏名シノ・カグラ　性別女　年齢２１歳
総合レベル６０　ギルドランクＤ
クラスレベル『鍛冶師』６０
ステータス
ＨＰ２１８０
ＭＰ測定不能
ＳＴＲ　１８
ＶＩＴ　１８

ＤＥＸ　１８
ＳＰＤ　１２
ＩＮＴ　１２
ＭＩＤ　１３

称号
　世界の天秤
　天下の名工

固有スキル
　キャラクターチェンジ
　マナ解放
　マナ譲渡

属性補正
　炎＋５０％
　土＋２０％
　風－１０％

祝福
　名も無き世界の管理者

うん、こっちも異常なし。これなら良いのを作ってやれるかな。

「し、シノ様…」

ネイルの声が震えている。やっぱり驚いたかな。

「ショートカットも素敵です…」
「つっこみスルー！？気にするところそこ！？」

うん、まあ、代わりに君がつっこんでくれたから良いよ。キュアリー

「まあ、いろいろ私は特殊でね…服装を変えると鍛冶職も出来るんだ、位に思ってて」
「え、という事は、シノ様が手ずから武器を作られるのですか？」
「そゆこと」

不思議そうなネイル。以前見た私のステータスにはサブクラスにも鍛冶師が無かったからね。
…とりあえず技能セットを『生産用』に変えて…と。

【器用度上昇】【業物確率上昇】【小型武器作成】【刀刃武器作成】【防具作成】【所持限界重量上昇】【神通力付与】【身体能力付与】【付与率上昇】【再鍛錬】

ネイルのレベルが1だから、レベル制限で作れる武器は最底辺になってしまう…それを腕で賄おうというのだ。

「素材は…上位素材の『上玉鋼』と『白炭』で…火種を『カグツチの神火』を使って、と『小型武器作成』実行と」

素材を所持品欄から取り出しぽいぽいと炉の中にくべる…普通はこんな下位武器に使う素材ではないんだが、可愛いネイルの為です。お姉さんは奮発します。
一瞬でとろけて出てきた鋼を『鬼神の鎚』で二、三回叩くと…あ

っという間に刃物の形に。

「よく知らないけど…普通、こんなに簡単に出来る物じゃないよね…刃物って」

「シノ様ですから」

さらに『再鍛錬』で攻撃力を上げて…おお、再鍛錬が3回も出来た…仕上げに付与を。

「ネイルは光属性持ってたよね」

「はい」

「なら光属性の金剛石を使うか」

直径3センチほどの金剛石の原石を握りしめると私の拳は淡い光を放ち始める。

「え、金剛石って金剛石(ダイヤモンド)!?し、シノ様っいくら何でも私にはもったいないですっ！」

「はっはっは、もう遅いですよ」

その光を得物に押し当て念じるとすうっ…と光がそのまま染みこんでいく。

「完成っ！」

出来たのは…

「包丁？」

「…包丁ですね」

「はっはっは、ただの包丁ではありません、これこそ…武器にも

使える超出刃包丁『紫乃壱式』です！」

茎（なかご）には燦然と輝く『紫乃』の文字。うむ。会心の作です。

これに大量にストックしてある漆塗りの柄を取り付けてネイルに渡す。

『闇薙（やみなぎ）の包丁・紫乃壱式』

レベル制限　無し

種族制限　獣人のみ

攻撃力６５

魔力消費による攻撃力上昇１５％

水系魔獣に対する特効１．５倍

技能『光弾』使用可

「あ、あの…この包丁、凄い魔力を感じるんですが…」

「一応、単純なダメージだけでも…そうだね、昨日ゴーバックが使ってた大剣並にはあるし、魔力を込めれば＋１５％ダメージが底上げされる。あ、あと水系魔獣には特効があるね。ついでに覚えて無くても光弾が打てる」

「「……」」

「あ、あれ？物足りなかった？でもレベル１だとこの辺りが限界で…」

「何ですか、そのむちゃくちゃな機能…下手すれば古代宝剣（アーティファクト）クラスです」

呆然とするキュアリー。

「シノ様、これ…を、私に？」

受け取った包丁を胸に抱いて泣き出しそうな表情をしているネイル。

「うん、まあ…形が包丁ってのがなんだけど…気に入ってくれると嬉しい」

「……」

「ネイル？」

「大事に、します」

「うん」

「大事にします、ありがとうございますシノ様…」

目尻に涙を滲ませたネイルの笑顔に私は思わず抱きしめようとしたのだが…超出刃包丁ごと抱きしめることになってしまうと気付き、かろうじて自重した。

パワーレベリング（1）（後書き）

正月休みの間に書き進めたらいいなぁ、と思っています。

パワーレベリング（2）（前書き）

お気に入りが37件…ありがとうございます皆様っ！

パワーレベリング（2）

町から西へ1時間ほど行った所にある森、通称「西の森」…そのままね。

私達はその入り口に来ていた。

「ここには昆虫系や獣系の魔獣が多く出るんです。依頼のブレードマンティスやホーンドウルフは少し奥に入った所で目撃が相次いでますね」

緊張した様子のキュアリーが町で調べた情報を披露する。

「急に生息数が増えた理由は彼らの上位捕食者であった『アラクネ』が半年ほど前Bクラス相当の冒険者のパーティに討伐されたから…というのが有力な説みたいです」

「…なるほどね。で、再び食物連鎖のバランスが戻る前にブレードマンティスやホーンドウルフの素材を集めておきたい訳か」

「しょくもつれんさ、ですか？」

きょとん、と言葉を繰り返すネイル。

ああ、こっちの世界にはまだそういう概念が無いのか。

「んーと、植物を動物が食べ、その動物をより強い動物が食べ…最後には死んで大地の肥やしになり、再び植物の栄養になって芽吹く…といったサイクルのこと」

「そういう考え方は初めて聞きましたけど…確かに言われてみれば納得ですね」

「ごしゅじ…シノ様は博識なのです。異か…他の大陸を知っていますから」

ネイル…うっかりぽろっと言いそうになってたよ。
ここは話題をそらす為にもそろそろ行きますか。

「それじゃ、そろそろ行こうか…二人とも装備は良い？」
「はいっ！」
「大丈夫です、シノ様」

ネイルは『絹の袖無し忍服』に『闇薙の包丁・紫乃壱式』
キュアリーは自前の『シルバーロッド』と私からのレンタル『年賀の巫女服』だ。

ちなみに私はクノイチに再びキャラクターチェンジをし、更に今回はちゃんと装備に身を包んでいる。
『霞の忍者鎧』『玄武の鉢金』『圧縮腰袋』『龍皮の籠手』『風魔の脚絆』『守護の印籠』
武器は『岩切の小太刀』『波切りの小太刀』の二刀流だ。

「スキルのチェックもね…ああ、そういえばネイルはスキル何か持っている？」
「雑益奴隷のレベル1で持っているのは『レジストペイン』だけなので、悩むまでも無いです」
「レジストペイン…痛みに耐える技能？防御力が上がるの？」
「いえ、ただ痛みに鈍感になるだけで…」

微妙な…対お仕置きスキルなのか…

「ち、ちなみに他にはどんなスキルを覚えるの？」
「そうですね、『アンチビュート』は鞭の攻撃に対して防御が上

がります。『レジストワード』は相手の悪口雑言に耐えることが出来ます。マスターレベルになると死に至るダメージでも快楽に変える『チェンジペイン』とゆースキルが…

「よし、一刻も早くクラスチェンジしようか」

ふ、不憫すぎる…

「私は治療術初級と治療範囲拡大で良いでしょうか」

私がネイルの不遇すぎるスキルに密かに涙していると、キュアリーがスキルの確認を求めてきた。

「そうね、それで良いと思うわ…ああ、そうだ、今回は相当の素材を回収するから…二人ともこれを持ってて」

私は二人にスーパーのレジ袋（小）サイズの綿の袋を渡す。

「これは？」

「シノ様のお腰の袋とお揃いですね」

「そう、これは圧縮ふとん…もとい、『圧縮腰袋』…二人に渡したのは30種類の道具を大きさに関係なくそれぞれ99個まで収納できる魔道具（マジックアイテム）だよ」

「！それは…世の冒険者が聞いたら目の色を変えて欲しがりますね…もしかして、シノさんが時々空中からアイテムを出していたのも…？」

「そういうこと」

それに加えて『物品転送符』のおかげで、直接4キャラクター共同倉庫から物を出し入れ出来るから、実質ほぼ無限に持てるし重さも感じないけど。

「よし、装着したね」
「「はい」」
「じゃあ、近くに寄って…『隠形』」

隠形は隠れ身と違って完全に姿を隠すものではないが、その代わり術者を含めて6人までに効果が及び、効果時間も長い。
いわゆるトへ〇スだ。

（静かにね…このまま奴らの生息地へ向かうよ）
（はい）
（分かりました）

森の中を獣道をかき分ける様にして進み約2時間。
私は明らかに周りの気配が今までより物騒になって来ているのに気が付いた。

（そろそろみたいね…心の準備は良い？）
（は、はい…）
（大丈夫、です…）

改めて二人に確認すると、やっぱり大分緊張している様だ。
まあ、いくら私が「二人に危ない目には負わせない」と保証してもそれと本能的な恐怖はまた別だろうしね。

（んじゃあ９０分一本勝負で…はい、二人ともこれ飲んでね）

私は例によって薬師で作ってストックしてあった丸薬を3種類ずつ二人に渡す。

（９０分、ですか？…これは？）
（んくっ…ごくん）
（ネイルちゃん早いよっ）
（大丈夫です、たとえ毒薬だろうと××な薬だろうと…ふ、ふふふ）

いや、そんな怪しい薬じゃないから。

（加速丹、金剛丹、抗魔丹…ＳＰＤ、ＶＩＴ、ＭＩＤを９０分間、倍加する薬よ。副作用も無いから、早く飲んで）
（はっ、はい…ごくん）
（飲んだわね？じゃあ、私も技能セットを変更して…と）

フィールド移動セットからパワーレベリング用セットに技能セットを切り変える。

【回避術極意】【おとり】【挑発】【結界全体化】【影縛り・改】【命奪斬】
【多重結界】【迎撃刀術】【迎撃手裏剣術】【二刀流】【斬鉄二連撃】【三連撃】

技能スロットを2個追加する効果のある『守護の印籠』のおかげで技能は１２個セットされている。

「よっし！では、作戦名『パワーレベリング』始めますか！『多重結界』！」

私が大きく声を上げると『隠形』が解除され、同時に『多重結界』が『結界全体化』によってパーティ全員にかかる。
と、途端に周辺から不穏な気配が膨れあがる。

しかし、なかなか姿を現さない。私がレベル高すぎるせいだろうか。

「じゃあ、まあ…引っ張り出しましょうかね」

私は所持品欄を開くと食料アイテムの一番下にある物を取り出した。

これは食料を生産する時に一定確率で出来る失敗品。その名も『魔物の餌』

「ほーれ、寄っといで～」

一見ドッグフードにも見えるそれを景気よくばらまく。

と、途端に

「「「ぐるぉあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」」」

パーティの周りに巨大な一本角を持った狼…十数頭のホーンドウルフが勢いよく飛び出してきた。

「ひぃぃぃぃ！いきなり多すぎませんかぁぁぁぁっ！？」

「大丈夫…よく見て。シノ様の薬のおかげで目で追えない動きじゃない」

意外なことに、パニックに近いキュアリーに比べて、レベル1のネイルの方が落ち着いて周りを見れている。

「そう、加速丹は動きだけじゃなく知覚も鋭敏にしてくれるわ…結界も3回までなら物理攻撃を防いでくれるから、落ち着いて周りをよく見て…よっと『影縛り・改』！」

私は二人に声をかけて落ち着かせながら、飛びかかってきた四頭のホーンドウルフに向かってスキルを発動、棒手裏剣をそれぞれの影に向けて放つ。

「ぎゃぅぅん！？」

見事に四頭は影を射抜かれその動きを止める。

このスキルは昨日ギルドに登録した『影縛り』の上位スキルで、多少ＭＰは使うが複数に向けて使用が可能な上、発動率も高いという…パワーレベリングの為の様なスキルだ。

おまけに今の私はＭＰ無限というチート状態なので、ＭＰ消費という唯一の縛りも無いに等しい。

「動きを止めた敵から二人で集中的に攻撃して！」

「はいっ」

「了解です」

今回は二人の為のレベルアップを兼ねているから、私が無双してしまっては経験値効率が悪い…らしい。

そもそもこの世界の『レベルアップ』というのは、魔獣や魔人、魔族、その他の人系種族など、魔法や魔力を扱える可能性を持つものを倒した時に、その『魂の力』が倒した者に分け与えられる事によってなされるもの、だそうだ。

今回のこのホーンドウルフのように一見魔法を使っていなくても身体能力の強化に本能的に魔力を使っていて、それが魔獣と動物の違いらしい。

だから精肉作業の課程で牛を殺しても、狩りで普通のイノシシを狩ってもレベルアップはしない。

パーティを組んでいれば直接倒さずとも最低、半分程度は魂の力（けいけんち）

を得られるとのことだが、それにしてもキュアリーの様な攻撃手段の少ない『治療術師』は同パーティの中でも成長の遅れる傾向にあるという。
昨日の夜ネイルのパワーレベリングを思いたった時に、この世界のレベルアップの仕組みについて詳しく聞き出して立てた作戦だった。

「ぎゃわん！！」
「すごいっ！『紫乃壱式』…Ｃランクの魔獣が紙の様に切り裂けます！」
「え、えーと、とどめっ！」

ネイルが魔法の包丁を振るい、キュアリーがシルバーロッドでとどめを刺す。
その間に私は次々と『影縛り・改』で別の敵を麻痺状態にしていく。
時折、麻痺効果が切れて動き出す敵もいるが、それはしょうがないので私が切り捨てる。
結果、１５分ほどでホーンドウルフの群れは殲滅することが出来た。
内訳はネイルとキュアリーで１２匹、私が撃ち洩らしを仕留めて５匹、計１７匹の戦果だった。

「結局依頼の3倍以上倒してしまいましたね…シノ様」
「多いに越したことはないさ…さて、素材を回収しようか」

刃物を持っている私とネイルで角を切り離す作業を行い、キュアリーにはその間の見張りを頼む。

「そういえば、二人ともレベルアップしたんじゃないのかな？ど

う？」
「「はい！」」
よくぞ聞いてくれました、とばかりに嬉しげに報告する二人。
キュアリーは２レベル上がってレベル１５に。
ネイルは一気にレベル６に上がっていた。
「それはおめでとう。スキルなんかも増えたのならスキル構成今の内に見直す？」
「私は『光撃術初級』（ホーリーライト、光弾）を覚えました。これでやっと攻撃にも貢献出来ます！」
「それはいいね。戦術の幅が広がる…でもここでは回復中心のセットの方が良いかな」
「そっ…そうです、ね。ええ、もちろんです！」
早速攻撃呪文使ってみたかったんだろうな、キュアリー。
「私は…今回覚えたのは『レジストワード』『レジストスパンキング』の二つで…いいんです。ＨＰ増えたし…」
やっぱりそっち系統のスキルなのね…不憫すぎる。
「さて、一通り素材も回収したし、次はブレードマンティスの巣を探そう…か…いや、」
「どうされました？シノ様」
「ん、探すまでも無かったみたい…こちらに来るわね…大量に」
カサッカサカサカサ…
カサガサガサガサガサ…
ガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサ！！

不気味な音を響かせつつ森の奥から藪をかき分けて姿を現したのは…巨大な鎌を持つ人間サイズのカマキリ…ブレードマンティスの群れだった。

「ひぃぃぃぃ！グロいっ！グロいですシノさんっ！」

「ギチギチギチ・・・・」「ギチギチギチ」「ギチギチギチチチチチ！！」

「んー、４０匹前後かなぁ。ちょっと数が多いね…ホーンドウルフの血に惹かれて来たかな」

「ちょっとで、すまない量だと思うんですがっ！」

「いざというときは私、シノ様の盾に」

「キュアリー、パニくらない。ネイルは馬鹿なこと言わないの『多重結界』」

私はとりあえず多重結界を張り直してネイルに告げた。

「ネイル、あなたの主人がどれほどのものか…よく見ておくと良いわ…ちょっと経験値もったいないけどね」

そして私は群れの中に飛び込んでいった。

「『命奪斬』の代わりに『反撃術極意』をセット…『おとり』『挑発』『迎撃刀術』『迎撃手裏剣術』発動…『影縛り・改』！」

『おとり』と『挑発』によって敵の大半は私に向かって来ているが『影縛り・改』で動けなくなった数匹が壁となって一度にはかかってこられない。

その壁を乗り越えたとしても『迎撃刀術』『迎撃手裏剣術』で攻撃を防がれ『反撃術極意』でカウンターをくらい『斬鉄二連撃』で

四つに切り裂かれる。
結果として、私は一匹たりとも背後の二人の方へは通していない。
「申し訳ありません、シノ様…私はまだ主の実力を見誤っていました…」
「うん、なんてゆーか…言葉がない、ね」
私は黙々とブレードマンティスの屍を作り続ける。
技量はチート仕様だから良いとして、これだけの凄惨な殺戮を続けているというのにまったく動揺や嫌悪といった感情が沸かない。
あるいは私の精神まで『クノイチ・神楽紫乃』として調整を受けているのかもしれなかった。

結果として。
１０分もしない間に４０数匹のブレードマンティスはすべて屍となっていた。
その惨状にさすがにキュアリーは青い顔をしていたが、ネイルの肌はむしろ紅潮していた。
「うっ…うぷっ…」
「素敵すぎます…シノ様…」
私はそんな二人の様子を横目で見ながら未だ警戒を解いてはいなかった。
何か…まだ『何かいる』…今までのとは違うヤツが。
「二人とも…まだその場を動かないで…」
そう言いかけた時。私は首筋に強烈な殺気を感じてとっさに後方へ飛んだ。

ーーガオンッ！！ーー
それと同時に、私の横にあった樹木が幹ごと断たれ、ゆっくりと倒れていった。
直径３０センチはありそうな立派な木だったのだが。

「そこか！」

私はその木の断たれ方や気配から、だいたいの方向を割り出して棒手裏剣を打ったが、ガインッ！と生物に当たったとは思えない音を発して手裏剣はそいつの両手に弾かれた。
「そいつ」、は他の個体よりも遙かに大きく…全長５メートルほどの体躯を誇っており、その体表は金属の様な光沢で鉄（くろがね）の様に光っていた。

「デス・マンティス…」

キュアリーの呆然とした声が聞こえた。
そいつはブレードマンティスの特殊進化個体…限りなくＡに近いと言われるＢクラス魔獣、デス・マンティスだった。

で、ただいまブレード&デスマンティスの素材部位を回収中という所です。
数が数なので、再び血の臭いに惹かれて魔獣が来ないよう結界石を埋めて安全地帯を作り、それから作業をしています。
デス・マンティスですが、ボスの割に『斬鉄二連撃』二回であっさり沈みました。

「…Ｂクラスよ？普通、王国騎士団が一小隊でかかるレベルの魔獣よ？何でこんなあっさり…」
「いくら強かろうが所詮Ｂクラス魔獣…レベルにして３０あるかないかという所です。シノ様にかなう道理がありません」
「…シノさんのレベルってそんなに高いの？」
「主に口止めされているので詳しくは申せませんが…そもそも今回の戦いの中でも六個以上のスキルを同時に操っていましたでしょう？」
「…そうだよ！ということは少なくとも５０レベル…神話の英雄と同レベルはあるって事！？」
「はいはい、君たち、そろそろ帰らないと日が暮れるまでに森を抜けられないよ～さっさと集めてね」

女３人寄れば姦しいとはよく言ったもので。
素材を全部集め終わるにはそれなりの時間がかかったのでした。

戦果
ホーンドウルフの角１７本
ブレードマンティスの鎌４４組
デス・マンティスの鎌１組
デス・マンティスの魔石１個

ちなみに『魔石』とは強力な魔獣の体内に時折精製される物質で、魔力の圧縮された宝石みたいなもの。
魔法具（マジックアイテム）の核として需要があり高く売れるらしい。

また、レベルもそれぞれネイルが目標のレベル１５、キュアリーがレベル１７に上がっている。
マンティス系は彼女らは手を出さなかったが、数が数だったのと

偶然とはいえBクラス魔獣を倒したせいで十分な魂の力(けいけんち)となったらしい…私はもちろんこの程度では経験値の足しにもならなかったが。
新しいスキルはネイルが『ストーンスキン』と『アンチビュート』を覚えた。
やっと役に立ちそうなスキルを覚えられてネイルが嬉しそうにしていたのが印象的だった。

「よし、じゃあ町に帰ろうか…近くに寄って…『隠形』」
私はトへ〇スをパーティにかけ、一路サザンの町へと帰ることにした。

町に着いたのは日も落ち、暗くなった頃だったが私達はまっすぐギルドへと向かった。
依頼窓口に依頼文を提出し、依頼を達成したことを告げる。

「え、今日の朝受けられた依頼ですよね？もう達成されたんですか？」
「ああ、ちょうど対象の集団と連続して遭遇してね…運が良かったよ」

私がギルドの依頼カウンターにサンタクロースの担ぐような袋を5つも一気に提出したので周りがちょっと騒がしくなった。
本当は所持品欄や『圧縮腰袋』から直接出したかったのだが、あまりそれらを詮索されたくなかったのでギルドの近くで麻袋を5つ買って移し替えてきたのだ。

「しょ、少々お待ちください…」

あまりの量に依頼受け付けのお姉さんの顔が引きつっている。ごめんね。夜遅くにやっかいな仕事持ってきて…

「食堂の方で待ってますのでごゆっくり」

私はお姉さんに一言告げるとネイルとキュアリーを伴って食堂スペースの方へ赴いた。

「とりあえず打ち上げでもする？アルコールは無しでね」

「そうですね、あの状況から無事戻ってこれて信じられない位ですし…お祝いしましょうか。ネイルちゃんのクラスチェンジ（予定）祝いも兼ねて」

「…ありがとう」

適当に料理と飲み物を注文して乾杯をしようとした時、横合いからだみ声がかかった。

「姉さん達景気良さそうだなぁ。あの袋の中身はマンティスとウルフの素材だろ？どうやって手に入れた？」

声のした方を見ると茶髪の戦士が下卑た笑いを浮かべながら立っていた。

「どうって…指定された場所で狩りをして…」

律儀に答えるキュアリー。

「おいおい、冗談言うなよ。Cクラス魔獣をあれだけ一日で倒し

たって言うのか？ありえねぇな…正直に言いなよ…どっかで魔獣の墓場でも見つけたんだろ？独り占めは良くねぇな」

勝手に納得して私とキュアリーの肩を抱いてくる戦士（バカ）。

「一人で勝手な推論に達したあげく妙齢の婦女子の肩をみだりに抱くとは…もののふとも思えん所行。少し外の空気に当たって頭を冷やしたがよろしかろう」

どうも私は怒ると口調が時代劇っぽくなる癖がある…

「て、てめぇ…俺を誰だと思ってやがる！Bランクの戦士…」

トン

私は食器ナイフを一本男の影に突き刺した。

「あ、あれ…？動かねぇ…おい、何をした…！？」

「ああ、すまんな、そのままでは外の空気に触れることも叶わなかったな…失敬」

『影縛り・改』を対象を一人に絞り込んで使うと効果時間が飛躍的に延びる。

とりあえず2時間位そのまま彫像をやっていてもらおうかなぁ。

「シノ・カグラ様、査定が終わりました」

ちょうどその時、ギルドの依頼受付のお姉さんから声がかかった。

「…あの、その方はいかがなさったので？」

「ああ、なんかギックリ腰みたいですよ。無理するから…」
「…そうなんですか、お大事に。では、査定をお伝えします。こちらへ」
「分かりました」
私達は食事をいったん中止してギルドの依頼窓口へと戻った。
「では、今回の依頼の査定についてお知らせいたします…
ホーンドウルフの角１７本
ブレードマンティスの鎌４４組
依頼内容がホーンドウルフの角５本、ブレードマンティスの鎌５組でしたので追加報酬含めまして金貨１７枚となります。
それから、御３人様ともギルドランクのランクアップとなりましたのでギルドカードをお出しください」
私が３人のカードを取りまとめて受付に提出する。
「きききききき金貨１７枚ですよ！シノさんっ！」
キュアリーが興奮する気持ちも分かる。
食事などを基準に日本と金銭価値を比べると…だいたい１クラム１００円位だ。
金貨は１００００クラムだから約１００万円、今回の報酬は約１７００万円相当ということになる。
「ギルドランクはシノ様とキュアリー様がＣへ。ネイル様はＤへランクアップです…シノ様、この二日間でＣまでになってしまうなんて…どんな無茶をなさっているんですか。お体には気をつけてくださいね」
「心配してくれてありがとう、気を付けるよ…そういえば名前を

聞いてなかった。これからもお世話になるだろうし、聞いても良い？」

「あ、はい、その…ミシェラ、です…」

心配してくれたことが嬉しかったので笑顔のサービス付きでお礼を言ったら受付のお姉さん…ミシェラさんは真っ赤になってしまった。

「シノ様…シノ様はご自分の笑顔の威力を自覚なさるべきです」

なぜか少しネイルが不機嫌になっていた。

私達は食事の続きをしながら今回の報酬について取り分を話し合っていた。（さっきの男は彫像と化して店の隅で立たされていた）

「本当にこんなにもらって良いんですか？実質ほとんどシノさんの力じゃ…」

「そ、そうです、手伝いどころかレベルアップにお力まで貸して頂いたのに」

「だから私はデス・マンティスの素材と魔石も貰うってことで。換金すれば金貨3枚にはなりそうなんでしょ？」

結局、ネイルとキュアリーがそれぞれ金貨6枚、私が金貨5枚とデス・マンティスの鎌一組、魔石一個をもらうことで報酬を受け取ることに納得させた。

その後は食堂のご馳走に舌鼓を打ちつつ別れを惜しみ、互いの宿へと戻っていった。

ちなみにネイルが奴隷ではなくなった為、今夜はスイートルームからノーマルな部屋に移っている。
お風呂はネイルと一緒に大浴場と露天風呂を満喫した。
体がまだ暖かいまま、ベッドに潜り込み、さて、いよいよ明日はネイルのクラスチェンジかな…等と思いながらネイルを抱き枕に眠りについた。

パワーレベリング（2）（後書き）

戦闘シーンって難しいね。

【設定資料】登場人物など（前書き）

ステータスの効果が分かりにくかったかもと思って設定資料を追加。
登場人物紹介も兼ねてます。

【設定資料】登場人物など

登場人物

氏名シノ・カグラ　性別女　年齢２１歳
総合レベル８５　ギルドランクＣ（パワーレベリング（２）終了時点）
クラスレベル『クノイチ』８５
（ただし別キャラの鍛冶師、薬師、陰陽師に自由に変わることが出来る）

地球名　神楽紫乃　日本国新潟県上越地方出身の女性。時代劇オタク。
観光用の忍者村のアクターとして働いていた。
スマートフォンで『戦国の野望オンライン』をプレイしていた所、世界間の衝突事故に巻き込まれ異世界に転移。
そのお詫びとして『世界の管理者』から『戦国の野望オンライン』の自キャラの能力を貰った。
現在は世界間でマナのやりとりをするための安全弁として異世界ファリーアスにおいて生活中。

＞ｉ３８８７７―４８４５＜
クロフネさんからシノのイラストを描いていただきました。
かわいい！イメージ通りです。
――

氏名ネイル・サヴァン　性別女　年齢１４歳
総合レベル１５　ギルドランクＤ（パワーレベリング（２）終了

時点）
　クラスレベル『雑益奴隷』１５

真っ白な毛並みを持つ猫系獣人の少女。
違法な奴隷狩りにあい、住んでいたサヴァン村は壊滅。本人は雑益奴隷として酷使されていた。
シノにちぎれた右腕を治され引き取られてからは、奴隷身分を解放され従者として行動を共にする事に。
　シノ様至上主義。

＞ｉ３８８９１｜４８４５＜
同じくクロフネさんから。
小説内の描写通り鞘に札まで再現です。
ネコミミメイド最高。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーー

氏名キュアリー・トーレット　性別女　年齢１５歳
総合レベル１７　ギルドランクＣ（パワーレベリング（２）終了時点）
　クラスレベル『治療術師』１７

ゴーバックをチームリーダーとするパーティの一員。
レベルアップのために一時的にシノに同行する。
平民なので『トーレット』はトーレット通りに住んでいるキュアリー、の意。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーー

氏名ゴーバック・ロイド　性別男　年齢２９？歳
総合レベル１８　ギルドランクＣ（パワーレベリング（２）終了時点）
クラスレベル『戦士』１８

クインとキュアリーの二人とパーティを組んでいる。パーティリーダー。
くすんだ金髪、長身、ごついマッチョな体、の典型的な戦士。人は良い。
森の中でスケイルヴァイパーに苦戦していた所をシノに助けられる。
実は過去の戦功から一代貴族（最底辺の騎士クラスだが）であったりする。

――

氏名クイン　性別女　年齢２７歳
総合レベル１５　ギルドランクＣ（パワーレベリング（２）終了時点）
クラスレベル『レンジャー』１５

ゴーバックのパーティのメンバー
獲物はショートソードとショートボウで中～近距離のダメージソース。
銀髪のショートカットにグラマラスな肢体。お色気過剰気味。男も女もバッチ来い！な人。
実はハーフエルフで年齢は自称。その自由極まりない性生活から本当はハーフダークエルフでは？
との噂あり。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――

氏名コスイネン　性別男　年齢４６歳

セコビッチ商会所属の商人。人間。
セコくてコスイ。
ネイルの元主人。
獣人には偏見と差別ありまくりなので、虐待はしても性行為には及ばなかった。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――

氏名ミシェラ・ポーター　性別女　年齢１９歳

ギルドの受付嬢。金髪碧眼の美人さん。
実はサザンの地方領主のお嬢様。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――

氏名ポルテ　性別男　年齢４９歳

ポルテの武具店店主。
小柄ながらもがっしりとした体格でドワーフに間違えられるのが悩みらしい。

――――――――――――――――――――――――――――――

ーーー

ファリーアス世界の管理者

詳細不明。口調からして女性っぽい。

シノにチート能力を与えた方。時折メール機能で連絡をしてくる。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーー

ステータス詳細

ＨＰは生命力

ＭＰは魔力

ＳＴＲは腕力　物理攻撃力、所持重量に関係

ＶＩＴは体力、頑健さ　防御力、ＨＰの増加量、肉体系状態異常の抵抗に関係

ＤＥＸは器用さ　命中率、クリティカルヒットに関係

ＳＰＤはスピード　移動力、回避率、攻撃回数に関係

ＩＮＴは知力　魔法攻撃力、ＭＰ増加量に関係

ＭＩＤは精神力　魔法防御、精神系状態異常の抵抗に関係

ＨＰＭＰ以外のステータスは人間の場合振れ幅は３～１８（成人の平均は８～１２）

ちなみに３で幼児並み、１８で神話レベル。

この数字は基本、レベルが上がっても変動しません（才能のような物）が、実際の効果は総合レベルとクラスによって補正されます。

レベルが１上がるたびに１０％の補正がかかり、たとえば能力値が１８ならばレベルが一つ上がるたびに＋１．８の能力値がブラインドステータスとして加算されます。

例として

レベル　１でＳＴＲ１８＝実際の効果も１８

レベル２０でＳＴＲ１８＝実際の効果は５２．２相当

　これにクラスによる補正が入ったものが最終的な能力値になります。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

マナについて

　自然に溢れているのがマナ。

　体内に取り込み生物が利用できる状態に整えられた物が魔力。

ネコミミメイドの伝説（前書き）

お気に入り登録が急増して１５１件……！？
な、何があったんでしょうか…

ありがとうございますーー

今回は戦闘無しです。ネイルいじりの回です。

ネコミミメイドの伝説

窓から明かりが差し込んで目が覚めた時、まだ私の腕の中でネイルは丸まって眠っていた。
昨日はかなりハードな一日だったから疲れたのだろう。
じっと見ていると、時々ぴくぴくとネコミミが動いたり、尻尾がぱたぱたしたりと非常に可愛らしい。
思わずそっとネコミミの根本をつまむと、中指でこしこしとこすってやった。

「ふや…んぅ！？」

ネイルの体がぴくんぴくんと揺れる。

「寝ぼすけめ～まだ起きないのか？起きないともっとイタズラしちゃうぞ～」

今度は反対側の手でネイルのお尻をそっと伝い、尻尾の根本まで到達する。
そして尻尾の裏側に指を3本当てて毛先方向へとゆっくり愛撫する。

「あぅぅぅん…ん…」

ネイルの表情を見ると唇をかみしめて我慢しているのが分かる。
本当はもうとっくに起きているらしい。

「こいつめ…狸寝入りか。そんな悪い子にはお仕置きかなっ♪」

かみっ

ネイルの耳を軽く噛んでやる。

「ひぅぅぅんっ！！」

思わず目を開けるネイル。

「お・は・よ」

「は、はひ…」

「寝たふりなんかして～もっとして欲しかった？」

「い、いえっ！起きる、たっ、タイミングがっ！」

「そう？」

調子に乗って喉を人差し指でそっと撫でてやる。

「は、はふ…ん…ぅ……」

「正直に言わないと……こうだっ」

いきなり耳噛みにしっぽ撫ぜの同時攻撃。

「あぁぁぁぁぁ！だめですぅぅ！！」

うーん、ネイルと同衾するようになってからちょいちょいＳっ気が出てしまうなぁ。

「すっすみませんっ…しっ…シノ様の指が気持ちよくてっ！寝ぼけ振りしてましたぁぁぁぁぁっ！」

「はい、よくできました～」

私はぺろっとネイルの唇を舐め上げると、ネイルを腕から解放して身を起こした。
ネイルは息も絶え絶えにぴくんぴくんと体を痙攣させたままだ。

「あ…あ、キス、されちゃったぁ…」
「はっはっは、女の子同士だからノーカンだよー」

私はいまだ動けないネイルの夜着を剥ぎ、濡れタオルで汗をぬぐってやると忍服に着替えさせた。

「うぅん…これじゃ、またあべこべです…」
「気にしないの…今日はさっさと朝食を食べてクラスチェンジに行くよ」
「は、はい…」

結局、ネイルが立てるようになった頃には宿の朝食は終わっており、外の屋台で串焼きをかじった後、ギルドへ向かったのでした。

ということで、ネイルと連れ立ってギルドにやってきました。
しかし、この町に来てから毎日ギルドに顔を出しているな…

「こんにちは～」

クラスチェンジがどの窓口なのか分からなかったので、とりあえず昨日お知り合いになった依頼窓口のミシェラさんに声をかける。

「はい、シノさん、こんにちは」
「今日はクラスチェンジをお願いしたいんだけど」
「シノさんが、ですか？」
「いや、こっちの子」
「ああ、ネイルさん…そういえば昨日、クラスレベル１５になったんでしたね…では、そちらの奥のドアから入って、廊下の突き当たりの部屋にお越しください」
「ありがとう…さ、行こうか、ネイル」
「はい、シノ様」

廊下の突き当たりのドアを開けると、そこには１２畳位の部屋に直径３メートル位の魔法陣が描かれた部屋だった。
ちなみに壁にはびっしりと本棚が並び、本来の壁の地肌はまったく見えない。

「いらっしゃい」

部屋の奥にいた灰色のローブに眼鏡をかけた老人が声をかけてきた。
他には誰もいないのでこの老人がクラスチェンジを担当する職員なのだろう。

「おじゃまします…クラスチェンジはこちらでよろしいですか？」
「うむ…ここで行っておるよ…だが、いかんな」
「は？」
「そなた、なぜかは知らんが魂が複数揺らいで見える…そんな不

安定な状態ではクラスチェンジが成功するかは賭じゃの」
ただの職員のじいちゃんかと思ったら意外と実力者らしい。
複数の魂っていうのは私の別キャラの存在が重なって見えているんだろう。
「ああ、ご心配なく。私は付き添いで…こちらの子のクラスチェンジをお願いしたいんです」
「なんじゃそうじゃったか…そなたのクラスチェンジも試してみたかったんじゃがの」
「はは、また機会があれば…」
なかなかお茶目なじいちゃんだが、今はつきあっている暇は無い。
「うむ。それではお嬢ちゃん、今のクラスと希望クラスを教えてくれんかね」
「はい、今のクラスは雑益奴隷、希望クラスはメイドです」
「うん？奴隷と？…いや、すまん、あまり小綺麗な姿をしておるから意表をつかれたわい…での、奴隷となれば主人の許しを得ねばならんはずじゃが、その辺は大丈夫かの」
「はい、シノ様…ご主人様に身分を開放して頂きました…今の公的な身分は平民になっています。それとこの格好はご主人様の御好意です」
「だってねぇ…ネイルみたいな可愛い子が不潔な格好しているのって世界的な損失よ？おじいちゃんもそう思わない！？」
「うむ、そこは同感じゃ」
じいちゃん目が高い。信用出来るとみた。
「では、そこの魔法陣の中央にこっちを向いて立ってくれるかの

…」

じいちゃんの言葉にネイルが魔法陣の中央に移動する。

「では、まず事前調査じゃ」

魔法陣の一番外側のリングだけが光を放って上昇していく。

「ふむ、クラスチェンジの条件はクリアしているようじゃの…メイドへの転職も問題なしじゃ」

すぅっ…と収まっていく魔法陣の光。

「最後にもう一度確認するぞ？本当にクラスチェンジして良いんじゃな？」

「ええ、お願いします…今よりもっと…シノ様のお役に立ちたいんです」

うう、ネコミミメイド萌～でメイドを進めた身にすると罪悪感が…

「うむ、では、いくぞ！」

今度は先ほどとは比べ者にならない位の光芒が魔法陣を満たす。

「！」

「動くな！間違っても魔法陣の外に出てはイカンぞ！」

じいちゃんの鋭い声が飛び、ネイルは魔法陣の中央で直立不動の姿勢で固まった。

「クラス情報…『メイド』を解凍…」

壁の本棚から一冊の本がじいちゃんの手元に飛んでくる。

「うむ…これじゃ…記憶野展開…クラス基本情報転送…技能情報転送…基礎能力の適正化開始…」

「うう…う」

光でよく見えないけどネイルの苦しそうなうめき声が聞こえてくる…軽く転職進めちゃったけど、結構つらいものなのかな…

「よしっ！これで最後じゃ！記録保存！」

ひときわ魔法陣の光が強くなったかと思うと、すぐに収まって行き…そこには無事なネイルの姿が見えた。

「終わりましたか？」

「うむ、もう魔法陣の外に出ても大丈夫じゃ…む？」

「何か異常が！？」

「いや…たぶん悪いことではない…ギルドカードも書き換わっておるじゃろうて、確認してみると良いじゃろう」

じいちゃんの言葉に疑問を持ちつつも魔法陣の中央でぼ～っとしているネイルを迎えに行く。

「大丈夫？ネイル」

「…あ、シノ、さまぁ…」

くてっと私の腕の中で頽れるネイル。

「なんか…ぽかぽかしますぅ…シノ様に…抱かれて眠った時みたい…」
「ちょ…！」
「ほほう、なるほどの…」
にやにやしながら私達を見やるじいちゃん。
「ちがっ！そういうあれでは…」
「うんうん、美しいの。若い頃にはいろいろあるもんじゃ」
「だから…」
「安心せい、誰にも言わんよ…」
だからその生暖かい目をやめいっ！
「まったく…おじいちゃん、ソファか何かある？この子、しばらく足腰立たないみたいなんだけど」
「うむ、隣の部屋に休憩室があるよ。そこのソファに寝かせればよいじゃろ…お茶でも入れてしんぜよう」
じいちゃんの案内で休憩室に移り、ネイルをソファに寝かせる。
「ほれ、東国産のグリーンティじゃ。おまえさんにはこっちのがなじみがあるじゃろ？」
え、緑茶？何で私が緑茶になじみがあるって…
「黒髪に象牙色の肌と言えば東国に多いからの…バター茶とどちらがよいか悩んだんじゃが、当たりか」
…油断の出来ないじいちゃんだな…私の表情から、緑茶で『当た

り』だと見抜いたのか。

「…シノ、様」

ネイルがソファに身を起こす。

「ネイル、もう、体の調子は良いの？」
「はい、ご心配おかけしました…もう、大丈夫です」
「そう、クラスチェンジ自体は無事に終わったらしいから、カードを確認してみると良いよ」
「はい」

カードを起動するネイル。
と、その表情に疑問が浮かぶ。

「シノ…様」
「ん？」
「クラスが『ルミナスメイド』になっているんですが…」
「はい？」

「ほほう、ルミナスメイドになったかの…これはまた…レア中のレアなクラスじゃの」

ネイルの言葉に目を輝かせるじいちゃん。

「ネイル…カード、見せてもらって良い？」
「はい、シノ様…どうぞ」

私は起動状態でカードを渡してもらって中を確認した。

氏名ネイル・サヴァン　性別女　年齢１４歳

総合レベル１５　ギルドランクＤ

クラス　メイン『ルミナスメイド』ＬＶ１

サブ『雑益奴隷』ＬＶ１５

ステータス

ＨＰ　３７５＋１２０

ＭＰ　１０３０

ＳＴＲ　１５

ＶＩＴ　１４

ＤＥＸ　１３

ＳＰＤ　１５

ＩＮＴ　１３

ＭＩＤ　１２

称号

マナの申し子

固有スキル

部分獣化

家事道具習熟

属性補正

闇＋１０％

光＋２０％

祝福
神楽紫乃

「うん…ステータスは全体に底上げされているね。属性も光が２０％になってる…固有スキルに『家事道具習熟』って付いてるからメイドはメイドなんだろうけど…確かにクラスの名前は『ルミナスメイド』になっているね」

私はじいちゃんの方を見て説明を促す。

「うむ、説明しよう…ルミナスメイドとは光の属性に特化したメイドじゃ。クラスチェンジ時に魔力の総量が飛び抜けて大きかったり、光の属性を持っていたりすると…極希（ごくまれ）にメイドから派生することがあるの」

「普通のメイドに比べてデメリットは無いのね？」

「うむ、実質メイドの上位互換職といってもいいじゃろう…光属性の技能が充実しておるはずじゃ…いやはやまったく珍しいものを見せてもろうたわい」

「…そんなに『ルミナスメイド』って珍しいの？」

「…まあ、そもそも…クラスチェンジしてまでメイドになりたいって者が少ないからの…単にメイドになるなら平民がギルド登録時のクラス選択で選ぶ…というパターンの方が圧倒的に多いしの」

「…なるほど、クラスチェンジの機会がなければお目にかかれない職なのね」

…とりあえず悪いことではないみたい…ほっとした。

私はネイルの隣に座り頭を撫でてあげた。

「ご苦労様、良くやったね？レア中のレアクラスらしいよ『ルミナスメイド』」
「シノ様の、おかげです…シノ様の『加護』で魔力が底上げされていなかったら…」
「そんなこと無いよ、ネイルの光属性と相性が良かったんだよ」

ついでに耳も撫で撫でしてあげる。

「そんなこと…んっ…」
「どうしたの？」
「だめですっみみぃ…ちから、ぬけま…す…」

ありゃ、やりすぎたか…てゆうか、ネイルの耳がどんどん敏感になっていっている気がする。
私は悪くないです。たぶん。

「ほっほっ…眼福眼福」

あ、じいちゃんの存在忘れていた。

「すっ、すみません、失礼しました…手数料は銀貨一枚でしたね」
「うむ、確かに受け取った。二人とも壮健での…また会えるのを楽しみにしておるよ」

私はネイルを伴ってそそくさとギルドを後にした。

「さて、次は…被服店かな…近くに領主と取引しているようなお店ってあるかな？」
「それでしたら、この通りを右折した先の…ミンスター衣料店が、

たしか」
「領主と取引が？」
「はい」
「よし、行ってみようか」

「おじゃまします」

店内は魔法の明かりなのか明るく照らされており、一目で高級品と分かるドレスから作業服までそれぞれ質の良い物が並べられていた。

「いらっしゃいませ」

栗色の髪の３０代前半に見える女性が店の奥から出てきた。

「ミンスター衣料店にようこそ。本日はご購入ですか？それとも仕立て？」
「あ、いや…その、ここってメイド服も取り扱ってます？」
「ええ！御領主様邸のメイド達の服はすべて当店が納めさせて頂いてますよ」

良かった、当たりか。

「実はこの子…ギルドのメイド職なんですが、どうせなら良い物を、と思いまして」
「まあ、お目が高い！ただ、御領主様のお屋敷のメイド服とまっ

たく同じという訳にはいきませんが…」
「ああ、一般販売されているので良いので、一番質の良い物をお願いします」
「承りました。それではこれなど…」
と、示されたのは、紺色のロングスカートのクラシックタイプメイド服。
前掛け部分のフリルもうるさくない程度になっていて、上品かつ、実用的な作りだ。
それに加えセットでヘッドドレスと靴も進められる。
「いいですね、これのセットを着替えを含めて2着と…後は下着のセットを私と彼女の分をそれぞれ5組ずつお願いします」
「はい、ありがとうございます…では、お二人のサイズは…はい、少々お待ちくださいませ」
私とネイルがそれぞれサイズを伝えると女性は店の奥に品物を取りに戻っていった。
さすがに女性用下着まで『戦オン』のアイテムには無かったからなぁ…あっても「腰巻き」とかだろうし、それはさすがに現代人女性として勘弁して欲しい。
「お待たせしました、こちらになります」
おや、メイド服はともかく…下着類も以外といい。絹に近い手触りの柔らかい物だ。
「ありがとう、全部でおいくらでしょう」
「はい、締めて…銀貨２０枚…２０００クラムになります」

う、どこの世界でも女性の衣類にはお金がかかるのね…今は懐が暖かいから良いけど。

「では、これで支払いを」

「あの、シノ様、私の分は自分で支払いを…」

「いいの、半分私の趣味で着て貰うんだから」

と、私はさっさと自分の財布代わりの小袋から銀貨を２０枚出して支払った。

「ありがとうございました、またのお越しをお待ちしています」

ミンスター衣料店を後にした私達は、他にも細々とした生活用品を店を回ってそろえる等していたが、気が付くとすでにお昼の時間になっていた。

「よし、それじゃあ宿に戻って食事にしようか」

幸い、ここも元の世界と同じように一日3食の習慣なので、事前に頼んでおけば宿の一階でお昼を取ることが出来る。

「はい、シノ様」

ネイルはフリルの付いた可愛い服が嬉しいのかミンスター衣料店を出てからずっとメイド服を胸に抱えて歩いている。

その彼女を促して、私は定宿している宿へと向かった。

「ん、今日も美味しかった…港町のせいかお刺身まで出るとは思

わなかったけど…」

さすがに醤油まではなかったが、ゆず胡椒に似た調味料で食べるお刺身もなかなか美味しかった。

スイートルームの時ほどではないけど、量も十分だし、何よりちゃんとネイルと二人分が出されるようになったしね。

「はい…おさかな…美味しかったです…」

ネイルはちょっとトリップしたみたいになってる。どうも食糧事情の劣悪な奴隷時代の反動で、美味しい食事を取るとこんなんなるらしい。可愛いから良いけど。

「ネイル、大丈夫？休憩するならお部屋行きましょう。私もちょっと…やる事あるしね」

ふらふらするネイルの背中を支えて2階の部屋へ戻る。

部屋に入るとネイルをベットに座らせ、私は今日買ってきた荷をほどいていく。

その中から2着のメイド服の内1着を取り出しハサミを当てる…

「あ、あの…シノ様？何をなさるんです？」

「ん、1着バラそうと思って」

「な、なぜ？せっかく買ってきたのを」

「うん、型紙代わりにね…しようと思って」

「？？？？」

ふっふっふっ、混乱しているネイルも非常に可愛くてよろしい。

「猫耳使用人計画（ネコミミメイドプロジェクト）最終段階は！戦闘用メイド服の作成です！」

「……もしかして服も…作れるんですか」
「まかせて」

『戦オン』には生産だけの職、戦闘だけの職、というものは無い。どの職も戦闘職としての側面と生産職としての側面を持っている。
ちなみに私が所有している４職のキャラは

忍者……布系装備及び忍者道具の制作
陰陽師…魔道具及び召還符の制作
鍛冶師…金属系武器防具の制作
薬師……各種の薬及び印籠の制作

と、各種得意な生産品がある。
本来ゲーム中では布系装備を作るには『型紙』アイテムが必要なのだが、その代わりに１着本物の服をバラして使おうという訳だ。

「ああ、バラす前に技能変えておいた方がいいな…技能セット『生産用』と」

【器用度上昇】【業物確率上昇】【裁縫・上級】【布防具作成】【所持限界重量上昇】
【神通力付与】【身体能力付与】【付与率上昇】【美的感覚・上級】【休息】

技能を変更して作業を再開する。
おお、さすが『裁縫・上級』と『器用度上昇』あっという間にばらすことが出来た。

続いてそれを順番通りに床に並べ…所持品欄から素材を取り出す。

出来上がりをイメージして『布防具作成』を実行。
すると、私の手が勝手に超スピードで動いて素材を縫い合わせていく。
上木綿、練絹（ねりぎぬ）、綸子（りんず）をベースに王虎の毛皮と神龍の鱗で要所を補強していく。
本来なら『メイド』は多少の革鎧系も装備出来るという事なのだが…そこをあえてメイド服で通す為に素材は惜しまない！
また、戦闘用の為スカート丈は少し短くして膝下にしてみた。

「ん、これも使えるかな…」

本来なら宝石や『付与玉』と呼ばれる魔力の固まりの宝玉を付与作業に使う所を、同じ魔力の固まりであるという『デス・マンティス』の魔石で代用してみる。

「おお、うまくいきそう…」

手に持った魔石が砕けると同時に、その魔力は光を発して服に吸い込まれていった。
次に、薬師で作った魔法の染料で、一気にメイド服のデフォルト色に染め上げる。
仕上げは胸元に大粒の宝石を飾りたいが…

「うーん、金剛石だとちょっとうるさいかしらね」

ここは同じ光属性の蒼月光石（ブルームーンストーン）を飾る事にする。

「よし！服は完成！次はヘッドドレスかな」

こちらは小さい分手の入れる余地が少ないが…

「とりあえず基礎部分を玄武のベッコウにして…布部分は上木綿…縁取りを夜叉蜘蛛の糸にして強度を確保…耐魔性能を付加させたいから黒曜石をつぶして…」

ヘッドドレスには黒曜石の純粋な黒が光となって注がれていく。

「ん、とりあえず完成、かな？いい仕事したぁ～」

と、額の汗をぬぐっているとネイルがやけに静かなことに気が付いた。

「どうしたのネイル、大丈夫？」

「し、し、し、シ、ノ様…」

「ん？」

「一体いくらするんですかーーーーっ！この服っ！！」

「いくらって…そうね」

『戦オン』の貨幣基準と単純に比較出来ないし…ああ、屋敷システムの一番小さいのの代金が同じ位かな。

「小さな家が一軒買える位？」

「……ひっ！」

…ネイルは気を失ってしまいました。

1時間後。ようやく目を覚ましたネイルが固辞するのを、今後の

戦闘に必要で、ひいては私の為にもなると言い聞かせて…やっとの事で着用を納得して貰いました。

『月光のメイド服』
メーカー：ＳＩＮＯ
レベル制限　レベル１５以上
種族制限　猫系獣人のみ
クラス制限　メイド系のみ
防御力　７５
術防御　６０
身体付与　ＳＴＲ＋１　ＳＰＤ＋１
技能『重層結界』使用可

『ホワイトブリム・ノワール』
メーカー：ＳＩＮＯ
レベル制限　レベル１５以上
種族制限　猫系獣人のみ
クラス制限　メイド系のみ
防御力　３０
術防御　５５
身体付与　ＭＩＤ＋１
技能『耐魔結界』使用可

ちなみに着用制限を厳しくしたのは、その分性能を上げる為ですが…おかげで実質ネイル専用となってしまいました…獣人のメイドなんて聞いたこともないそうです。

まあ、とにかく。
野望の一角、猫耳メイドプロジェクト、達成です！わーぱちぱちぱち。

「うんうん、可愛いわよネイル！」
「あ、ありがとうございますシノ様…」

約1名青い顔をして表情が引きつっていますが…慣れてください。
私のメイドさんになったのが運の尽きだったのです。

商会を立ち上げました。（前書き）

１／５現在、「小説を読む」モバイル版で小説ランキング〔日刊〕５位ファンタジー部門〔日刊〕４位…お気に入り１０００オーバー…一瞬何があったのか信じられませんでした。皆様のおかげです。

今回はちょっと短めです。

商会を立ち上げました。

さて、ネイルを名実ともにメイドにして数日。
このままでも一年近くはこの宿で遊び暮らすことが出来る位の所持金はありますが…
堅実な日本人としては生涯宿屋暮らしというのは精神的に良くありません。
ということで初心に返って土地を買う為にお金儲けの策を練ろうと思います。

「ネイル」
「はい、何でしょうシノ様」

私はただいま大浴場備え付けのサウナで俯せになっております。
そんでもってバスタオル一枚のネイルからマッサージして貰っています。
はあ…極楽。
後でネイルにもしてあげるねって言ったら、「とんでもありません！」と拒否されました。残念。

「う、そこ…あのね、ここ数日休養…してたけど」
「はい」
「当初の目的…土地を買う為にそろそろ準備しようと思うの」
「ということは…？」
「うん、ギルドの仕事を再開するのと同時に…商売でもやってみようと思って」
「それは良いですね…で、何のお仕事を？」
「…ん、あ、いい…とりあえずは行商かな…行商って始めるのにどこかに許可がいるの？」

「いえ、身分証明…ギルドカードで結構ですが、持っていれば問題ありません。街の中に店舗を開くとなると商工ギルドの加入が義務づけられますが」
「ふむ、なら問題ないかな…じゃあ、お風呂上がったらポルテさんの所へ行こうか」
「…？…また何か作るので？」
「うん、ネイルの「それ」、ほど凝ったのじゃないけどね」
「…私はシノ様のメイド兼、従者兼、護衛ですから、どんな時であろうと武器を離す訳には参りません」

ネイルの首からは鞘に入った「それ」が銀のチェーンに吊られて揺れていた。
私がネイルの集中レベルアップの為に作った『闇薙の包丁・紫乃壱式』である。
…どうもこれがネイルの新しい固有スキル『家事道具習熟』と相性が良く、従来比１５％アップ位の性能向上を見せている。
それに加えて「主（わたし）から送られた主（わたし）の手作り」、ということで、ベットからお風呂まで持ち込もうとする執着ぶりである。
素材採集依頼の時に手に入れた報酬で銀のチェーンを買ってきて、鞘に取り付け、まるでペンダントのように首から包丁を提げて持ち歩いているのだ。
…さすがにお風呂に常時持ち込むと痛むので、鞘に『状態保護』の符を貼り付けてあげる事になった。
…えーと、なんだ…なんかこういうのって…そう、クリスマスプレゼントを貰った翌日の小学生みたい。

「ありがとう、ネイル、もういいわ…気持ちよかった…」
「いえ、いつでもご用命ください」
「うん、またお願いするね…ネイル」
「はい」

「ん…ちゅ」

私の呼びかけに振り向いたネイルの頬を押さえて、唇のそばにくちづける。

「…ししし、シノ様っ！！」

「あはは、ご褒美ということでっ」

私は真っ赤になっているネイルをサウナに置いて、浴室から上がった。

さて、着替えたらポルテの所へ行こうか。

「という訳で、砂鉄か鉄鉱石を都合して欲しいの。後はコークスか炭も」

「…いきなりなんでぇ」

朝風呂の後ポルテの武具店にネイルと押しかけた私はいきなり商談を切り出した。

「ちょっとね、仕事先で包丁の行商でもやろうかと思って」

「ふん…まあ、いいか、武器じゃなく包丁だってんなら競合しねぇ…だが、原価じゃ俺の儲けがねぇぞ」

「とりあえず金貨一枚分売ってくれる？仕入れ値の１．１倍で買うわ」

「おい、いいのか？あんたがギルドに加入して直接仕入れればすむんだぜ？」

「ちょっとね、商売になるか試してみたい事があるの。そのため

のテストケースだから、わざわざ商工ギルドに入るのもね」
「まあ、いいがな。炉も使うんだろ？サービスだ、追加料金無しで半日貸してやる」
「ありがと♪助かるわ」

商談が成立するとポルテは助手も使って倉庫から金貨０．９枚相当の炭と鉄のブロックを炉の近くに積み上げてくれた。

「まあ、どんな商売するのか知らねぇが、がんばんな。俺たちは半日、店頭にいるからよ…終わったら声をかけてくんな」

そういうとポルテ達はさっさと行ってしまった。仕入れの助言をしてくれるあたり、顔に似合わず人が良いらしい。

「さて、半日でこれだけの量…スキルで作るとはいえ…間に合うかな～」

私は炉の火を確かめると、所持品欄から半透明な砂を大量に取り出した。
これらは『採掘』スキルで街の近くの河砂から採取した物だ。
珪砂…いわゆる石英とか水晶と呼ばれる鉱物の砂状の物である。
で、いくらただ同然で砂状の物であっても、基本的には水晶と同質の物である。そして『戦オン』では水晶は宝石扱いされている。
つまり、効果は微量であろうとも魔力を付加する触媒たり得るということで…

「超廉価版魔法武器（チープエディションマジックウェポン）の製造、いってみようか～」

『鬼神の鎚』を握りしめて、私は自分に気合いを入れた…

「んっぷぁ！できたぁ～」

「お疲れ様でした、シノ様」

私はネイルの差し出してくれた竹筒を受け取り、水で喉を潤した。

「うん、素材の割になかなかのが出来たんじゃないかな～」

私は目の前に積まれた包丁の山を見つめる。

『雷鳴の包丁（ライトニングナイフ）・紫乃番外』

レベル制限　無し

種族、クラス制限　無し

攻撃力　２０

水系魔獣に対する特効　１．２倍

雷撃系追加ダメージ（極小）あり

「何というか…さすがはシノ様、というか…」

「うん？」

「普通、マジックウェポン制作者は何日もかけて寝食を削り武器に魔力を付与すると聞きます…それを小型武器とはいえ５０本を半

日で付与なさるとは…」

若干あきれたニュアンスのネイル。

「あはは、でも、ほら、『闇薙の包丁』に比べたら一体成形で手抜きもいいところだし、素の攻撃力だって２０前後…ショートソードレベルだし、雷撃追加ダメージは圧電体が珪砂のせいで極小だし」

「そもそも、包丁の素の攻撃力がショートソードレベルあるのも十分異常です」

「そうかー、じゃあ売れるかな」

「値段と売り方によっては間違いなく」

「そっか～じゃあ、大きな街に行って行商してこようか…近くにここ以上に大きな街ってある？」

「そうですね、北に徒歩で３日ほど行くと王都アイリーザがありますね」

「ふむ、じゃあ明日にでも王都行きの護衛依頼とか無いか探してみようか…」

等とつらつら考えながら包丁を所持品欄にしまっていく。

ちょうど良い依頼があればいいな。

※？？？ＳＩＤＥ

なんなんだあれは。

それを見た時、一瞬意味が分からなかった。

俺は冒険者ギルドに所属しているDクラスの戦士だ。
今回の仕事は王都へ行く荷馬車隊の護衛で…滅多に魔物なんかでない街道だから楽勝だと思ったんだ。
キャラバンの規模が大きいから同じく護衛に雇われた者達も１０数人いたしな。
まあ、その中になぜか「メイドの服装をした獣人の小娘」や、「全身黒ずくめのべっぴんさん」がいたのは不安だったが…

異常は2日目の夕方に起こった。
キャンプ地を決めて陣を敷こうとしたその時ー

Cクラス魔獣の『ジュエルリザード』が街道近くの森からいきなり飛び出してきやがったんだ。
それも3匹…
俺は正直、「ああ、これで死ぬのかな」と思ったさ。
奴らはクラスこそCだが、その額の宝石で体に耐物理結界を張り巡らせているせいで、魔法か魔法の武器じゃないとろくにダメージも与えられねぇ。
おまけに牙には毒がある。
魔法使いのいないこのキャラバンじゃ逃げるしかねぇ。
で、その時間を稼ぐのが護衛の役目だからな…

俺たちは覚悟を決めて『ジュエルリザード』に攻撃を開始した。
少しでも奴らの注意を引かなければ…
だが予想通りこっちの武器はほとんど効きやしねぇ。
なのにこっちの傷は少しずつ増えていく…ジリ貧だった。
そんな時だ。
…
彼女らが飛び出してきたんだ。

護衛隊にいた黒ずくめの美女と獣人のメイド少女。
その二人は雷光輝く魔法の武器を持ってあっという間に『ジュエルリザード』を切り裂いていった。
まるで紙を裂くようだったよ。

俺たちは目を疑ったもんさ。
その二人の技量に。
その二人の美貌に。
そしてー
その魔法の武器が包丁（キッチンナイフ）だった事にー

※???ＳＩＤＥ　ＥＮＤ

「大丈夫でしたか？」
私は先頭で剣を振るっていた男性に笑顔で声をかけた。
彼らが時間を稼いでくれたおかげで最後尾の私達が間に合ったのだ。
おまけにこれ以上無いシチュエーション。
普通の武器が効きにくい敵、包丁の雷光が目立つ夕方…
商品のプレゼンには絶好だった。
笑顔くらいサービスしますよ。

「あ、ああ…助かったよ」
「いえいえ、同じパーティじゃないですか…結構、傷、あります

ね…ネイル！」
「はい、シノ様」
「こちらのおじさまの傷、直してあげて」
「はい」
「すまんね…そっちの子は治療術師なのかい？先ほどは見事な剣捌きを見せてくれたが」
「いえ、わたしは『ルミナスメイド』です…『治療』」

淡い光が男性の全身を包み傷を癒していく。
ネイルが『ルミナスメイド』となって習得したスキル『治療』は、傷薬を消費して回復魔法を発動する特殊なスキルだ。
その回復量は傷薬の約3倍…単体対象ながらもその回復量は『キュアライトウーンズ』を上回る。

「しかし、その…」

なにやら男性が聞きたい事があるようなそぶりをしている。何が聞きたいのか何となく想像がつくが。

「その、包丁？はもしかして…」
「ああ、これですか？これは我が「神楽商会」の新製品…『雷鳴の包丁（ライトニングナイフ）』です！」
「…やっぱり包丁なのか」
「ただの包丁ではありません。当社独自の技術によりマジック・ウェポンでありながら驚きの低価格を実現！しかもーネイル！」
私は合図とともにネイルに向かって足下の小石を放る。
「はっ！」

気合い一閃ー

小石はネイルが持つ包丁によって、なめらかな断面を見せて４つに断たれて落ちた。

「このように基本能力も手を抜いておりません。しかも常に雷撃をまとっている為、『水系魔獣に対する特効　１．２倍』が付加されております」

「「「「おおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」」」」

他の護衛や商人達も興味をそそられたのか人垣が出来ている。

「小型武器だからこそサブウェポンとして持ち歩くのに邪魔にならず、普段は普通の包丁としてもお使いになれ、まさに一石二鳥。不意のアンデットや魔法生物にも十分対応出来ます！」

「「「「う〝おおおおおおおおおおおおおおおおぉぉん！！」」」」

もう、その熱狂度はジャパ〇ットタ〇タレベル。

「でも、そんなに高性能だとお高いんでしょう？」

ネイルの絶妙の合いの手。

「それが、今回は…開業記念特別価格…銀貨５０枚の所を銀貨１０枚で販売いたします！ただし先着５０名様に限らせて頂きま…わぅっ！？」

お約束の台詞は最後まで言えなかった。

冒険者達だけではなく護衛対象の商人まで一斉に「売ってくれ」と殺到してきたからだ。

結局ー王都で売るはずの『雷鳴の包丁（ライトニングナイフ）』５０本は護衛２日目で完売した。

金貨にして５枚の売り上げで、材料費除いても金貨４枚…４０００クラムのぼろ儲けになった。

ジャパ〇ットすげえ。

後で相場をよく調査した所、マジック・ウェポンの価値は思ってたよりずっと高かった…銀貨１０枚というのは相場の１０分の１以下だったらしい。

…そりゃ売れるわ。

商会を立ち上げました。（後書き）

シノさんは戦オン内での取引の延長で値段を決めてしまったようです。

次の更新は未定ですが遅くとも七日には更新したいです。

水上の交渉（前書き）

遅くなりました。
何とか宣言した7日までには次話を投下する事が出来ました。
これも当方の稚拙な小説を読んでくださる方、感想を書いてくださる方、誤記、矛盾を指摘してくださる方、皆様のおかげです。

水上の交渉

「ポルテさーん、またちょっと工房貸して欲しいんですが～」

私はすっかり顔なじみになったポルテの店を訪れた。

「…来やがったな姐さん」

包丁という名の魔剣（マジックウェポン）の行商に味を占めた私は、あの後、もう一回、同様の商売を行っていた。

海岸で『採取』技能を実行した所、質は低いものの真珠が手に入ったのだ。

今度は数こそ３０数個と少ないもののれっきとした宝石。

真珠の魔法的な親水性を利用して作った水刃（ウォーター）の包丁（ナイフ）は前回よりも出来が良かった。

また、前回販売価格が安すぎたとの反省も得て、一本銀貨５０枚で販売したのだが、これもあっという間に３０本を完売。

予想より需要があるようだった。

おかげで所持金は金貨２０枚を超え、目標の金貨３０枚まで後一歩、という所なのだが。

「悪いが姉さん、商工ギルドからのお達しでな、しばらく工房は貸せねぇ…なんかギルドに睨まれるような事やったのか？」

「…覚えがないけど」

「…ここ数日、えらく性能の良い魔法のナイフが格安で大量に出回っているらしくてな、価格の相場が荒れて大騒ぎらしい」

まずい。それなら思いっきり覚えがある。

「…雷をまとったり、水流を出したりするナイフ？」
「…やっぱり、おまえさんか…普通じゃない作り方していると思ったら魔法の包丁だったのかよ…」
「しかし、まだ2回しか売ってないのに、よく私だって商工ギルドも分かったねぇ」
「売ってたのが黒髪のべっぴんな冒険者で、包丁に紫乃って刻まれてりゃあ…そら分かるわな」

作者の銘を刻むのは日本の刃物の伝統だから仕方ありません。というか『戦オン』のシステム上そうなってます。

「で、な、商工ギルドから伝言だ。『この先商売を続けていくつもりなら、ギルドに加入するなり筋目を通せ』だとよ」
「…行商専門ならギルドに入らなくても良いと聞いたんだけど」
「規模の問題だなぁ…まさか行商で魔法武器（マジックウェポン）を露天販売するヤツがいるとは思わなかったんだろうよ」

…なんかめんどくさい事になってきたなぁ。
でもまぁ、ここに土地を買う予定である以上、一回は顔を出しておいた方が良いかな。

「わかった、これから顔を出してくるよ」

私はいったん宿に戻り、部屋の掃除をしていたネイルをつれ商工ギルドへと向かった。

商工ギルドは商店街の入り口近くに建った煉瓦造りの建物だった。
私が商工ギルドの受付に用件を告げると私とネイルはすぐさま応

接室へと案内された。

「…よく来たね、私が商工ギルドの長アザトーネだ」

部屋で待っていたのは中肉中背の…一見４０代に見える男性だった。

「冒険者ギルド、クラス『クノイチ』シノ・カグラです。お見知りおきを…この子は私の従者でネイル、と」

「ああ、堅苦しい挨拶は抜きだ…まあ、座りたまえ」

示されたソファーにネイルと二人腰を下ろす。

「しかし信じられんな」

「何が、でしょう」

「貴女があのマジックウェポンを作ったという事がさ…「あれ」はマジックウェポンとしては珍しくないレベルの品だが、それでも大量生産出来るようなレベルの物でもない」

「…」

「正直、貴女が他国の魔術師ギルドの手先なのではないか、と危惧するメンバーもいるのだよ。多数の付与魔術師（エンチャンター）のバックアップを受けているはずだ、とね。どんなカラクリなのか聞かせてもらえるかね」

マジックウェポンの相場混乱だけで呼び出された訳じゃなさそうだ。

「他国のスパイならその国に大量のマジックウェポンなど流さないと思いますが」

「それを…証明できるかね？貴女自身が類い希な魔導師であるこ

とを」

正確には魔導師ではないんですが。

「具体的には何をしろと仰います？」

「そうだな、我々の目の前で魔法の品を作ってみてくれるかな？その作品の出来次第では周りも認めるだろうし、その品をオークションにかける事で損益をある程度補填出来れば、損害を被った者達も納得するだろう」

「そんな一方的な…今回シノ様はギルドの掟に反する事など何もしていないはずです！」

アザトーネを睨み付けて私の弁護をするネイル。可愛いやつめ。

でも、まあ、あまり土地の有力者と敵対したりしたくないし、いくつか条件を付けた上でお話を受けよう。

「…条件がいくつか…土地の売買はこちらで扱っていますか？」

「うむ」

「今回の件、納得出来る物を納品出来たら…土地の購入に関して便宜を図って欲しいのです。具体的には3割ほど引いて頂けたらな、と」

「どこか目を付けた所があるのかね？」

実はある。冒険者ギルドに近いので目を付けていたのだが、ちょっぴりお高いのだ。

「冒険者ギルドから北に５００メートルほどの所に崩れたお屋敷がありますね」

「ああ、あるな。以前、没落した貴族が住んでいた所だ…土地は広いが屋敷はもう住めるような状態ではないぞ」

「土地だけで結構です。整地も新しい屋敷の手配もこちらでやりますから」
「よかろう」
「あとは…材料の手配はそちらで行ってくださるので？」
「良いだろう、何が必要だ？」
「質は最低限の小さな物で良いので、エメラルドが一つと、あとは…」
「あとは？」
「『ワラ』と『竹』と『木』です」
一瞬、何を言われたか理解出来ず、呆(ほう)けた顔をしたアザトーネの表情にちょっぴり溜飲を下げた。

三日後の早朝、私とネイルの二人は、サザンの港から沖に３００メートル程の所に浮かぶ、大型の商船の甲板にいた。
魔法の品を作る準備が出来た事を商工ギルドに伝え、「お披露目の場所として洋上が相応しいから」と、この船を用意してもらったのだ。
「ネイル、例の準備は？」
「はい、万事滞りなく」
私達の周りにはアザトーネの他、ギルドの幹部クラスらしい商人が１０数人集まっている。
その視線は不審、疑心、嘲り、蔑み、様々だ。
その者達の中にはなんと、あのコスイネンもいた。
てっきり小物だと思っていたが。

その者達を代表してアザトーネが声をかけてくる。

「さて、シノ殿。わざわざそちらの指定通り洋上に船まで用意したのだ、納得の出来るマジック・ウェポンを作って見せてくれるのだろうね」

「いいえ？」

アザトーネの言葉を私はニッコリ笑って否定する。

途端に騒がしくなる周囲。

「だから言ったのだ只のペテン師だと…」

「いや、しかし新品、かつ同一の魔法の武器が大量に流通したのは紛れもなく…」

「くだらん茶番を…」

「私の損益は…」

「…どういう事かね、シノ殿？」

アザトーネのドスの効いた問いに、私は涼しい顔をして答える。

「とりあえず落ち着かれては？皆様、私は魔法の品を作れないとは言っていません…そちらの指定は『魔法の品』だったはず。武器だとは一言も指定されていません」

「む…確かにそうだが…」

「要は私の提供する品が、今回の騒動で被った損害より価値があればいいのでしょう？」

「…まあ、そうだが…武器以外でそれほどの高価値を持った魔法の品…となると…一体何を作る気だ？」

「まあ、論より証拠。早速始めましょうか。ネイル、準備お願い」

「はい、シノ様」

ネイルが衝立(ついたて)を私の周りに準備する。

「おい、これは何の真似だ？」

「これから作るのは私のオリジナル魔導具なので、作り方をお教えする訳にはいかないのですよ。どうせ衝立の中には私しか入りませんから問題ないでしょう？」

「…初めから他人の作った完成品を持ち込むという恐れもある」

「材料しか持ち込みませんよ。心配ならそちらの女性のギルドメンバーの方、身体検査してくださって結構ですよ」

私が一行の唯一の女性にそう声をかけると、意外な事に女性はそれを辞した。

「いえ、問題ないでしょう。私の『魔力感知』には余計な反応はありません…しかし、「オリジナル」ですか…魔導具の製造は今やレシピの模倣や改良位しか行われていない、失われた技術だというのに…それが本当なら、まごうことなき大魔術師ですね」

ふむ、やっぱりこの女の人、魔術師だったか。まあ、いかさま防止に一人位は混じっていると思ってたけど。

それにしてもハードルを上げるのはやめて欲しい。

「それでは用意してくださった材料を衝立(ついたて)の内側に置いてください」

「うむ…エメラルドは一センチほどの物を用意した。竹は東方から編み籠の材料として輸入されている物を。ワラは米のワラ、それに木は桐の木…だったか、指定通りの物だ」

「ありがとうございます、十分過ぎる質の物ですね…これなら良い物が作れます」

「…そう願いたいものだな」

私はその声を背中に聞かせ、衝立の向こうに入る。

ネイルはいかさま防止の為に衝立の外で待たされていた。

「では、始めます」

技能セットを『生産用』に変えて…と。

【器用度上昇】【業物確率上昇】【裁縫・上級】【所持限界重量上昇】【休息】

【神通力付与】【身体能力付与】【付与率上昇】【美的感覚・上級】【忍道具作成】

スキルから『忍道具作成』を実行。

板を切り楕円形の物を２つ、扇形の物を８つ作る。続いて竹を削り円形の枠を２つ作り、ワラを寄り合わせて作った縄で繋いでいく…

ほんの１分ほどでそれは形をなした。

歯のない下駄にいくつかの桐の板を円形に繋いだものーいわゆる『水蜘蛛』だ。

実際にこのサイズだと人の体を乗せて浮きなどしないのだけれど、これは『戦オン』内で地下水湖の迷宮攻略に使われていた物なので実用に耐える、はず。

とりあえずここまでが第１段階だ。

続いて技能スキル画面を開き、固有スキル、『キャラクターチェンジ』を実行。

ウィンドウにキャラクター選択画面が現れる。

『陰陽師ＬＶ７６』を選択、タッチすると…私の姿は「黒髪ロングのストレート、派手な紫色の狩衣」という姿に変わった。

狩衣なんて下半身の両サイドにスリットが大きく入っていて、どこが狩衣なのか、という状態だが…そういうアイテム名だからしょうがない。

すぐに技能セットを陰陽師の『生産用セット』に変える。

【器用度上昇】【業物確率上昇】【魔道具作成・上級】【式神付与】【式符作成】

【所持限界重量上昇】【休息】【神通力付与】【身体能力付与】【付与率上昇】

スキルを確認すると、私は唯一残っていた材料のエメラルドを使って『魔道具作成・上級』を実行、念の為に水蜘蛛の風の属性を強化し浮力を補強する。

仕上げに『式神付与』で水蜘蛛を付喪神(つくもがみ)化して命令を与え完成。

「完成しました」

完成した物を持って衝立から出てきた私に一同はあっけにとられている。

「なに…？もうか？それにその服はどうした？」

「目の前で作れと言ったのはそちらですよ？服は儀式に必要だったので着替えました」

「いや、そうだが…少なくとも数時間は覚悟していたのだがな…まだ１０分もたっていないだろう」

「実際に出来ているんだから早い分には文句無いでしょ？」

「む…まあ、いい。要はその品の価値、だからな…で、それはなんなのだ？ただ板をロープで繋いだだけに見えるが」

まあ、ファンタジーなこの世界に『水蜘蛛』なんて無いよねぇ。
「説明しましょう…これは水上歩行機兼水難救助器具、『水蜘蛛・改』です」
「水上…歩行？」
「これを持って『着装』と唱えると」
しゅるしゅると縄を触手のように伸ばし、私の足に絡みつく『水蜘蛛・改』。
付与した付喪神の効果だ。
「このように勝手に装備してくれます」
「「「おおぉぉぉぉぉぉぉ！？」」」
「この短時間に本当に魔法の品を作ったのか！？」
「…勝手に動くとは、ゴーレムの一種か？」
「…お静かに。この魔道具の真価はこれからです」
そう周りの者達に言い残すと、私は一気に手すりを乗り越え船外へ躍り出た。
水面まで結構遠かったが、着水時、水しぶきはわずかに上がっただけだった。
私の体は見事に水上にしっかりと立っていたのだ。
「おい、本当に浮いているぞ…」
「魔導師がいなくても水上歩行出来るとは」
「…これは…港町であるサザンにとっては恐ろしく応用範囲が広いぞ…」

商人達の驚きの声が水上の私の所まで聞こえてくる。
私は更にとどめを刺すべく船上のネイルに指示を出した。
「ネイル！預けていた物をこっちに放って！」
「はい、シノ様」
ネイルが荷から取り出し私に放り投げたのは、もう一つの『水蜘蛛・改』
事前にもう一個作っておいたのだ。
「さて、今投げて貰ったのは『水蜘蛛・改』の試作品です。これを使って今度は『救助』の使用例をお見せしましょう…ネイル！」
「はい、今参ります、シノ様」

そういうとネイルは着ていたロングスカートのメイド服を脱ぎ去り、白一色のワンピースタイプの水着姿になる。
思わず視線が引きつけられる男性陣。
いくら普段、「魔獣の合いの子」と蔑んでいようが、ネイルが極めて美しい少女であることに代わりは無く…
その不躾な視線から逃れるようにネイルはあっさりと海中に飛び込んだ。
水面に派手な水しぶきが上がり…しばらくしてネイルは私から5～6メーターのところに浮き上がって来た。
猫系獣人だからだろうか、あまり泳ぎは得意ではないらしく必死に立ち泳ぎをしている。
「この魔道具自体が極めて軽く、水に浮きます。なので…船から人が転落などした場合」
私はそれをネイルの近くに向かって投げた。

ぽちゃんと音を立てて着水した『水蜘蛛・改』は、ゆらゆらと海面で揺れながら漂っている。

「このように、意識のある者にはその近くに投げてやるだけで良いのです」

ネイルは早速それをつかみ取り、一言『着装』と唱える。

するとやはりロープ部分がしゅるしゅると動いてネイルの足に自動で『水蜘蛛・改』が装備された。

とたん、ネイルの体の周りを巨大な気泡が包み込み、海上に押し上げる。

再びわき起こる商人達の歓声。

「この通り、安全かつ、確実に救助作業が行えます…もちろん賢明な皆様の事ですから、この道具の使用法は他にもいろいろ思い浮かぶでしょう…航海時の船体の修理や漁具の設置、流された荷の回収、水上の怪物に襲われた時の対応など…いかがですアザトーネ殿？」

「うむ…確かにこれは今までに無い『オリジナル』だ…その応用範囲はすさまじく広いだろう」

「では？」

「うむ、おぬしの言い分を認めよう。これ以降極端に相場を崩すなどしない限り、これ以上責を問おうとは思わん」

「お待ちください！！」

せっかく順調に行っていた交渉をぶち壊そうと声を出したのはやはりあのコスイネンだった。

「長（おさ）、確かに優れた魔道具ですが、一個二個ではとうてい私の損失を埋める事など出来ませんぞ！救助用というなら、それなりの数

を差し出して頂かなくては！」
「ふむ、君の損失はたかだか金貨１枚ほどだったと思ったがね？私の見立てでは、これ１組だけでも金貨２０枚は値が付くだろう」
「ぐ、…し、しかし」
「見苦しいぞ、コスイネン。商人にも矜持というものがあろう」
「…お待ちください、アザトーネ殿」

私を庇ってコスイネンをやりこめていたアザトーネ氏の言葉をわざと遮る。

「む、何かなシノ殿」
「コスイネンさんのお話もごもっとも。救助用と銘打つなら、少なくともサザンの船に一つずつは行き渡る数が必要でしょう…ギルドからの発注に限り生産依頼をお受けしますよ」

暗に「お詫びの品は納め終えた、これ以上欲しいのなら金を出せ」と言っているのである。

「材料さえ、そちらが用意してくだされば、私の取り分は純益の５０％でよろしいですよ？」
「ふむ、それは…商工ギルドには願ってもない話だな…月にいくつ位生産出来『どぉぉんっ！！！！』なんだっ！？」

私とアザトーネの交渉中に響き渡った音は同時に船も大きく揺らしていた。
船上の商人達がまるで木の葉のように甲板を転がっていく。
アザトーネだけはかろうじて船の縁にしがみつき周りを確認しているみたい。

「くそっ！一体何が…」

波はない。穏やかな風だ。
では、一体何がこれほど大型船を揺するのか…
私の位置からはその様子がしっかりと確認出来た。
船底に巨大な何かの影が蠢いている…おそらくこれが船底と接触したのだろう。
その元凶はゆっくり船底から離れ、船首より１０メートル位の所で急速に浮上してその半身を顕わにした。
その長大な首、ドラゴンのような頭。水上に出ている部分だけでも７～８メートルはあるように見える。
その外見は凶悪顔のネッシーといえば近いか。
「海竜（シードラゴン）だと…何でこんな港近くにＡクラスが」
アザトーネの顔色が一気に青ざめる。
まあ、このシードラゴンは真にドラゴンの眷属ではなく、亜種らしいが…それでもその能力は大型船の一隻位片手間で沈めておつりが来る程だという。
無理もない反応と言えるだろう。
さらには海竜だけではない、
いつの間に集まって来ていたのか…シャチ型の魔獣、「キラー・オルカ」も数頭、船の周りを回遊しだしている。
「にっ、逃げろ！港に戻せぇぇ！！」
コスイネンが声を限りに怒鳴り散らしているのが聞こえる。
「し、しかし、シノ殿達もまだ船上に回収していません！」
「かまわん！放っておけ！」

おいこらコスイネン。

「落ち着け、コスイネン、急に動けば餌か敵かと思って船を襲ってくるぞ！」

アザトーネがコスイネンを諭すが、コスイネンは聞こえていないのか半狂乱になって逃げろ逃げろと叫んでいる。

さて…もうちょっと見物してたかったけど、これ以上放っておくと収集付かなくなりそうだし、片付けますか。

「アザトーネ殿ー！あれはこっちで片付けますから、そちらは乗員を落ち着かせて転落したりしないよう気を付けてくださいね～」

私はそうアザトーネに叫びつつ、スキルセットを陰陽師の戦闘用に変える。

【自動結界】【呪力強化・極】【全体解呪】【結界全体化】【業炎・伍】【呪殺】

【多重結界】【式神召喚】【同時召喚】【散華】【精神統一・極】【星降（ほしおろし）】

「！？何を言っている、シノ殿！？あれは海竜だ！水上で人間が勝てるような魔獣ではない！」

私はその言葉を無視して、結界を張りながらネイルに指示を出す。

「ネイル、あなたはキラー・オルカをお願い。海竜の方は無視して良いわ。船に近づけさせないようにね…『多重結界』」

「はい、シノ様」

私とネイルの周りに耐物理結界が数枚形成される。それに加えてネイルの水着は海上戦闘用に作った白色水着で水系魔獣への防御力が高い…形が結果として白スク水に酷似してしまったのは必然というものです。

そして武器は例によって『闇薙の包丁・紫乃壱式』…

『水系魔獣に対する特効１．５倍』とネイルの『家事道具習熟』による補正、さらには『魔力消費による攻撃力上昇１５％』もその豊富な魔力で使いたい放題だ。

キラー・オルカ程度なら相手にならないだろう。

実際、ネイルは海上を疾走し、すでにキラー・オルカを一頭屠っている。

うん、白スク水で戦うネイルも可愛い。作って正解だった。

ーと、そんな事を考えていたその時。

どがぉんっ！！

無視されて怒ったのか、重い音を立てて海竜の尻尾が私を直撃していた…結界が一枚削られ、平手で頬を叩かれたような衝撃が走る。

…痛いな。

「シノ様っ！」

「あー、大丈夫、今片付けるから」

うーん、従者に心配をかけてしまうとは悪いご主人様だな。反省。

という事で早速。

「『式神召喚』」

召喚符を取り出し『式神召喚』を実行。

と同時に、『同時召喚』も発動し、魔法陣が空中に２つ現れる…

その中から現れたのは…白い着物に長い黒髪の女が二人。

「なんだありゃ…女が空を飛んでいるぞ！！」

「ハーピーか！？」

いいえ、『雪女』です。

私は『雪女』達に海竜を指し示めし指示を与えた。

「対象、海竜。全力で氷の息吹を」

（（承った、我が主よ））

雪女達は海竜の両側に浮かび、すべてを凍てつかせる氷の息吹を吹きかける。

海竜はそれに危機を感じたのか、雪女達に対して対して水流の息吹で反撃を試みる。

しかし、時、すでに遅く、水流の息吹は雪女達に到達する前にビキビキと音を立てて凍り付いてしまった。

それだけに留まらず、氷の息吹は水竜周辺の海面までも凍てつかせ、海竜の動きを縛ってしまう。

うん、頃合いかな。

私は雪女達に指示し、海竜を中心とする三角形の頂点に私と雪女達の３人がそれぞれ位置するよう移動する。

「アザトーネ殿ー！！ちょっと大きいの使うから気を付けてね♪」

「な、なに！？ちょ…何をする気だ！？」

自分の理解の及ばない戦闘が繰り広げられていた事から呆けていたアザトーネが再び我に返る。

「六芒星結界展開…陣外への影響を最小に設定…」

私と雪女が作った巨大な三角形が六芒星に変化し白光を放ち海竜を閉じこめる。

「【星降(ほしおろし)】実行」

私がスキルを実行すると天上から伸びたレーザーのような光がいくつも海竜を指し示し…

次の瞬間、その光に導かれるように大型トラック大の隕石が十数個、結界内の海竜めがけて降り注いだ。

「「「「どどどどどどどどどどどどどどどどどどどごごごごごごごごごごごごごごごごごこおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉんんんん………」」」」

いわゆるメテオスウォーム、エナジーフォールダウン、メテオインパクト、コロニー落とし、エトセトラの類である。

むろん、結界内にはすでに海竜の影も形も無い。オーバーキルしてしまったか。

「な…な、な、な…」

その惨状を見て、声も出ない商人一行。

「大丈夫ですか？『星卸』の余波は極力抑えたつもりだけど…特にコスイネン？」

「はっ！はひ！？」

「知り合いのあなたが無事で本当に良かったわ…『間違って』星

の一つでもそっちに行かなかったかと思って♪」

「ひぃぃぃぃぃぃぃっ！！」

その後。

非常に協力的になった商人一行（特にコスイネン）との話し合いは順調に進み、

・私が一月以内に水蜘蛛・改を５０セット納品する。
・その純益は３：７でギルドと私で分配する。
・販売価格は金貨５枚以内に抑える。
・水蜘蛛・改はギルドの独占販売とする。
・マジックウェポンの販売については大量販売しない限り認める。
・商工ギルドへの加入は特別会員扱いとして会員費、その他諸費用を免除する。

と、非常に有益な結果に終わった。

一刻も早く話し合いを終えてこの場から立ち去りたかった…というのは穿った見方かな。

船を港に帰し、解散した後、ネイルがそっと寄ってきて私に囁いた。

「こうなる事を計算して水蜘蛛に魔物の餌を仕込んだんですか？」

「さてね…まあ、こちらの戦闘力のデモンストレーションにはちょうど良かったよね」

まあ、Ａクラス魔獣まで出てくるとは思わなかったけども。

交渉がうまくいっても決裂しても、今後の事を考えれば、舐められない為に一度こちらの実力を示しておく必要があった。

いざとなれば街ごと壊滅させるだけの戦闘力がある、ということを。

また、今回の戦闘でＡクラス魔獣である海竜を倒した事によって、この世界に来て初めて私のレベルが上がった。

陰陽師の状態で倒したせいか、上がったのは陰陽師だけだったが…

思わずギルドカードを確認する。

氏名シノ・カグラ　性別女　年齢２１歳

総合レベル７７　ギルドランクＣ

クラス『陰陽師』レベル７７

ステータス

ＨＰ１５９０

ＭＰ測定不能

ＳＴＲ　１２

ＶＩＴ　１３

ＤＥＸ　１５

ＳＰＤ　１６

ＩＮＴ　１８

ＭＩＤ　１８

称号

世界の天秤

式王

固有スキル

キャラクターチェンジ

マナ解放

マナ譲渡

属性補正
炎＋４０％
氷＋３０％
風＋１０％

祝福
名も無き世界の管理者

さらにネイルに至っては、総合レベルが２０になり、スキルスロットまで増えるという大幅なパワーアップを遂げた。

氏名ネイル・サヴァン　性別女　年齢１４歳
総合レベル２０　ギルドランクＤ
クラス　メイン『ルミナスメイド』ＬＶ１４
サブ『雑益奴隷』ＬＶ１５

ステータス
ＨＰ　５１５
ＭＰ１１０５
ＳＴＲ　１５
ＶＩＴ　１４
ＤＥＸ　１３
ＳＰＤ　１５
ＩＮＴ　１３
ＭＩＤ　１２

称号

マナの申し子

固有スキル

部分獣化

家事道具習熟

属性補正

闇＋１０％

光＋２０％

祝福

神楽紫乃

さて、海竜とキラーオルカのドロップアイテムも入手したし、帰って一休みしたら、納品アイテムの『水蜘蛛・改』を作る準備を始めるかな。

水上の交渉（後書き）

連休中にはもう1話くらい書きたいです。

お庭のダンジョン（1）（前書き）

書いてみたかったダンジョン物です。
今回はその導入部分になります。
※なぜか行間を1行空けてもアップロードすると詰まってしまう…
原因分かる方教えてください…
縦書きモードで読むとちゃんと1行空いている…？訳分からん（泣）
※2　空き行に文字を打ち込んで消し、スペースを入力すると直りました。
理由は不明…めんどくさい。

お庭のダンジョン（1）

さて、水上の交渉の翌日。
私達はギルドに海竜とキラー・オルカの討伐証明部位の納品に来ていた。

あの後、付近の海水をまるごと雪女達と協力して凍らせ、バラバラになって海に沈んでいこうとしていた海竜の遺体を一つの巨大な氷の固まりにして所持品欄にしまい込んだのである。
魔力がほぼ無限であるからこその荒技であった。
むしろ回収よりも部位を傷つけず氷の中から取り出す事に苦労した…

それらをギルドに提出した時には、例によってミシェラさんに「二人でAランク魔獣を討伐って…無茶はしないでくださいとあれほど…」と怒られた。
ちなみに今回納品した『海竜（ドラゴン）の心臓（ハート）』やキラー・オルカの討伐証明部位の『オルカのヒレ』は全部で金貨7枚と相成った。
さらにはギルドランクも私とネイルはそれぞれBランクとCランクにランクアップする事になった。

さらに半月後。
私は『水蜘蛛・改』50組を制作して商工ギルドへの納品を終え、暇をもてあましていた。
本当は2～3日で作れたのだが今後の事も考えて半月かかった事にしておいた。

それでもこの世界の常識からすれば異常な制作速度らしいが…

「そうだ、土地を見に行こうかな」

目を付けていた土地は商工ギルドから3割引で無事購入した。
海竜の報酬もあったので即金で購入でき、名実ともに私の土地となったのだ。
まだ廃屋が残っていたり、庭が荒れ果てたりしているが、それらをちょっとずつ片付けて屋敷を建てる下準備をしよう。

※

「これはまた…予想以上に荒れているねぇ」

ネイルとともに購入した土地を見に来た私は、その様子に目を見張った。

ちょっとした野球場ほどもある敷地の多くは藪に覆われ、がれきが散乱している。
元は見事な噴水だったと思われる物は半壊して、濁った水の溜まった奇怪なオブジェのようになっている。
広い土地を覆う塀も所々崩れ落ち、出入りも簡単に出来そうだ。
そして…これが元々は貴族の屋敷だったのだろう、白壁で覆われた2階建ての煉瓦作りの建物はその3分の1ほどが崩れ落ちていた。

「これは…整地に時間がかかりそうですね」

ネイルも周りを見渡して半ば呆然とつぶやいた。
さて、どうしようか、と周りを見渡すと…おかしな事に気が付いた。

薮の一部が何かに踏み固められたようになっているのだ。
最近、ここを出入りした者がいる…のかな？
踏み固められた跡は、うっすらと屋敷に続いているように見える。

「ふーん、見てみようか」

私達は廃屋となったはずの屋敷へ足を踏み入れた。
屋敷の中は窓がツタや薮で覆われていた為思ったよりも暗い。

「ネイル、明かりお願い」
「はい、『ライト』」

私達の前方3メートル、高さ2メートル位の所にこぶし大の光の玉が出現する。
明るさは白色電球ほどもあって十分だ。
このライト系の魔法は『戦オン』には元々存在しないので私は使う事が出来ない。
ネイルが光属性の『ルミナスメイド』になったおかげで本当に助かる。
ネイルは『ルミナスメイド』になってから、それまでの不遇なスキルを取り戻すかのように有益なスキルを多数覚えた。
覚えた順にまとめると

『治療』傷薬を触媒にその約3倍の治療効果を与える。
『光術初級』（ライト、コンティニュアルライト、ホーリーライト）
『道具効果上昇』消費アイテムを使用した時、効果を1．5倍にする。
『魔道具効果上昇』魔法の品物に込められた効果を1．2倍にする。

の４種類。
特に『治療』と『道具効果上昇』の併用は、もはや中級回復魔法レベルである。
更に、ネイルはレベル２０になってスキルスロットが３個になった為、
【治療】【光術初級】【道具効果上昇】
の三つを常時セットしている。

「これは…使えませんね。今にも崩れそうです」

明かりに照らされた屋敷の中を確認するネイル。
玄関の壁には大きくひびが入り、所々崩れている。

「そうね…いったん撤去しないと」

私がそうネイルに答えながら更に奥の部屋に入ろうとした時、

ヒュッ

という風を切る音がした。
そのまま放っておけば、私の頭部に当たったであろうそれを、左手で柔らかく掴み取る。
それは鶏卵大の石だった。

「ふうん…なかなか上手ね。良いコントロール」

私は本当に感心してそう言ったのだが、どうやらこれを投げた相手は馬鹿にされたと感じたようだ。

「ちっ…おまえら何もんだ！？ここは俺等の縄張りだぞ！」

そう言って廊下の角から出てきたのは１３～１４歳位の細身で赤毛の少年だった。

その体躯は痩せている、というよりも、むしろ全体的に引き締まった印象だが…着ている物は一応服の形を成している、といったレベルだ。

「何者だ、と言われてもね…一応、ここの土地と建物の持ち主かな」

「嘘付け…ここの持ち主だった貴族はもう何年も前に死んでいるはずだ」

「だからそこを買い取ったのよ…私がね」

少年は私の言葉の真偽を探るようにこっちをじっと見ている。

「こんな化け物屋敷、使い道がねぇだろう…悪い事言わねぇから出てった方が良いぜ」

「化け物屋敷？」

「なんだ、あんた知らねぇでここを買ったのか？ここの屋敷はな、町中だってのに翼刃蝙蝠（ブレードバット）やら巨大蛞蝓（ラージスラッグ）やらが突然出てきては彷徨（うろつ）いているんだぜ？」

「ふーん」

「いや、ふーんて…Ｆランクのれっきとした魔獣だぞ！？」

「いや、でも…ねぇ、ネイル」

「はい、いまさら、ですね」

私とネイルはお互いの顔を見合わせる。

私はもとより、今やネイルもそこらのＣランク魔獣なら苦戦することなく倒してのける。

ましてやFランク魔獣など子猫と変わらない。

「強がりもいい加減しろよ！嘘じゃないぞ！なんでか、この敷地の外へは出て行かないみたいだから…街の奴らが知らないだけだ！」

何か今おかしな事を聞いたような？

「外へは出て行かない？巨大蛞蝓（ラージスラッグ）ならともかく空を飛べる蝙蝠（ブレードバット）も？」

「あ、ああ…塀のあたりでいっつも引き返して来て…俺等だって数人がかりでそいつ等を倒しているんだ…でもいつの間にか、また現れる」

「ふう…ん…それで君は何でそんな危険な所に住んでいるの？」

「…住む所が無いからだよ…少なくとも雨風はしのげるし、近くの店先からかっぱらってもここに逃げ込めば大抵追って来ない」

「ふむ…犯罪に利用されるのは土地の所有者として不本意ね」

「…！衛兵に突き出すのか…？ここには大人達から見捨てられたガキらが他にも住んでんだ…それならこっちにも考えがあるぜ」

少年は覚悟を決めたようにごくり、と喉を鳴らすと腰の後ろから古びた短剣を取り出した。

それをふるえる両手で構える。

「うわー…手入れしてるの？サビでぼろぼろじゃない」

「うるさいっ！さっさと出て行け！」

さて、どうするか。『影縛り』でもしてお説教2時間コースかな？

等と考えていたら…すでに目の前に少年の剣があった。

「おっと…さすが実戦経験済み」

２０センチほど右前方に回り込んでその刃をかわす。
と、同時に左腰の『岩切の小太刀』を逆手で一閃。
澄み切った金属音が辺りに響く。

「な…何だよ！何で剣が…切れるんだ！？」

少年の足下には短剣の刀身がなめらかな切り口を見せて落ちていた。
何でと言われても。『岩切の小太刀』には攻撃力低下（ソードブレイカー）としての特殊能力があるので、としか。
ちなみに右腰の『波切りの小太刀』には防御力低下（アーマーブレイカー）能力が付与されている。
「戦オン」時代はほぼソロプレイが主だったので、主武装であるこの二本の小太刀には助けられた。

「あんた…どっかの貴族じゃないのか？」
「ん？極普通の平民だけどなんでさ」

後ろから「シノ様はとても『普通の』とは言えないと…」とネイルのつぶやくのが聞こえるが無視。

「だっ、だってよ！ここの土地屋敷の持ち主だって言うし、メイドなんか連れてるし！」
「んー…どちらかというと成り上がりの冒険者兼商人かな」
「そ、そうなのか…だったら頼む！俺じゃあんたには敵わねぇのは分かった…だが、どうかチビ達の」ドゴォンッ！！「「きゃあああああっ！」」

チビ達の…家を残してくれと言いたかったのか、その言葉は半ば

で遮られた。
屋敷の二階から聞こえてきた、物が壊れるような轟音と子供達の悲鳴で。

「ローリナ！メイディン！」

少年が玄関脇の大階段を一足飛びに駆け上がっていく。

「わぉ。熱血ね…手伝うわよネイル」
「はい、シノ様」

私達も少年に続いて階上へと駆け上がる。
二階の２つ目の部屋の扉が大きく開放されており、その中から少年の怒声が聞こえた。

「ローリナ達を放しゃあがれ！！この糞ゴブリン！！」

私達がその部屋に飛び込むと、少年が折れた剣を構えて小鬼（ゴブリン）を威嚇していた所だった。
少年の視線の先には二人の少女に馬乗りになっている２匹の小鬼（ゴブリン）。
少女等はまだ１０になったかならないかだろうか？
ゴブリンは繁殖の為に他種の雌を攫う事があるというが…なぜ街中のこの屋敷にいるのか…
こいつ等も翼刃蝙蝠（ブレードバット）や巨大蛞蝓（ラージスラッグ）と同じなのか？突然どこからか出てきたのか？
部屋の中をよく見ると、テラスへと続く扉が壊され、そのすぐ外には大きな木が生えている。
ここから入ってきたのだろう…少なくとも部屋の中に直接沸いて出た訳ではないようだ。

「このやろう…っ！！」

無謀にもゴブリン2匹に突進していく少年。

だが、そのおかげでゴブリン達は少女の上から立ち上がっている。

「ネイル、二人を確保…保護して」

「はい、シノ様」

ネイルが気配を消してゴブリンの背後に移動し少女等を保護する。

どうやら服の様子から見るに最悪の所までは行かなかったらしい。

よかった…。

それを見届けると、私は少年を二人がかりで殴りつけていたゴブリンの首筋に手刀をそれぞれ打ち込んだ。

ぽーんと勢いよく宙を飛ぶゴブリンの首。

ゴブリンは確かEランクの魔物。

これ位のレベル差があれば会心（クリティカル）の一撃（ヒット）は間違いなく出る。

「な…」

呆然と私達を見る少年。

「あんたら、一体…何者なんだ？」

※

とりあえず少女達を落ち着かせる場所を作ろうと、適当な場所を陰陽師の『烈風弐』で切り開き『神風・壱』で枯れ枝や刈り取った草を吹き飛ばす。

そしてさっぱりとした空き地になったそこに所持品欄から『東屋』

を選択して『設置』。
これも屋敷システムのアイテムの一つで、最低レベルの屋敷を買うとこれになる。
私はこれを本宅と併せて日本庭園の中の休憩所のように使っていた。
今回はとりあえず少女達を休ませる為に出したのだが。
「すげぇ！なんだ今の！？どうやったんだよ？てか、ねーさん魔法使えたのか？いつの間にか服まで変わってんな。武道家じゃないのかよ！？」
少年がきらきらした瞳でこっちを見ております。
「うーん、また後でね。今は二人を休ませましょうか」
ネイルと二人で少年と同じように呆けていた少女達を東屋に誘(いざな)う。
二人が室内に入ったのを確認して障子を閉める。
「あ、おい！俺は！？」
「少年、彼女たちの服の下の怪我を確認するからまだ待ってて…覗いちゃダメよ」
「のっ、覗かねぇよ！！」
真っ赤になって障子から離れる少年
「あと、俺の名前はヴァトラだ」
「了解、少…ヴァトラ？」
「…なんだよ」
「彼女たちを守る為に武器も無いのに体を張ったのは…ちょっと

かっこよかったぞ？」

うん、君は立派な男だ。ご褒美にスマイル０円をあげよう。

「ばっ…馬鹿言ってないであいつら見てやってくれよ…」

ありゃ、ますます真っ赤になっちゃった…

「了解」

結果から言うと、彼女らにはかすり傷位で大事はなかった。
そのかすり傷も今、ネイルが『治療』を施しているのでそろそろ跡形もなくなっている頃だろう。
その彼女らの治療の間、ヴァトラ等がよく魔獣やらを見るという庭の一角を確認しに来たのだが…なにやら魔法陣のような物が地面に。
それも相当古い物のようで。

「怪しいよね？」

とりあえず魔法陣の上に乗ってみると…
シュンッ
次の瞬間には、なにやら石造りの迷宮の中でした。
さすがに私も事前情報もなく一人でダンジョンに挑むほど無謀ではないつもりなので、出口はないかと周りを確認すると、やっぱり足下にさっきの物と同じ魔法陣がある。
察するに今までの魔物はここから偶然転移してきたのかも…
もう一回魔法陣に乗り直すと、
シュンッ

と、さっきと同じような音がして元の場所に戻っていた。

「ふむ」

これを根本的に何とかしないと今後も魔獣が出続けるな…どうするべきか。

とりあえず東屋に全員を集めて話を聞く事にしよう。

「とりあえず自己紹介からかな…私はシノ・カグラ。ギルドの冒険者でランクBのクノイチよ」

「ネイル・サヴァン…シノ様の従者をしております。ギルドではランクCのルミナスメイドです」

「ヴァトラだ。こいつ等は…もぐんぐ…ローリナにメイディン…がつがつ…てゆーか、姐さんランクBかよ…そりゃ強い訳だ」

「ローリナです…あの、お姉さん、ありがとう」

「メイディンです…ありがとうございました」

薄茶ショートの女の子がローリナ、肩までの金髪の子がメイディンらしい。

「うん、よろしくね…ところで二人とも遠慮しないで食べて？いっぱいあるから」

東屋の中央にちゃぶ台を出して、いつかのように日本各地の名産を山盛り出してある。

「は、はい」

「頂きます」

さっきから女の子二人の目もちゃぶ台の上の名産…特に甘味…柿

や温泉まんじゅうから離れない。

「あ…これ、美味しい…」

「こっちも見た事無いけど甘いよ！？」

「ばぁか、甘いもんばっかじゃなく肉食え肉…」

ひたすら食べ続けるヴァトラから聞き出した所によると…ここに住んでいた貴族が生きていた頃からおかしな噂はあったらしい。

近所の子供がいなくなるとか、魔獣の咆哮を聞いたとか…

２年位前にその貴族も死に、子供の行方不明もぴたりと止まったため、近所の者はその貴族が子供を誘拐してなにやら怪しげな事をしていたのだろうと噂していた、との事。

「んで、近所の奴らもここの敷地には滅多に入ってこないんで、俺等が根城にしてたんだ」

「なるほどねぇ」

「あの…私達、行く所が無いんです…追い出さないでください」

「お姉さんがここの持ち主になったというのなら…どうか、お願いです」

上目遣いにお願い攻撃をしてくるローリナ＆メイディン。

君たち、それは反則です。

「ネイル、孤児院とかってこの街にはないの？」

「ある事はありますが…孤児院とは名ばかりの奴隷組織の末端です。以前私の周りにも孤児院から買われてきた者がおりました」

ふむ、国とか街によってきちんと運営されている訳じゃないのか。

「姐さん、図々しいのは分かってる！だが…」

「ヴァトラ…私はね、ここに新しい屋敷を建てるつもりでここの土地を買ったの」
「あ、ああ」
「結構大きい屋敷の予定でね、まだ使用人は決まってないのよね」
「ね、姐さん？それじゃ」
「ご近所の食べ物をかすめ取るこそ泥は置いておけないけど…調理人とか庭師とか必要な人員は絶賛募集中よ？」
「…お、恩に着るよ、姐さ…シノさん」

目に見えて表情の明るくなる3人。
こりゃ、ますますあの魔法陣を何とかしないとな。
後でギルドに相談してみよう。

「とりあえずは…お風呂と着替え、かな」

抱き合って喜んでいる3人を見ながら私は「屋敷システムのアイテムに五右衛門風呂があったな…」とか考えていた。

お庭のダンジョン（2）（前書き）

まだダンジョンに潜れません。
新しいメンバーが二人参加。
ヴァトラくんが変なフラグ立ててます。・

お庭のダンジョン（2）

私の所有する土地に謎のダンジョンの入り口があることが判明してからさらに十日。
私は自分の土地の安全を確保するためダンジョンの探索を行う事にした。
しかし、問題はこのダンジョンが全く未知の物であった事だ。
ギルドに報告した所、その扱いを巡って紛糾したらしい。

メリットとしては冒険者が大量に集まり、経済が活性する可能性がある事。
デメリットとしてはあまりにもその入り口が街中にあり、これを開放した場合、住人の安全が確保できない事。
結局、個人の土地の中にあると言う事で私の意向が重視され、私を含む数名の者達でどんな規模のダンジョンで危険度はどのくらいなのか探索する事になったのだ。

ちなみにこれは依頼という形になり、依頼者は私、だ。
というのも、ギルドはこれをランクCの依頼としてギルドで出そうとしたのだが、私がそれを承知しなかったのだ。
いくら地上に彷徨（さまよ）い出た魔獣がランクの低い物ばかりであったとしても、未知迷宮は出来うる限り最大の手段を講じるべきだと主張し、しまいには「私が依頼人となり報酬を出します」と言ってしまったのだ。
…いや、ゲームではその時点で買える最強の武器防具を買ってからじゃないと先に進まないタイプなもので。
それに加えて報酬に出せる資金が潤沢にあった事も理由だった。
商工ギルドから『水蜘蛛・改』の販売が開始され、売れ行きも好調、私の手元には利益の７割、約金貨９０枚が入ってきたのだ。

その資金を使い『ランクB以上限定』の依頼としてギルドで募集を掛ける。

『ランクB　お庭のダンジョン探索
市内の元貴族の土地にダンジョンの入口が発見された。
新しくここを購入して屋敷を建てたいと思っているが、その前にダンジョンの脅威を取り除きたい。
依頼達成はダンジョンの最奥までの探索、もしくは脅威の排除探索だけであれば一人金貨5枚、脅威を排除できれば一人金貨8枚を報酬とする。
当方にて探索員2名を確保しているので、追加要員としてランクB以上を2名募集する』

これによって外部戦力を確保し、さらに従来戦力も強化することに。
具体的にはネイルに新しい武器を用意してやる事にした。
例によってポルテの店で鍛冶場を借りて作成に入る。

「…お玉、ですか？あのスープをすくう…」
「そのお玉です」

物理攻撃の武器としては『闇薙の包丁・紫乃壱式』で十分だと思われるので、魔法が有効な敵を想定して魔法使用に特化した武器…ロッドを作ろうと思ったのだが…
ネイルの固有スキル『家事道具習熟』がすばらしく使い勝手が良いので、どうせならとロッドも台所用品にしてはどうかと思ったの

だ。
幸い「戦オン」はネタ武器の作成も非常にバリエーションが多く、他にも『ハリセン』とか『隣の晩ご飯しゃもじ』とか作れるのだが。
「素材は…魔力と相性の良い『ヒヒイロカネ』と『白備長炭』で…火種を『カグツチの神火』を使って…」
ネイルのレベルが上がった分、レベル制限が緩やかになるし、高級素材を使えるな。
「あああ、またそんな高そうな素材を…」
先行投資には資金を惜しみませんよ。
ましてやネイルの武器ですから手は抜きません。
「『小型武器作成』実行と」
『鬼神の鎚』に魂を込めて、とろけた金属を叩き続けると…やがてお玉の形になって固まった。
全長５０センチはあろうかという少々大きめのお玉だが。
再鍛錬は…2回か。まあ、メインは魔法だから攻撃力が多少低くても良いか。
付与する魔法は…紅玉（ルビー）を触媒にして火炎球（ファイアーボール）にしようと決めていたので、事前に質の良いスタールビーを買ってある。
所持品欄から直径2センチほどもあるスタールビーを取り出す。
「…シノ様、まさかそれ…」
「ん、今回の付与に使うよ？」
「…ちなみにおいくら…」
「んー…金貨3枚」

あ、ネイルが貧血を起こした…

「ヴァトラ、ネイルに水を飲ませてあげて」

「しょうがねぇなぁ…ほら、ネイル姉、しっかりしなよ」

「うう、金貨3枚ぃぃ～」

ヴァトラ達はとりあえず新居が出来るまで、私たちと同じ宿屋に部屋を一つ取って住まわせている。

ここ数日ですっかりネイルともうち解けたようだ。

ネイルはヴァトラに任せて最後の仕上げを…スタールビーを握りしめ、魔力を込める。

やがてルビーは深紅の輝きを放ち始め…それを今度はお玉に注ぎ込む。

「完成！これには『紫乃弐式』のナンバリングを与えよう！」

壱式と同じくその柄には燦然と輝く『紫乃』の文字。

これに檜の柄をつけて、まだ腰が抜けた状態のネイルに渡す。

『炎（ファイヤー）のお玉（ボール）・紫乃弐式』

レベル制限　２０以上

種族制限　猫系獣人のみ

クラス制限　メイド系のみ

攻撃力　２５

魔法攻撃力　８２

魔力消費　３０％減

身体付与　ＩＮＴ＋１
技能　『火炎球（ファイアーボール）』使用可
特殊能力　火力調節

「こ、これ…またとんでもない効果が…？」
「んー、それほどでもない。魔力消費が３０％減るっていうのと、ファイヤーボールが使えるって事くらいかな」
「十分規格外です…どんなお玉ですか」
「まあ、『家事道具習熟』と『魔道具効果上昇』を持っているネイルにはこの方が相性が良いと思ってね」
「シノ様…そこまでわたくしごときの事を…」

涙目になって感激しているネイル。可愛いなぁ、もう。からかいたくなっちゃう。

「うふん。お礼なら今夜ベッドでね…」

ネイルの額をかき上げて、ちゅ、と軽いキスを落とす。

「ししししし、シノ様っ…こ、子供達が見ていますからっ…」

後ろで見ていたヴァトラ、メイディン、ローリナを気にするネイル。

「…ベッドでお礼って…今言った方がいいじゃんなぁ？」

キョトンとして何を話しているのか理解していないヴァト君。

「メイディン、ヴァト兄…本気で言ってる？」
「ヴァト兄は本気よ…ローリナ」

どうやらそっち方面では少女達の方が大人のようだ…二人ともうちょっとヴァト君に優しくしてあげて（泣）

さて、武器はこれで良いとして…ネイルに『治療』『光術初級』『道具効果上昇』『魔道具効果上昇』の四つともセットするとなるとスロットが一個足りない。

「ネイル、これも装備してみて」

自分の腰から外して渡したのは『守護の印籠（アクセサリー）』スキルスロットを＋2する効果がある薬入れだ。

「これは…？」

「守護の印籠と言ってね、スロットを増やす事が出来るアクセサリーの一種」

「…そんな物があったんですか…あ、でもこれをいただくとシノ様が」

「大丈夫、『クノイチ』の私はまた別に持っているからね。同じのを」

「は、はい…ありがとうございます」

キャラクターごとに一つしかもらえないイベントアイテムだが、私は４キャラ分、４個を所持していた。

残り３つを使い回せば一つをネイルに渡した所であまり支障はない。

ともかく、これでネイルのスキルスロットは＋2となり、実質５スロット使えるようになる。

「そうだね…スロット一つ余るけど、あとは…」

「奴隷時代に覚えた防御力上昇のスキル、『ストーン・スキン』

がよろしいかと思います」
「ん、そうだね、セットしてみて」
「はい」

【ストーン・スキン】【治療】【光術初級】【道具効果上昇】【魔道具効果上昇】

「すごい…本当に5つセットできました…」
「これでネイルについては完璧かな」

うん、今のところベストな装備だ。

「すげぇなあ…貴族の土地を買おうってだけはあるよな…金持ちなんだな、シノさん…ところでさ、」
「ヴァトラさん、あなたが本当にシノ様に仕えるというのなら、シノさん、ではなくてシノ様、もしくは御当主様、ですよ？」
「う…分かったよネイル姉…し、し、シノ様……って、なんか気恥ずかしいよっ！」
「ふふ、今はまだいいさ。ヴァト君の仕事もまだ決めていないしね…で、なに？」
「俺にも…何か武器貸してくんないかな？ダンジョン潜るんだろ？手伝うからさ」

ものすっごく目を輝かせてこちらを見つめるヴァト君。

「うーん、今回はダメ。どこまで深いダンジョンなのか分からないし、そんな状況で君を守りながら行くのは危険すぎるわ…その内、ギルドに登録して、あなたの強さを客観的に測れるようになったらレベルアップに付き合ったげるから…今回は我慢してね」
「えぇ～？ずりぃなぁ、ネイル姉ばっかり」

「ヴァト兄、遊び気分だと危ないと思う」
「一方的にお世話になっている身だという事を自覚した方が良い」
「う…最近つっこみ厳しいなお前達」

妹分二人からの鋭い指摘にたじたじのヴァト君。

「あはは、まぁそういう訳だから今回はこれで我慢してね？」

ヴァト君の頭を胸に抱いて、いい子いい子してあげる。

「おおお…これが…伝説のぱふぱ…じゃなくてっ！ちょ…！こどっ、子供じゃねぇんだからやめてくれよっ！！」
「ヴァト兄、真っ赤になって鼻血出しながら言っても説得力無い」
「しかたない、あれだけは私たちじゃ無理だし…ヴァト兄、意外とムッツリ…」

自分の胸と私の胸を見比べて、ため息をつくメイディンとローリナ。
いや、羨ましげに見られるほどおっきくは無いですけどね…

「ちっちがうぞお前達っこれは不可抗力というかっ…」
「ヴァト兄のえっちー」
「えっちー」
「やかましいっ！てめぇらっ！用事が済んだらとっとと帰れ！」
…みんなまとめてポルテさんに怒られました。

※

さらに2日後、私はギルドから呼び出しを受けていた。
どうやら私が出した依頼の受け手が決まったらしい。
お昼過ぎに顔合わせという事で、私とネイルがギルドまで出向く事に。

※

ギルドに付くと受付嬢のミシェラさんが声を掛けてくる。
「シノさん！来てますよ依頼を受けてくれた方」
「ありがとう、どちら？」
「食堂で待ってるそうなので案内しますね」
食堂にミシェラさんと連れだっておもむくと、男性二人がエールを飲みながら私たちを待っていた。
「ダンさん、ディーンさん、依頼主をお連れしましたよ～」
ミシェラさんの呼びかけに席を立って近づいてくる二人の男性。
「こちらがご依頼人のシノ・カグラ様、そしてこちらが今回の依頼を受けた冒険者…」
「ダン・シーカー、レベル２５、ギルドランクＢの探索者（サーチャー）だ」
「ディーン・パウラ。レベル２２…ギルドのＢランク、聖騎士、です…」
黒髪のダンディなおじさまが探索者（サーチャー）のダンさん。
蜂蜜色の金髪のイケメン青年が聖騎士のディーンさん。

シーフ役とタンク役って所かな。
となるとパーティの役割は…
アタッカーの私（クノイチ）
回復、攻撃、魔法攻撃のバランスが良いネイル。
ダンジョン内の仕掛けに詳しそうなダンさん。
おそらくは回復とタンクを兼ねる事が出来るディーンさん。
うん、バランスも良い。なかなか良いメンバーだ。
「よろしく、助かるわ…私が依頼人のシノ・カグラ。こちらが私の…」
「シノ様のメイドをいたしております、ネイルと申します」
「よ、よろしく…シノさん…あのっ！」

急に大声になるディーン…どうした？
「はい？」
「シノさんはご自分の土地にダンジョンの入り口が出来てしまったとか…お困りでしょう！！大丈夫です！きっと私が…魔窟に巣くう魔獣共を一匹残らず駆逐し！あなたに安寧を捧げて見せます…」
がしっと私の手を両手でつかんで手の甲に口付けるディーンさん。
うわ、この人残念なイケメンか？
「…すまねぇな、依頼人さんよ…まあ、一種の病気だ。腕は確かだから我慢してくれ」
あ、こっちのダンさんはまともっぽい。

「…で、俺らと組む二人ってのはどいつなんで？」
「あ、私たち二人です」
「…あん？」
「だから、私とネイルが…」
「…あー…冗談？」
「だからー」
「シノ様、ここはお任せを」

私の代わりに前に出るネイル。

「…どうぞ、私のギルドカードです…全部表示状態にしてありますので、ご覧下さい」

カードをダンさんに差し出すネイル。

「ふー…カードが何だってん…だ？」
「どうしたんだ、ダン？」

脇からカードをのぞき込むディーン。

「ちょっとまて…レベル２０でＭＰ１１０５って魔術師の倍以上じゃねぇか！ありえねぇだろ！？」
「なっ…！？」

驚愕の表情の二人。そこにさらにネイルが追い打ちを掛ける。

「ページをめくって貰って…スキル欄も見て貰って良いですよ」
「スキル欄…？……！…ま、まてよ…なんでスキルスロットが五個あるんだ！？」

「レベル２０なのに五個？おかしいだろ！？」
「…言っておきますが、我が主…シノ様はもっと規格外です。あなた方が足手まといになる事はあっても、その逆はありません」
「言い過ぎよ、ネイル…ごめんなさいね、お二人にはとても期待しています。私たちはそもそもダンジョンを本格的に探索するのは初めてなので…屋外の戦闘とは勝手が違うでしょうし」

黙ってしまった二人…うーん、萎縮されてやっぱりやめます、とか言われると困るんだけどな。

「…そういえば聞いた事がある」
「何か心当たりでもあるのか？ダン」
「最近やたら強い二人組の女商人が、あちこちで魔物を狩りまくっているって…聞いた事無いか」
「…あ、海竜を倒したって噂もあったな…確かカグラ…屋…ん？カグラ？」

自己紹介した時の私の名前に気が付いたらしい。
しかし、結構噂になってたのか…目立ちたくないんだけどな。

「…ないしょ、ですよ」

私はそっと人差し指を口元に立てた。

お庭のダンジョン（3）（前書き）

やっとダンジョン突入。
ディーンさんがいい人になってしまった…

お庭のダンジョン（3）

「じゃあね、ヴァト君…どの位かかるか分からないから、とりあえずこれだけ預けておくわ」

ダンジョン出発の前日、宿で…私はそう言いながらヴァト君の手に金貨を5枚握らせた。

食費を基準に換算すれば日本円で約５００万円相当だ…もし、私たちに何かあってもしばらくは悪事に手を染めなくてもやっていけるはず。

「シノさっ…！！何だよ金貨って！金銭感覚どうなってんだ！？」

無造作に自分の手の中に置かれた金貨に目を剥き、声を上げるヴァト君。

…不良少年に金銭感覚の有無を疑われました。

「もちろん、全部使えっていうのではないわよ？これは私たちに何かあった時のための保険。戻ってきたら余分は帰して貰うわ、もちろん」

「それにしたって多すぎだっつーの……」

急に下を向いて黙ってしまうヴァト君…どうしたんだろう。

「なぁ…そんなに今回の調査ってやばいのか？」

「なぁに、心配してくれてたの？」

「ちっ、ちげぇよ！あんたが死んじまったら、また住む所無くなるからっ！」

ヴァト君、普通そういう事は当人には言わないものだよ？…可愛いやつめ。
私にはショタの気は無いはずなんだが…ちょっとなんかきた。
「大丈夫だよ～おねーさんは強いから。ちゃんと戻ってくるからいい子で待っててね？」
ヴァト君の頭を胸にかき抱いて頭なでなで。
「だぁ！またそれかよ！こ、子供扱いすんなって！」
む、早くも免疫が付いたか？今回は鼻血が出ていない。
「あ、ヴァト兄ばっかりずるい」「ずーるーいー」
「うむ、ローリナもメイディンもどんと来なさい」
腕の中から逃げ出したヴァト君の代わりに二人を招く。
「わーいぱふぱふー♪」
「うん、ふかふか。せめてこの位は欲しいの…」
ローリナは私の胸に顔を埋め、ぐりぐり。
メイディンはふにふにと私の片方の…その、おっぱいを触っている。
うーん、なぜだろう、ヴァト君にするより気恥ずかしいのは。
「同性だし、好きに触ってくれて良いんだが、後3～4年もすれば君たちも自前のがおっきくなるぞ？」
「じゃあ、あと4年はぱふぱふし放題！？」

なぜそうなる。
なかなか離れようとしない二人をネイルが引きはがす。
「二人とも、はしたないですよ？それにシノ様…！」
「は、はい」
はしゃぎすぎたかな…怒っちゃった？
「…後で私も…して欲しいです」
顔を赤らめてそっと耳打ちするネイル。
いかん…やはりネイルは別格だった…萌え溶ける…

※

ダンさん、ディーンさん、ネイル、私、の四人は例の土地の魔法陣ーダンジョンの入り口まで来ていた。
ヴァト君ら3人がお見送りに来てくれている。
「今までの例からしてこの土地の外へは魔獣達は出ないとは思うけど…念の為にこれも渡しておくわ」
ヴァト君に渡したのは一枚の召喚符。
「これは…？」
「これはね、私の呼ぶ『忍犬・銀牙』を一時的に召喚し従わせる事が出来る符よ」
「忍…犬？」

ちなみに「銀牙」は例の熊犬マンガが由来だ。

「うーん、戦闘訓練を受けた賢い犬、位に思ってて」
「犬、かあ…どのくらい強いの？」
「ええと、ホーンドウルフよりちょびっと強いかな」
「うそ！？Ｃランク相当ってこと！？」

私のレベルの約３分の１…ＬＶ２８の忍犬が召喚されるから、実際はもっと強い。
Ｂランクの戦士並の戦闘力はあるんじゃないだろうか。

「『銀牙』と名前を呼ぶか、符の持ち主に危険が迫れば召喚されるわ…丸一日経つか、召喚を解除するか、戦闘で敗れるまで効果は続くからね」
「…わかった」

これで後顧の憂いは無い。
…このとき私はそう思っていた。

※

ー地上一階ー

「…すげぇな…本当に街の中から続いてたんだな」
「失礼だぞ、ダン。シノさんが嘘など付く理由が無いだろう」

あの後、私たち四人は早速魔法陣を使ってダンジョンに潜っていた。
ここが地上に比べてどのくらいの階層なのか分からないが、とりあえず便宜上、一階、と呼ぼう。

この階層は私たちが出現した魔法陣のある付近こそ石造りになっており、人の手が入っているが、それ以外は天然の洞窟のようだ。
壁は岩肌となっていて、通路の幅は、前衛が余裕を持って剣を振るなら一人が精々だろう。
ダンジョンの内部は真っ暗という訳ではなく、わずかにコケのような物が発光していたが、視界の確保の為ネイルに『コンティニュアルライト』を掛けて貰った。

「気にしてませんよ？ギルドでも聞きましたが、街中から直接転移するタイプのダンジョンは珍しいそうで」
「シノさん…なんと心の広い…ええ、そうですね。双方向に自由に行き来できる魔法陣がダンジョンと直接つながっている、というのは危険すぎます。普通ならまずやらない事ですから。それに…」
「しかしここは…ほぼ天然の洞窟…しかも狭いな。隊列はどうする」

蘊蓄（うんちく）をたれるディーンさんを無視して隊列の相談をするダンさん。

「もちろん唯一、盾と金属鎧（バックラザレストプレート）をつけた私が先頭だろう」
「…まあ、妥当だな。お前の長剣（ディーン）はそもそも前衛じゃなきゃ意味がねぇしな…俺はクロスボウとダガーが獲物なんだが、姐さん達の戦闘スタイルはどんなんだい？姐さんのクラスはクノイチって言ったっけか、聞いた事がないクラスだが」
「そうね、私もどちらかというと前衛なんだけど、中距離も出来なくはないわ…ネイルはオールラウンドね」
「ふむ、じゃあディーン、俺、獣人の嬢ちゃんの順で、最後尾の後方の守りを任せていいかい」
「分かったわ」

幅2メートルほどの通路を隊列を組んで進む私達。

１０分ほど進むと道がＹ字に分かれている。
右手の方がわずかに上っているようだ。
「とりあえず右手に行って登ってみようぜ…ここが自然の洞窟だとしたら登っていけば外につながっているかもしれない」
「そうね、ダンジョンの所在地が分かればそれも重要な情報だしね」
私がダンさんの言葉に同意すると他のメンバーも否は無いようだったので右手方向へ進む。
すると、今度は5分も行かないうちに洞窟に明かりが差し込んできた。
「これは…」
「外、ですね…まさか本当に外に続いているとは」
拍子抜けしたようなディーンさん。
「外は…森、だな…子鬼（ゴブリン）や巨大蛞蝓（ラージスラッグ）、翼刃蝙蝠（ブレードバット）あたりはここから迷い込んだか」
「外がどのあたりか分かる？ダンさん」
「流石になぁ…植生からして隣国までには行ってないみたいだが」
「…凄いね、これだけでそこまで分かるんだ」
「とりあえずさっきの分かれ道を反対に進んでみるか？」
「そうね」
振り返り、ダンジョンの入り口を見たダンさんが何かに気付いたように急に足を止めて地面を調べだした。
「…なるほどなぁ…魔物除けの陣が反対方向に書かれてやがる…

一度この洞窟に入った低レベルな魔獣はなかなか出れない仕組みか」
「魔物除けの陣？」
「ああ、結界石と違って弱い魔物や魔獣にしか効果がないが、効果は半永久的だ…それなりの魔術師にしか敷けないはずだがな」
「…ダンさんを雇って良かったわ。ダンジョンだけじゃないのね、詳しいのは」
「まぁ、伊達に探索者（サーチャー）を名乗ってねぇさ」

あれ、ディーンさんが泣きそうな目でこっちを見てるけど、どうしたんだろう。

「ディーンさん」
「…なんだい、ネイル君」
「…ウチの主はいろいろな意味で手強いですよ」
「こ、これからだよ僕の真価は！」

何か分からないけど気合いが入っているな、ディーンさん。

「さて、戻ってもう一方の道に行きましょう」

私たちは再び洞窟の中へと足を踏み入れた。
ネイルにお願いしてコンティニュアルライトをかけ直す。
しばらく歩いてY字路まで戻ってきた。
ここを今度は反対側へと進む…しばらく歩くとキーキーと耳障りな声が聞こえてきた。

「気を付けな…ゴブリンの鳴き声だ…」
「ゴブリン程度何ほどのものか！」
「声がでけぇよディーン、数がいたり上位種がいれば…負けるとは思わんが面倒だ」

「ふ、ならば私一人で蹴散らしてくれよう！シノさん、見ていて下さいっ！」
「えっ？あっ…」
ディーンさん、行っちゃった…
「あの馬鹿…悪いな姐さん、普段はもう少しまともなんだが…いいとこ見せたいんだろう」
仕方なく残りの3人もディーンさんに早足で続く…すると、教室の倍くらいある広い部屋に出た。
「いくぞっ！必殺のぉぉぉぉ！！イヴィル・ブレイカァァァァァッッ！！」
そこではディーンさんが２０数匹のゴブリンを相手に大立ち回りを演じていた。
流石（さすが）Ｂランク、全くゴブリンを寄せ付けない強さだが…
「ネイル、あそこ、石筍（せきじゅん）の影…魔力の気配がする。吹っ飛ばして」
「はい、シノ様」
ネイルが取り出したのは今回の新兵器、炎（ファイヤーボール）のお玉。
「あ？おい、こんな時に何をふざけて…」
「火炎球（ファイヤーボール）」
ネイルが唱えたキーワードによって炎（ファイヤーボール）のお玉はネイルから必要な魔力をくみ上げ、火炎球の形に構築し魔法杖（おたま）の先からそれを撃ち出す。

その威力は『魔道具効果上昇』によって1．2倍に増幅、『家事道具習熟』によって15％プラス、お玉の装備効果によってＩＮＴ＋1されており、複数のブースト効果によっておよそ1．4倍にまで上昇している。

つまりー

どっごぉぉぉぉぉっんっ！！

ディーンさんの背後から魔法を放とうとしていたゴブリンメイジは、その周辺のゴブリン数匹と共に爆炎へと消えた。

「…嬢ちゃんは本職の魔術師じゃないんだよな？」

「ええ、私のクラスは『ルミナスメイド』です」

「それにしちゃあ、本職も真っ青な威力だと思うんだが」

「シノ様が私の特性に合わせて作って下さった魔法杖（おたま）ですから」

「…創造者（ザ・クリエイター）の二つ名は伊達じゃない訳か」

「ちょ…ダンさんっ！何、その恥ずかしい名前っ！」

「いや、姐さんの名前は最近有名だぜ？短期間に大量のマジックナイフを作り上げたり、全く新しい魔導具を作ったり…その筋の者達からは創造者（ザ・クリエイター）って呼ばれてるって聞いたな」

「中2病的二つ名は成人式過ぎた女子には精神的ダメージがきついの…」

私が思わぬ精神的ダメージに落ち込んでいるとディーンさんが戻ってきた。

「シノさんっ！見ていただけましたか！僕の勇姿を！！」

「あほぅ」

がこん！

「いっ…痛いな、何をするんだダン？」
「げんこつ一発で済んで幸運と思え…依頼人の姐さんがゴブリンメイジを見つけてくれて、嬢ちゃんがファイヤーボールでぶっ飛ばしてくれたんだ…お前、後ろから魔法で狙われているのに気付いてなかったろ？」
「うっ…」
「いつも通りでいいんだよ…偵察も作戦も無しで突っ走りやがって…俺たちの仕事の第一は『安全』だ」
「…悪かった」

何か知らないけど、ディーンさんは張り切りすぎて暴走したらしい。
ダンさんに諭されて反省しているみたいだからもう大丈夫だろう。
…ん？これは…宝箱？

「宝箱…たぶんゴブリン達の集落だったのね…開けちゃうわよ？」

『宝箱罠調査』…発見。ポイズンニードルか。解除…開けますよっと。

「宝箱？だめだ姐さん！俺に任せー…て、あれ？罠、無かったのか？」
「いえ、毒針があったけど解除したわ」
「姐さん、宝箱の罠まで解除できるのか…」
「んー…というより宝箱の解除しか？」
隠し扉（シークレットドア）の発見とかダンジョン内のトラップとかには無力だ。
「戦オン」には無い要素だったからね。

宝箱の中身は…銀貨が２０枚ばかりとヒールポーション（小）か。
「たいした物無いなぁ…良かったらみんなどうぞ」
「…いいのか？…そういえばダンジョンで見つけた物の分配を相談してなかったか…依頼者が仲間だとは思わなかったからな…」
「うーん、基本、お金とかポーションの類はそちらが持ってっていいわ。その代わり宝石とかマジックアイテムが出たら相談して分けましょ」
「…いいのか？俺たちはそれ以外にも報酬がもらえるんだが」
「かまわないわよ」
「すまねぇな、助かる」
「いえいえ…さて、一通り戦果を回収したら行きましょうか…地下へ」

ゴブリンの住処のすぐ奥に地下へ潜る階段が見えていたのだ。
私たちはそこに足を踏み入れた。

※

ー地下一階ー

地下に降りると、そこは明らかに人の手が入った空間だった。
滑らかに削られた石壁、一定の広さに整えられた通路。
「急に広くなったわね…それに通路が人工物のよう」
「ああ、こっからが本番って事なんだろう」
よし、気合いを入れ直すか。
「隊列を組み直した方が良いかな？ここなら二人前衛が並べるで

しょうし」
「…だな、姐さんディーンと一緒に前衛をいいか？」
「ええ」
「何を言うんだダン！シノさんを矢面に出すなんて！」
「あら、私が隣じゃお嫌？」
「いっ！いぇっ！！そうではなく…」
「じゃ、決まり、ね？」

という事で、ここから先は前衛が私とディーンさん、中衛がダンさん、後詰めがネイル、と言う形になって進む事になった。
地下の広さは地上部分とは比べ物にならないほど広く、かつ、入り組んでいた。
階段を下りてからすでに３０分ほど私たちは歩いていたが、階段も敵にも会ってはいなかった。
緊張が途切れかけたその時…真っ先に異変に気が付いたのはネイルだった。

「シノ様…この先、何か、います…」
「ん、了解」
「うん？俺には特に音も聞こえないが…何で分かった」
「ダン様、私たち獣人は人族より嗅覚が鋭いのです…何か生臭い匂いがします」

果たして。通路の先にはネイル言う所の生臭い匂いの元がいた。
「こりゃあ…厄介なやつだな。人喰長虫（マンイーターワーム）だ…強さはせいぜいＣクラスだが、再生能力を持っている。一気に仕留めないと回復していくぞ」
私たちの視線の先には３匹の巨大な…胴の回りが人の頭ほどもあ

るミミズが蠢いていた。

「うぇ…精神的にきついわね…さっさと終わらせましょ」

「おうっ！」

私とディーンさんが飛び出し人喰長虫（マンイーターワーム）に斬りつける。

私は技能を使うまでもなく、左右の二刀を一閃し、それぞれ一匹ずつワームの頭を切り落とした。

もう一匹はディーンさんの一撃とネイルの『闇薙（やみなぎ）の包丁』による『光弾』で止めを刺された。

「お見事、さすがね…どうかした？」

私はなぜか呆気にとられたような表情でこちらを見ていたディーンさんに声を掛けた。

「いや…ネイル君から聞いてはいたが…予想以上に鮮やかな手並みだったので」

「ディーン様、私は言ったはずですが。『我が主はもっと規格外です』と」

「そうだな、いや、すまない…シノさんの腕は多分僕より…数倍上だろう」

自分と仲間と敵の力量を客観的に見る事が出来るのは大切な事だ。

その点、ディーンさんはやはり優れた冒険者なのだろう。

自分より年若い女の力量を素直に認める事が出来るのだから。

「さあ、討伐部位を取るんでしょ？グズグズしていると時間が…あれ？」

人喰長虫（マンイーターワーム）がすぅっ…と消えていく。

「ああ、ダンジョンに埋め込まれた召喚機能で呼ばれた魔獣や魔物は、死ぬと元の場所や世界に戻るんだ」

ダンさんが説明してくれる。

「ゴブリンは外からダンジョンに入ってきて住み着いたから消えなかったのね」

「そう言う事…その代わり魔石は落としやすいな。『魔力で縛られていたのが解放されるから、余った魔力が凝って魔石になる』、って説があるが」

「なるほど…これかな？」

以前拾ったデス・マンティスほど大きくはないけど似たような物が落ちている。

「おい、言った先からか…幸先良いな」

「いいよ、どうぞ？」

「いいのか？」

「この位の物はあんまり使わないし」

「じゃ、ま、ありがたく」

私たちが地下2階への階段を見つけたのはそのすぐ奥での事だった。

お庭のダンジョン（3）（後書き）

お庭のダンジョン編、長くなってしまいました。
もう少しおつきあい願います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7892z/

偽クノイチ異界譚

2012年1月12日02時29分発行